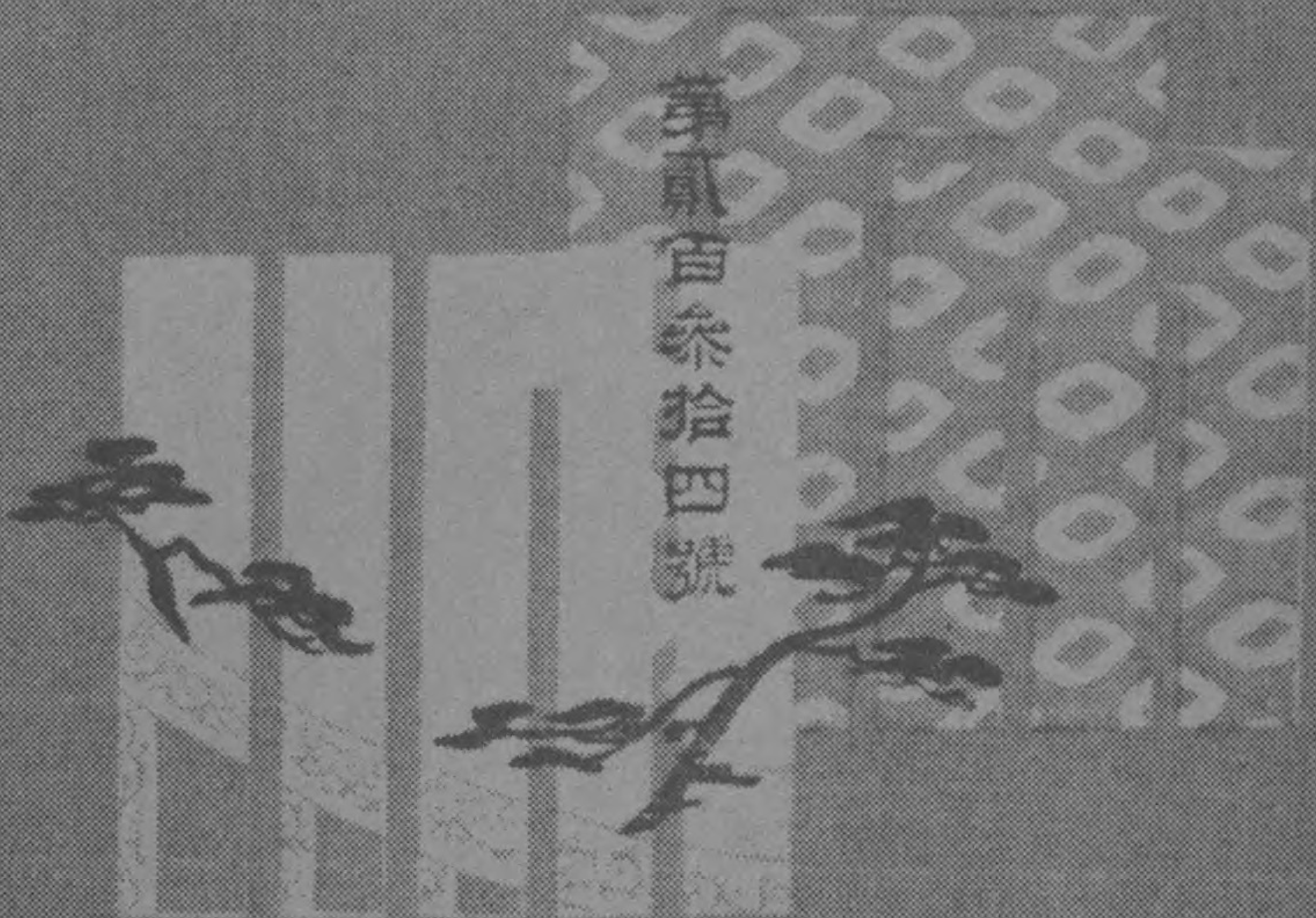
【毎月二回五日、廿日發行明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可】

明治三十四年八月五日發兌

女鑑



第貳百叅拾四號

女鑑第貳百參拾四號

目　録

定價

一冊 前金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓十錢
廿四冊一年分 前金壹圓廿錢
全國無遞送料

明治三十四年八月四日印刷
明治三十四年八月五日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七番）

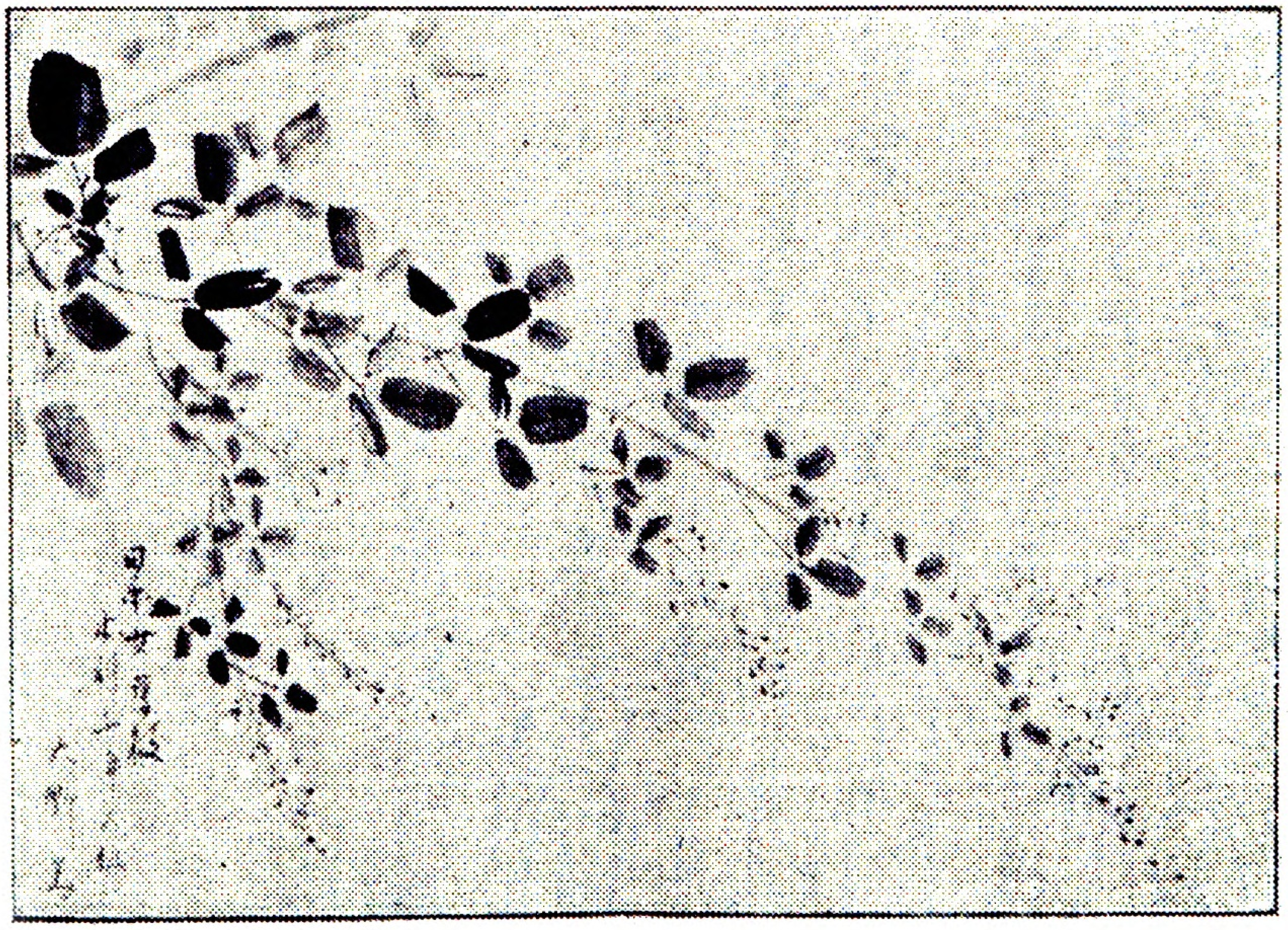
時計は堅牢最新形實用裝飾兼備を撰ぶ
美術品は意匠卓絶製作精妙なり



從來商品は階上にのみ陳列せしが今般
階下も亦陳列場となし總て最廉の正價
を附して顧客隨意御覽撰擇の便に供す







[illegible]

ふみより　母

縫一とのへ

平和なる生活

平和ある生活、痴者狂者にあらざるかぎりは、男女老幼を問はず、平和ある生活を希望せざるものはあらざるべし、然るにもかゝはらず、平和なる生活を得るもの、甚だ尠き所以のものは、蓋し、其の希望を遂げむとするに困難あるを以つて、いまは、既に自暴自棄の境に沈み、却つて、不愉快千萬なる生活を爲すに至れるが如し。

果して困難なるか　平和ある生活を得むことは、實際、非常に困難なるべきか、若し、今日の家庭の狀態を、そのまゝに維持せむとならば、或は、非常ある困難を感ずべきのみあらず、到底、平和なる生活を得ること能はざるべしといへども、少しく、家庭の改善に意を注がば、決して、困難あることにあらず。

家庭の改善　今日の家庭に於いて、先づ、改善せしめむとするは、家庭を形成るところの人々總べてが、各自くその位地を認識せむことあり。勿論、長者の命を

奉し、老者の意に逆ふまじきことは、家庭の秩序を維持するためのみならず、我が國倫理の大綱として忽諸にすべからず。たゞ、今日の通弊は、他にのみ責任を負せて自己の位地をすてむとすること是なり。衛生のことについて、其の一例を擧ぐれば、自己一身の不注意が、如何に世間に害毒を及ぼすべきかを顧みず、警官の目をかすめ、衛生官吏を瞞着してさへ、家屋庭園の掃除を怠らむことを計るが如き、畢竟、社會の一部分を保てる、自己の位地を守ること能はざるに因る。即ち、この通弊を矯正するにあらずむば、平和ある生活は望むも得べからざるなり。

家庭に於ける各自の位地　家長主婦たる人が、其の家庭の秩序と平和とを維持すべきはもとよりのことなれども、家族も亦、家長主婦の指導教戒に服從して、同じく、秩序と平和とを維持せむことを努めざるべからず。少くとも、其の家族の一人の不柔順不規律なる行動は、家族全体に、苦痛と汚辱とを與ふるものなることを識らざるべからず。然るに、當今の家庭は、之を家長主婦の責任にのみ歸して、他は皆、關せざるが如き態度をとるもの多し。これ先づ、第一に矯正せざるべからず。さても、遂げがたきむかりの難事にもあらざるをや。



夫婦の道（天）

三輪田眞佐子

夫婦は、人倫の大綱あるを以て、一家の平和幷に一國の風教上、最も重大なるものなり。然るに、近來破鏡の歎きを以て、殆ど人生の恒と見るばかり、日に增し多きを加ふるぞ、いと憂たてき。蓋し、其の反動として、不婚論を唱ふる女子も出づべし。獨身論を取る男子も現るべし。されば、苟も、社會の經綸を以て任ずる道德家、若しくは敎育家たるもの、默視すべきにあらざるべし。

聞く、今日夫婦相和せざる原因を以て、悉く、わが國の家庭組織全く宜しきを得ざるに歸するものありと。固より、目下、わが國民の思想は、新舊の調和を得ざるため、衝突するは、萬事につきて免るゝ能はずと雖、單に、其の衝突のみを以て離婚の原因とするは、至當と言ふべからず。

思ふに、家族の中心は夫婦なり。故に父母たるべきものが、息女若しくば息子のため、配偶を撰擇するに當り、獨り、父母の意見のみを以て決定すべからず。必ず、夫婦たるべきもの丶意見を根底として、父母互に協諾を與へ、或は、忠言を加ふるを以て主當と信ず。既に、家庭を作るに於ても、夫婦相和樂して、共に、舅姑のため、孝養を盡すべきものぞかし。然るに、世の衝突を見るに、夫婦たるべきもの丶熟考を待たずして、父母の隨意に婚を議するものあり。加之、其の家庭を作るに當りて、婦の舅姑に事ふる道足らざるものあるに

あらざるも、多くは、猜忌心を以て婦を惡み、以て、一家の風波を生ずることあり。これがため、婦姑別居論を生ずるに至るならんか。

右の如き、婦姑の不和を以て、世人は、其の思想の同じからざるがためとするものありと雖も、其の實は、婦姑共に、女子に固有なる性情の弱點より起るものなり。如何となれば、思想の上より見れば、婦舅も、亦等しく新舊の差あるべきに、何所の家庭に於ても、婦舅の衝突は、婦姑の衝突の如く、甚しからざるを以ても知らるべし。されば、強ち、婦姑の有する思想の新舊のみを以て、不和の原因とするは、理由なきことならん。

勿論、わが日本の如き家族制度の國に於ては、父母兄弟と、夫婦と同居する場合多きを以て、勢ひ、不如意の事多からんも、苟も、夫婦たる以上は、夫の辛苦は、妻のためと思ひて忍ぶべく、妻の窮厄は、夫のためと考へて忍ぶべし。などか、一家の不和より、夫婦の義を破るべき。そもそも、夫婦の情交は、種々の葛藤を經て、愈、濃かなるべきなり。古人が糟糠の妻は堂より下さずと言ひしは、さもあるべきことぞかし。例之ば、わが國の大儒伊藤仁齋は、清貧洗ふが如きを以て、正月に餅を作る能はざりしかば、其の兒、幼にして未だ親の心を知らず、時に、隣家の餅をつく音を聞き、わが家にもと望みければ、其の妻、これを聞き、腸を斷つばかり感ずるを、如何せん兒を制する能はざるより、良人の羽織を典し、兒の意を充しゝとかや。實に、斯く辛酸を共にせしを以てにや、其の妻の死せしとき、

人もをし我身も悲しとにかくに
　おもひ出づれば涙ありけり

と詠みて、妻の兄弟の許へ遣はしけり。亦、知人

のもとへ、

みどり兒を見れば涙の數そひて
　わりし昔ぞいとゞ悲しき
おもひしれ馴し夜床のそれよりも
　只明暮ぞ面影にたつ

と歌ひて贈りけり。蓋し、儒者は、なべて、妻のことを、故らに口にせざる習なるのみならず、仁齋は、多少和歌を詠みしと雖も、其の中、一首だに戀情らしき歌はなきほどの人なるに、何ぞ斯く亡き妻を忍ぶを以て、如何に、交情の密なりしかを知るに足らん。

要するに、夫婦の道は、我を忘れて相愛するにあり。他の事情のため、一生の契を破る如き、人倫に戻るものと言ふべし。

婦人と地理

矢津昌永

日本人の宿弊は、島國的根性にあり。智見の狹隘なるにあり。眼界の卑近なるにあり。而して、此の宿弊は、特に、子女教養の大責任者たる婦人に於て然りと謂はざるを得ず。而して、此の島國根性、智見狹隘、眼界卑近の諸弊が、如何に我國の不利益を貽しつゝあるかは、今更、余が事々しく言ふ迄もなく、媛孃諸君は、既に、悉知せらるゝ所なるべし。余は、唯々、二萬七千方里ある掌大の土地に、四千八百餘萬と言へる、世界稀有の大人口を有するに至れる一證だに擧ぐれば、既に足れりと信ず。

島國根性ある宿弊は、我が國が、小さなる一島國たることを明瞭にすれば、既に、幾分か、此の弊

を救ふに足るべし。智見の狹隘なるは、海外萬里の事情を知らされば なり。眼界の卑近なるは、一幅の世界地圖を觀れば、既に、眼界を遠大ならしむるを得べし。斯の如く、我が一小島國たるを明瞭にし、海外萬里の事情を知らしめ、世界地圖を觀察せしむる等、是悉く、地理學の範圍たるに外あらず。

ボナパート、ナポレオンが、歐洲一統の鴻志を抱けるは、其の書生時代に、獨り、樹陰に默座して、世界地圖を展き見るを以て、無上の娛樂と爲せる時に基すと謂ふべし。……否、此の地圖披見の趣味は、其の慈母搖籃中よりの敎訓にありと謂はざるを得ず。ビスマークが、獨逸帝國中興の偉傑たるの發は、小少にして、旅行の奇癖ありしに基因す。此の奇癖は、既に、幼時地理敎訓の結果ならずんばあらず。コロンブスが、新世界發見の偉績を奏せし、マゼーランが、世界週航の雄志を抱ける、皆、悉く、幼時卓上に於て養はれたる地理的觀念の、發して、實地試用となりしに外ならざるなり。豐太閤征韓の雄圖は、彼が、曾て、支那の事情を聞き、朝鮮の地理を行長に授かりしによれり。賴山陽の博識一世を壓し、發して雄篇となり、長詩となりたるものは、彼が、日本國を踏破し、在らゆる山河を跋渉せし効、必ず、其の過半に居らん。而して、此等の英傑は、其の幼時を問へば、必ず、斯く成るべき多少の素因なくんばあらず。素因とは何ぞや。幼時襁褓中の地理的（少なくも其意義）敎訓（例へば、桃太郎、鬼ヶ島（地理）征伐的）是なり。一に、地理と言ふ。其の範圍頗る廣し。兒童日常の質問は、其の過半は、地理的範圍を出でざる事多し。而して、其の質問に遇ふ毎に、猶豫なく、誤謬なく、兒童智識の度に應じて、諄々として、

適當の說明を與へ、兒童に滿足を得せしむるは、實に、婦人の任たり。然るに、昔のお婆さんも、今の令夫人も、相替らず、太陽はお日樣にて、中には翅る烏あり、太陰はお月樣にて、餅を搗く兎宿れり」の說明にては、徒に、兒童の妄想を誘致して、所謂先入主となり、遂に、後年の憂を貽すに過ぎず。又、兒童が、日々、途中に於て蹴上ぐる頑石、擲つ礫の出所、雨中眼前に横流する潦水の行く先き等は、常に、幼き黃口より出づる、高尙の質問なり。此等の質問に對しては、少しく地文學の素養ありて、平易にして趣味ある談話を試みなば、後年、學校教室に於ける良教師が、百の講義にも勝ることあらん。日常、家庭の談話に於ても、荒唐無稽なる、若くは、殘酷非道なる有害無益の世事人情談等に代ゆるに、慈母の口よりして、佛國「エッフエル」高塔の霄漢を摩する奇觀の話、亞弗利加內地の珍談、印度の虎狩り、亞米利加の廣大なる富、濠洲の奇妙なる獸類、美麗なる鳥類等の面白き說話出て、助くるに、兼て供へ置ける世界週遊畫報等を以てせば、兒童の心氣を開弘し、世界に對する思想の基をなすこと、蓋し、幾何ぞや。

更に、尙、婦女子の注意すべきは、必ずしも、歐羅巴と云はす、必ずしも亞弗利加と云はず、將た、米國濠洲と云はず、兒童の、常に目擊し、常に遊嬉する、其の週邊に羅列散在する地理事物に就きて、地理的說明を與ふる事是なり。其の居住する市町、又は、村落の組織、歷史、位置、人口、或は其の後に峙つ山、其の傾斜、其の高さ、或は、又、其の前を流る丶河、其の源、其の流域、其の長さ、其の幅、其の注ぐ所、若くは、居村を圍む森林、平野等總て鄉土の地理的事情を悉知し、何

時にても、兒童の質問に應じて、猶豫なく、誤謬なく、說明を與へ得る丈けの、豫備をなし置かざるべからず。決して、之を「學校の鄕土地理の敎授に待つ」と言ふ勿れ。而して、此の鄕土地理觀念は、後日、其の府縣管內より、進んで日本全國に及ぼし、尙、進んで、世界各國の地理を學ぶ基礎智識と稱すべきものなれば、最も能く注意せざるべからず。我が町村の人口は、後日學ぶ他の人口を量る外に用ゐ、鄕里の山の高さ、河の長さは、他の山河を計る尺度とし、其の地勢、其の風土も、亦、悉く之を比較の標準に使用せざるべからざる、重要の材料たればなり。

語を寄す、世間幾多の我帝國將來の國民養成の大任ある、巾幗諸媛よ。將來の帝國を組成する我が國民には、今少しく快濶に、今少しく大膽に、又、今少しく遠大の氣風を供へしめよ。我が國は、今や時勢の進移に驅られて、日本の日本を出で亞細亞の日本となり、又、亞細亞の日本を脫して、世界の日本となれり。國民の氣風のみ、豈に獨り、古風に、卑屈に、島國性たることを許さんや。今や、時既に盛夏に際し、學生は笈を負うて、懷かしき古棲に歸り、曾て、夢寐の間に往來せし、古鄕の山、古鄕の水に接することを得たり。地理研鑽の機會、此の時より好きはなし。よし、又、學生にあらざる秀閨令孃諸媛とても、或は良人と共に暑を山間に避け、或は父母に伴はれて、浴を海邊に試みるの時期となりぬ。實に、地理實地の觀察は、此の時にあり。卓上書籍によりて得たる智識は、之を實際に見て、其の智識を確實ならしむべし。又、常に、都會の生活を營み、山高海濶の大景を知らざる人は、其の雄偉を見て、天然力の盛なるに感ずべし。兎に角、今三四旬間は、實地

經驗の好機なり。此の好機、決して空費すべからず。今日、我が國情の許す範圍に於て、成るべく旅行し、成るべく多くの事物に觸接して、其の智見を開拓することを務むべし。現今の、我が國は、米國の女學生の如く、學友相携へて、湖畔天幕露宿の避暑旅行を許さず。又、歐洲婦人の如く、山間天幕旅行の如き大膽なしと雖も、而も、其の家格に應じ、其の體質に應じ、成るべく姫樣旅行を避け、研學旅行の意を忘るべからず。

女子の學問（三）

岸田松二郎

修身科 一

修身科を、重要なる學科として、學校教科の中に加へらるゝ所以は、何ぞと問はゞ、何人も、此の解答に困むことなきは明かなり。而して、此の科の目的は、那邊にあるかを問はゞ、是亦、容易に答へ得べし。猶亦、此の科の價値をとはゞ、是亦問ふの必要なしと冷笑するなるべし。既に、此の科の性質を知り、此の科の目的を諳し、亦、其の價値を知りて、而して、實績の舉否如何を詮し來らば、比較上、他の學科の如き明確なる効果を観難き所以のものは何ぞや。父母に孝なるべきは、六才の兒女も猶之を知れり。兄弟に友なるべきは、家庭の教訓によりて、既に明知する所なり。凡そ、人として行ふべき彝倫の道は、小學の門に入りたる始めより、其の卒業の時期迄、幾數回是を反覆せらるゝかを知らず。故に、之をなすべし、之をなすべからずとの徳義的奨勵禁壓は、甚だ能く是を審かにし、小學以上の學校にありては、更に進で、其の原理原則をも攻究解説せらるゝが故に、

道義的知識は、實に、豐富となるに至れり。然れども、智識其の物の爲めにあらずして、偏に、實行を期するを以て本科の目的となし、眞價となすなり。是を以て、道義的智識なるものは、實行の道案内者たるに過ぎざることを思はざるべからず。然るに、此の種の智識を得、此の種の推究に明かなるを以て、道徳的修養の目的を完遂せりと速斷するが如きは、誤認も亦甚しからずや。古人の、鸚鵡能云へども飛鳥を離れずと云ひ、亦、言に訥にして行に敏ならむことを欲すと說かれたるは、誠に、不誠實なる言語の價値なくして、誠實なる徳行の、寧、尊重なる所以を謂ふなり。抑、人の道徳的智識を移して、更に、之を實行の上に現出するは、全く、意志の力に外ならず。盖、意志の力なるものは、習練の功を積まざる時は、極めて、薄弱なるものにして、例へば、力士が習練を累ねて、偉大の力量となるが如し。意志の力、既に、習練の功によりて鞏固なる時は、乃ち、知行一致の人となりて、其の生活の狀態たる、秩序あり、規矩ある人となるなり。而して、此の意志なるものは、動もすれば、感情の奴隷となり易きものにして、感情のためには、智識其の明を失ふこと甚だ多し。然るに、之を適度に制抑して、正義正道に向はしむるものは、全く、意志の力にして、此の力の強弱は、即ち、感情の人となると、正義の人となるとの岐路なりといふべし。今、夫、善のなすべく惡の避くべきを知りて、而かも、善に趨かざる所以のものは、洵に、意志の力の弱きに職由せすんばあらず。此の練習は、即ち、口舌を以てするの謂にあらずして、寧、力行如何を顧るのみ。今や、智識技能を磨くが爲に、學に入り、師に就くを聞く。未だ、意志の習練のため

に、師を求め、學に就くを聞かざるなり。學校を設け、師を選びて、生徒を待ち、規律を定め、法則を設けて、生徒を養はんとするも、之が門に入るもの、道心修養の志なくんば、焉ぞ、徒爲徒法に屬せざる得んや。嗚呼、古人の嘉言善行をきゝて、自から、期待するの心なく、哲人の眞理倫道を讀みて、自から、道に進まむとするの勇なくんば、幾千萬卷の書を讀み、幾千萬人の徳行を聽くも、徒らに、心意の不消化物となりて、徒に、口舌の人とならむも、徳行の人たる能はざるなり。夫、既に、女徳の人たる能はずんば、終生、此の科の落第者たりと云はざるを得ず。既に、此の科の落第者たらば、如何なる高等學科の卒業生と稱すと雖ども、余は、之に與みする能はず。余は信ず。修身科の眞價は、反省の人たるにあり、力行の人たるにあり。



日本女訓（未定草）

川崎重陽

五、みだりに、物におそれず、難事にあひても、たゆむことなきは、我が國、古來、女子の風習なり。つね〴〵、心根を、たしかにもちて懦弱のふるまひあるべからず。まことの柔順の徳は、このたしかなる心根より生ずるなり。

六、物ごとに、清潔をたふとぶも、また、我が國、古よりの、よき習はしなれば、女子は、ことに、心をもちゐて、この風をやしなひ成し、

身をも、心をも、つねに、清淨ならしむべきなり

七、つねく、質素を、旨として、奢を戒むべし。華美を好むものは、必、外方にのみ走せて、内を修むるにいとまなく、質素なるものは、心、つねに、内に向へば、身もをさまりやすし。

八、常に、養生に注意して、身體を、健全に保たんことを心がくべし。もし、身體虚弱にして、やゝもすれば、病におかさるゝが如くならんには、己が本分を盡すこと能はざるべし。

孝婦おいし

新井無二郎

周防國、吉敷郡、大道村に高き山あり。岩淵山といふ。巍々として雲間に聳えたり。此の山の半腹に、名高き觀音の堂あり。近在の人々、參詣絶ゆる事なし。さて、これに詣づる者は、必ずその麓に建てられたる石碑を、讀みて行かざるものなし。これなむ、その節操の色は、此の山の松のいろよりも青く、その行の德は、此の山の高きよりも高き、孝婦石川おいしの事蹟を記したる碑なりける。

お石は、重郎右衛門といふ者の女にて、年十九の時に、おなじ村の、伊八といふ者に嫁しぬ。舅を關藏と呼べり。伊八は、この關藏の弟なり。初め、關藏田畠二町ばかりをもたりしが、夫婦とも蹇にて、子さへなかりしかば、伊八に家を繼がしむ。關藏夫婦の病を治療の爲に、もたりし田畠も賣り盡して、今はなくなりぬ。これを見て、親戚の者ども計ひて、伊八を旅商人となして、出しや

りぬ。幸なや。伊八は、旅のそらにて、思はぬ損失にあひて、歸りくべき心地やせざりけむ。ふつに音信さへせで、その後十年を經ぬれど、更にかへりくることなし。あはれ、その間、留守をまもりて、明し暮しけむ石が心は、いかにかありけむ。僅に、ひと月ふた月ばかりだに、空閨を守るとしいへば、なべて、いぶせく思ふなるに、足さへ起たぬ舅姑を、身ひとつにいたはりて、たのみに思ふ夫とては、十年までも歸りこず、生死さへ定かならぬを、心細くも待ち渡るらむ胸のうちは、小牡鹿の兒孕み、山烏の頭白ぐるをたのむるにひとしかるめり。石の父母は、このさまを見るに得耐へず、年もまだ若ければとて、その再嫁を勸めぬれど、思ひもよらぬ事なりとて、動くべき氣色も見えず。或時は、舅姑を脊に負ひて寺に詣で、或時は、抱きかゝへて厠に行きなど、心を慰め身を養ひて、そのひまには、苧をうみ糸をくり、人に傭はれて走りありき、一日片時も休み怠る事なく、少しの餘だにあれば、舅姑の口腹をやしなひけり。

嗚呼、此の孝婦の誠意赤心を、見る者聞く者、いかで感じ思はざらむ。石の隣家に、熊女といふ者あり、朝夕、石の行を見るにつけて、おのづから、之に習ひ化せられ、親に仕ふる事いとまめやかに、孝養怠らぬやうになりにけり。德孤ならず、必ず隣ありといふ本文にたがはで、いとめでたく、うるはしく、限りもなき美談なりけり。

遠近の人傳へきゝて、隠れもなかりしかば、文政元年代官所より米一俵を賜ひぬ。其の年の冬、藩主毛利公、小郡(大道村の隣村なり)にいでましゝ時、石を召して鳥目二貫文を賜ひぬ。同三年郡奉行巡回して、米一俵をとらせぬ。その翌年、

所務代官も、亦、米一俵をとらせぬ。明くる年の春、舅關藏は、病癒えで遂にみまかりぬ。之れよりさき、お石の夫伊八は、久しく他國にさすらひてありしが、ふるさとある妻のお石が、孝養節操のほどを傳へきゝて、遂に歸り來り、諸共に、孝養を盡したりしが、關藏のみまかりし年、伊八も病みてうせぬ。文政六年、米二俵を賜ひ、其の明年石の生涯地下足役を免除せられ、その年の末に、米一俵を賜りぬ。姑は、關藏の死後、十年にして失せぬ。時は天保三年なりき。同年十月積年の勞を稱せられ、銀二枚を賜ひぬ。弘化三年その家の門に、孝女お石と旌表せられぬ。文久二年十二月十四日、天府を以て失せぬ。年七十四。その子孫も、その家も、今に傳りて、旌表の標榜さへ、門に存りて、文字のあと、わざやかに讀まれぬ。

彼の山陽列車は、煙吐きて此の屋の前を走る如くありにたるが、旅客は、窓にうちもたれて、幾度か見るあるべし。されは、此の茅屋の見るかげもあきには、必ずよ眼には入らじ。あはれ。甍をきそふ金屋のうちには、人の道にけうときが多く、光を葆むまことの人は、蓬草のもとに住めるがおほきぞ、世の習ひある。お石の碑文は國學者の泰斗、近藤芳樹翁が物せられしなり。今左に之を揭げてむ。

孝婦阿石之碑

いしは、此里の女あり。家貧しくて、朝夕の烟もたてがたかりしかば、夫なりはひのために、旅にゆきてかへらず。いし獨舅姑の足なへの病にいたづけるを、晝は背おひて寺に詣で、夜はいだきてかはやに行きなど、手弱女の力にたへ難き事をばしつゝ、雨もり風ある〻窓のも

とに、麻績糸くりて、年あまたへにけり。その行ひ官府に聞えて、みつぎをゆるし、物を賜つるみうつくしみ、おぼろげならず、終に夫はこれを傳へきゝ、他の國より歸り來て、もろともに孝養を盡しけり。かくて、ふたりの親みまかりける後に、民籍にはたぐひ稀なる氏をさへ賜りて、いとゞ家の門を旌はせり。これ弘化丙午の年になんありける。隣にくまといふ女あり、石が行にならひ、親に仕ふる事まめなりけり。あはれ石が徳孤ならねば、たゞ熊女のみならじ、推およぼさば、東いは國山を極め、西豊浦の洲をつくして、人の子、人の妻たらん者、皆めでまねびぬべくこそ。

いは淵の底さへ照りてしづく玉
いしとはいはじあはびその玉

元治元年秋七月　　藤原宜寸

翁の名文によりて、その事蹟をかきあらはされし名誉は更にもいはず、いしとはいはじあはびその玉と稱揚せられしなん、此の歌の絶唱なると共に、石がはまれば不朽なるべき。



衛生上に於ける看護法の一班（承前）

久我西英

(ハ)病床　病床は、室の中央に置き、其の周圍け、自由に通行し得べきを可なりとす。又、直接に、煖爐の温を受くるを避け、戸、窓等より

吹透する風に觸るゝことなからしめ、敷蒲團は、厚くして、綿花馬毛等より成れるものを、最も良しとす。上敷は、清潔なるを要するが故に、屢々、交換すべし。大小便失禁の患者には、上敷の下に、油紙又は護謨紙を敷きて、其の蒲團を保護すべし。患者を被ふには、毛布の如き、輕くして温きもの宜し。患者の多數は、少しく頭部を高くして、仰臥するを、最も快しと云ふ。呼吸促迫ある患者には、蒲團を或は之れを背後に置き、蒲團木枕等にて足部を支へ、以て脱床を防ぐべし。患者衰弱して、自ら起立すること能はざるときは、患者の足部に當る病床の或る個處に、長き紐を固定し、其の一端に、把柄を繋ぎ、之れを患者の把捉自在なる部位に置くときは、患者起立の際、之れに依りて以て、便宜を受くること鮮からず。又、惡寒を訴ふる

患者には、温石或は湯婆(布片に包み)を給すべし。

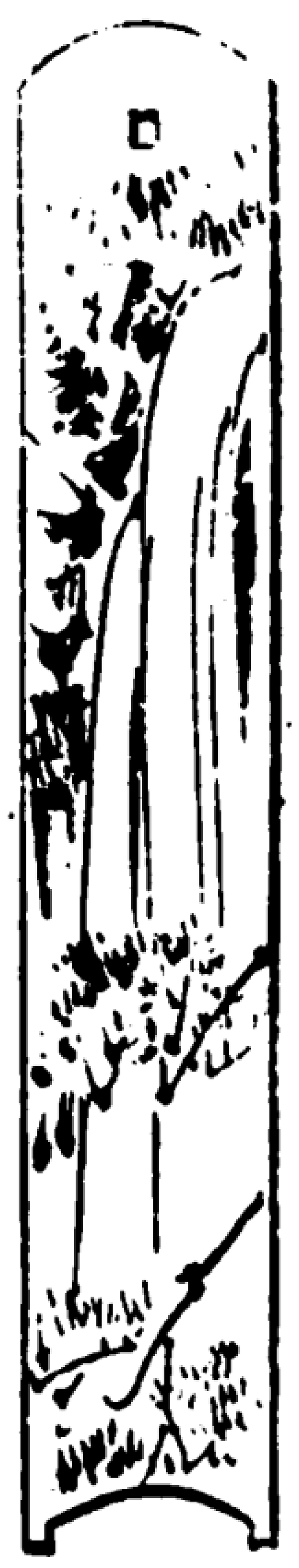
(二)**患者の身體清潔法**　蓐瘡患者の身體清潔法には、特に注意するを要す。衰弱したる患者の顔面及び手足、或は其の他の部も、看護人に於て、微温湯と柔き海綿とを以て、少くも、一日二回之れを洗滌し、同時に、髮を梳るべし。又、日日齒を磨き、口を清潔にするを要す。若し、患者衰弱して、自ら之れをなし能はざる時は、看護人に於て、水に蘸せる布片を以て、時々、其の口を拭ふべし。發熱患者の脣吻甚だ乾燥するときは、緩和なる脂油、或は利斯林を塗布すべし。是れ、患者のトホームの爽快を覺ゆるものあり。

總て、患者の襦袢下着等は、屢々、交換すべし。殊に、發汗する者に於て然りとす。而して、衣

類の交換は、發汗全く止み、且つ溫めたる手拭を以て、患者の皮膚を拭ひたる后に於てすべし。下着を取換ふるには、夜具の中にて帶を解き、微に上躰を高くせしめ、或は、之れを擡げて、速に脱がしめ、而して、豫め溫め置きたる他の下着を手に通し、前の如く夜具の中に於て、皺襞なく展べ、全身を包みて帶を締むべし。

夜具蒲團等を清潔にし、且つ之れを適當に整頓するは、特り、患者の爽快を覺ゆるのみならず、又能く、彼の恐るべき蓐瘡を、未發に防ぐの効あり。永く病床に在る患者に於ては、踵部腰部肩胛部等の如き、斷えず臥床に接する部は、動もすれば、創面を作りて潰瘍す。之を蓐瘡と云ふ、其の發する初めは、皮膚に赤色を呈し、其の部過敏となり、次で創面を生じ、且つ速に増大して、深く侵蝕し、遂に、劇しき疼痛を發して、患者に苦痛を與へ、或は創傷病を合併して、危險に遇ることあり。而して、久しく病臥せし患者にして、其の身體及び衣類を清潔にするを怠りしときは、長病の經過中、常に免る可からざるものとす。故に、看護人は、怠らず病床に觸るゝ所の皮膚に赤色を呈するや否やを注視し、若し、是れを發見せば、直ちに、醫師に報じて、速に適當の處置を成すを要す。而して、永く病蓐に在る患者に對しては、氣枕或は水枕を蒲團の上に置くを宜しとす。是れ蓐瘡を防ぐの良法なり。

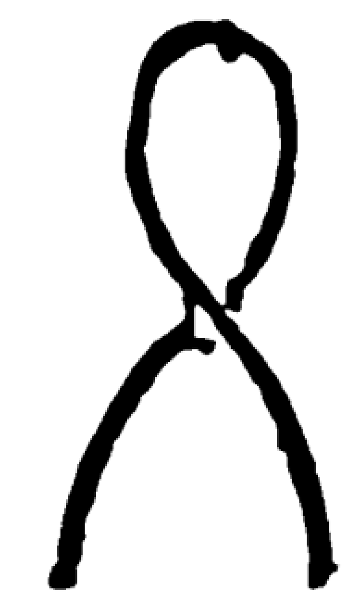
(未完)



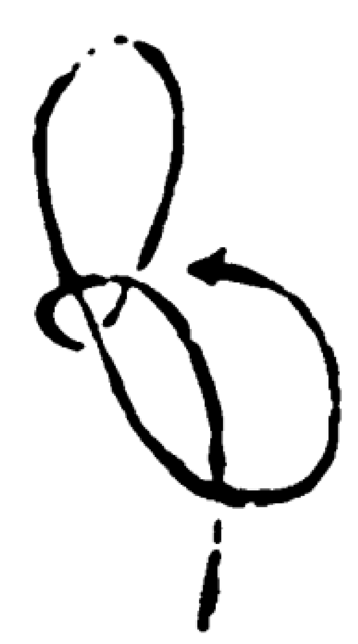
婚禮色直式（承前）

有住つね子

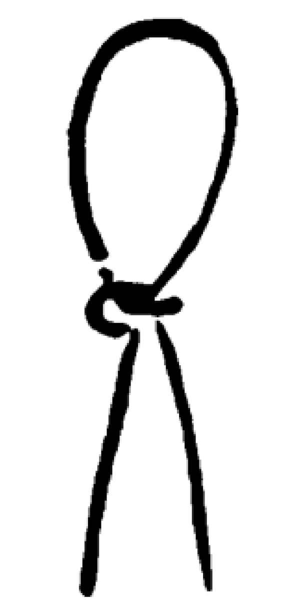
此の紐先より、左の輪の中へ通して、左の上にのばして引しむる時、

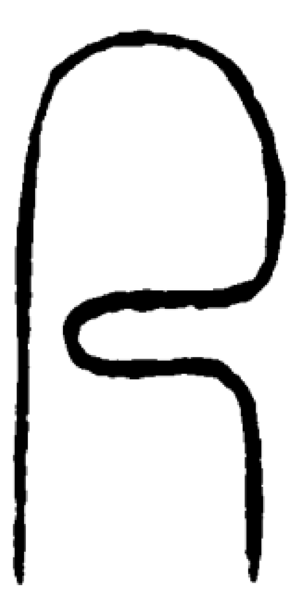


はいがしらの一　しむる時、



二





三・はいがしらの圖　五行　一

右の上と左の下左の上と右の下とを取合せて互ひちがひに引て、しむるあり。



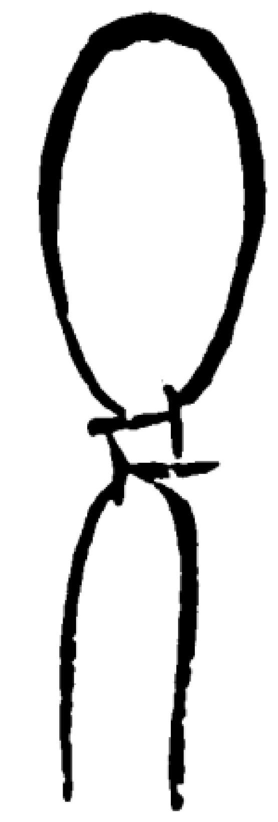
二



三



叶結　一



同　二

三ッ目の餅の事は古き書には見え、足利時代に及びては、餅數を多くして、此の古式をのこし、次第に、近世に、及ぼしては、此の揃方にも、多くの手數を要するに至れり。又、添物なども、色色に作意して、嫁方よりも聟方よりも、取かはせの式を定めて、當日をいはふ様になりて、今日にしても、なほ、其の古禮を失はず行はるゝ、なれば、其の式の重きと輕きとによらずして、何も何

も、取とゝのへて、贈答すべし。
右のはかに、いひもらしたるもあれど、此には、
其の一端を示したるのみ。

上巻結び

石井泰次郎

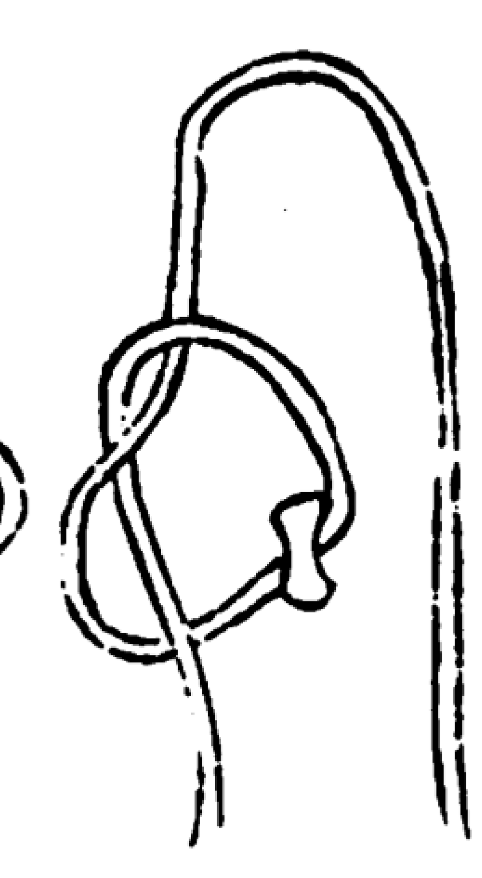
（七）同一種｛本誌前々號に五とありしは、六の誤植なり。故に本回は七なり、其の心してよ。｝

是は、近世につくり出せる物なり。小笠原、水島流の伊藤幸氏、直傳の中の書拔といふに見えたるあり。よろしきにはあらねど、前條の正しきに合せて、正しからぬも記しおかんとて、あげつるなり。

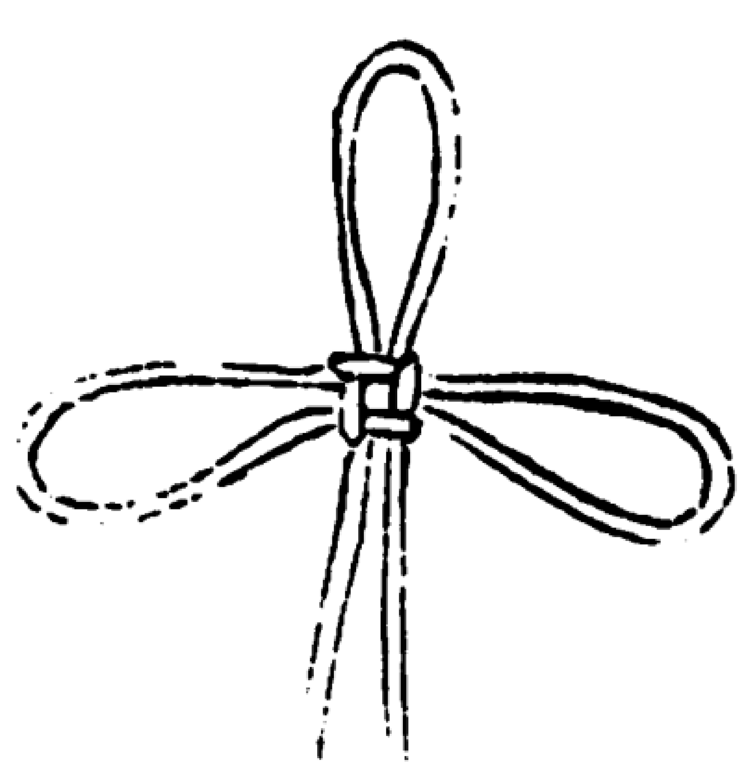
結様は、鏡の裏に、紐の中を向ふ輪形にして、紐先を手前にのばし、左の紐先を金物の穴に、左より通して、同じ紐の上へと左へかけて、一ッ輪の内へとくゞらせ、紐先を下へのばしおき、次に、右紐先を左の輪の中に入れて、金物の穴の紐の下になして右の方へと、同じ紐の下へと右に出して、一ッ右よりかけて下へと通して、紐先を下にそろへて、左右の間々に、左右の一二の指を入れて、眞中の輪形の端を引出してしむるなり。

鏡の裏の緒

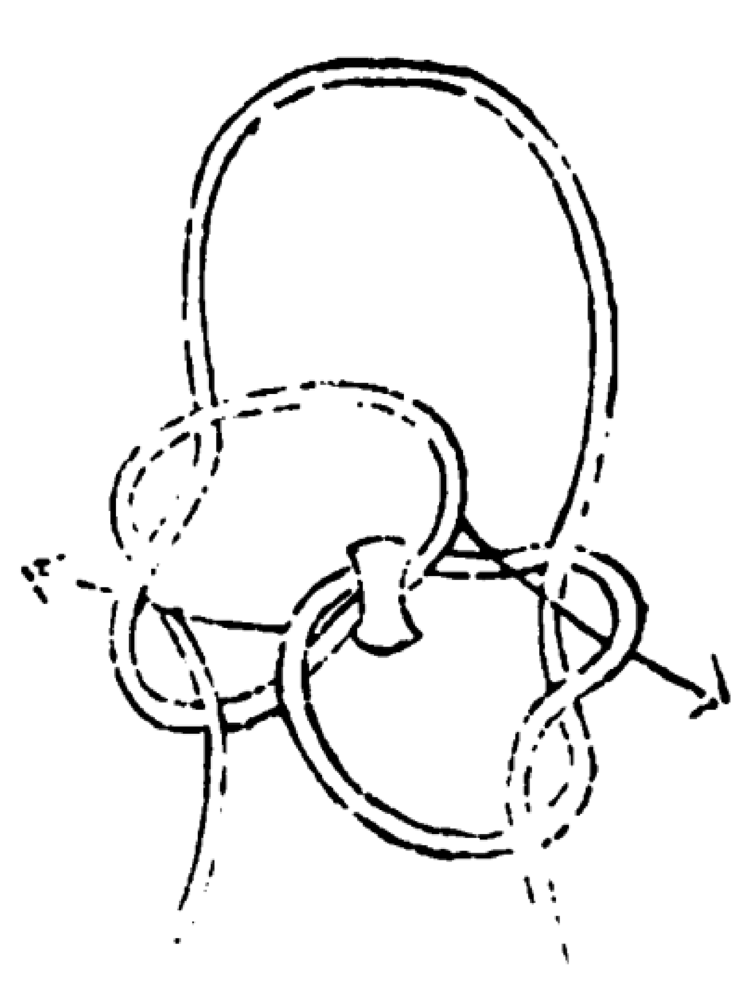
第一圖



第三圖



第二圖



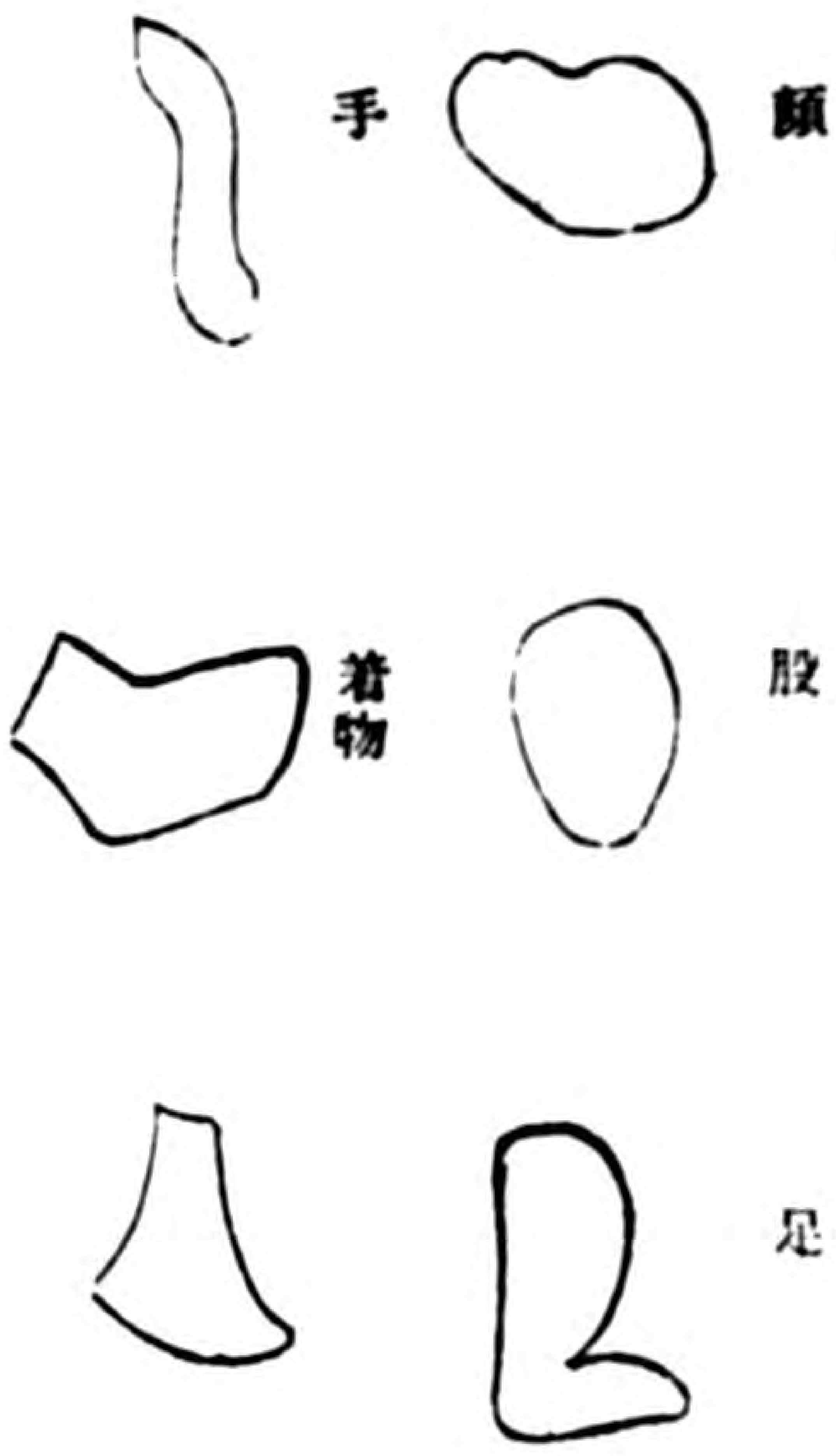
たちぬひ

匂ひ袋のつゝき

西山たい子

羽子板のをしへは、しばらく後にゆづりて、匂ひ袋のつゝき、時におくれぬやう、とり急ぎて此處にもらしぬ。

猿の形



圖の如き形に厚紙を切り、綿と匂ひとよき程に入れ、切れを被せ、但し、顔、手、足、は白ちりめんか、白絹か、何にても、白き物を用ゐ、目鼻を畫がき、左の圖の如くくみ合せ、のりにてつけ、裏を、胴の全體の形だけに厚紙をたち、それに匂ひと綿とを入れ、切れを被せて表に合せ、その間にさげ糸をつくる等、左の圖を見合すべし。

その圖





だいどころ

鮎バタ燒

鮎の腹をひらき、腸を去り、能く洗ひ、布巾にて水氣をふきとり、胡椒、食鹽をふり、鷄卵を割り、かきまはしたる中に浸し、其の上に、パン粉をまぶし、平鍋にバタを溶し、其の中にいれ、茶褐色になるまで、打返し能く燒て、皿に盛り、ソースをかけて出すべし。

海老バタ揚

海老をゆで、皮を去り、こまかにたゝき、胡椒、食鹽、パン粉に、バタを加へ、こねまぜ、薄く、又は、まるく好みの形に拵らへ、鷄卵を、溶したる中に浸し、更に、パン粉をまぶし、平鍋に、バタ、又は、牛脂膀をとかして、揚るなり。前の如く、ソースをかけて用ゐるべし。

鮎粕漬

先づ、鮎の脊をひらき、腸を去り、能く洗ひ、水氣を去り、粕に、能程の鹽を加へ、すりまぜたるものを、腹部へ詰めこみ、桶の底に粕をいれ、其の上にのせ、だん〴〵と漬こむべし。斯くして、三四日經て、食するを佳とす。一週間を經る時は、味惡くなるなり。

南京豆菓子

五合程の南京豆を煎りて、皮を剝き、擂鉢にて能く擂つぶし、大匙二杯のバタ、白砂糖半斤、鷄卵の黄身二個、メリケン粉、二合を、能く擂り交せ、鐵葉製の燒皿へ、匙にてすくひ落し、好みの形につくり、かまどへいれて燒くべし。永く貯ひ置きてよろし。

胡瓜の大鼓漬

胡瓜の兩端をきり、中の種を拔き、筒の如くなりたる中へ、暫時、鹽をふり置き、水にて洗ひ、しその葉を鹽にて揉み、かたく絞り、蓼の葉をきざみたるを、卷きこみ、瓜の穴の中にいれ、三分程の厚さにきり、砂糖を加へたる酢に漬けて、用ゐるべし。



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（十七）

御帳のひんがしおもては、うちの女房、まゐりつどひてさぶらふ。にしには、御ものゝけうつりたる人々、御びやうぶ、ひとよろひを、ひきつぼね、つぼね口には、几帳をたてつゝ、けんざ、あづかり〳〵、のゝしりゐたり。

みなみには、やんごとなき僧正僧都、かさなりゐて、ふどうそむの、いき給へるかたちをも、よびいでゝあらはしつべく、たのみゝ、うらみゝ、こゑ、みな、かれわたりたる、いと、いみじうきこゆ。

北の御さうじと、御帳とのはざま、いと、せばきほどに、四十よ人ぞ、後にかぞふれば、ゐたりける。

いさゝか、みじろきもせられず、氣あがりて、ものぞおぼえぬや。

今、さとよりまゐる人々は、なか〳〵、ゐこめられず、ものすそ、きぬの袖、ゆづらんかたもしらず、さるべきおとなゝどは、しのびてなきまどふ。

釈義

○つどひてさぶらふ　多人數、並び居るなり。
○御ものゝけうつりたる人々　物怪の憑きたる人々にて、即ち、よりましとなりたる人のことなり。よりましの事は(十八)に、くはしくいへり。さて、こゝは、前文に

御ものゝけ、かりくらし云々

と、いふ所の、ありさまを、細かに注したる文なり。
○御ひやうぶ、ひとよろひを、ひきつぼね　御屏風一雙を立てめぐらすことにて、つぼねとは、狭くとり圍むことなり。さて、屏風を以て、よりまし一人づゝを、圍みたるなり。
○つぼね口には、几帳をたてゝ　上の如くよりましの人、一人一人を、屏風にて圍ひ、その、ひきめぐらしたる口々には、几帳をたて、几帳をたてしなり。
○けんざ　驗者にて、祈禱する僧をいふ。驗者とは、もと、祈禱に功驗ある者の稱なりしが、轉りては、たゞの僧のことを、ひろく、いふやうになれり。
○あづかり〳〵　僧等銘々、受持を定め、よりましを、一人づゝ、引受けてなり。
○のゝしりゐたり　怪物を調伏せんとて、經など讀みて、さわぎ居るさまをいふ。
○やんごとなき　無止事にて、已みがたく、打捨て置れぬほど、尊しの意。
○僧正僧都　上にいへり。
○ふどうそんのいき給へるかたちをも　活不動の形をその意、不動尊は、不動明王の事にて、前の五壇の御修法の條にもいへる如く、あらゆる惡魔、邪靈を降伏せしむるものとて、顏色、

獰猛にして、右の手に降魔の利劍といふを持ち、左に縛の繩の繩といふを握り、背に、火焔の炎々たるを追ひたり。また、その傍に、脇士の二童子あり、制吒迦童子、矜羯羅童子といふ。

○よびいでらはしつべう　不動尊をも、今、此の所に、呼び出し現はす可くの意。べうは、可くの音便なり。

○たのみゝ、うらみゝ　願てもみたり、恨みてもみたりにて、たのみみ　の　み　は、試るなど、いふ意にて、降りみ　降らずみ　泣み笑み　などの　み　と、同じ。今も、見て試なされ、父、試て御覽などいへるも、おなじ意なり。

○なか〳〵に、ゐこめられず　とても、この狹き中には這入りきれずとの意。こゝの、なかなかは、かへりて、半分は、などの意とは別にて、俗語の、なか〳〵　と　おなじつかひ方なり。されば、清水氏の釋に、中々、俗語のふりあり、いかゞ、中に　などの誤にや。と、見え、黒川博士も、また、しかいはれたれど、諸本、みな、おなじければ、暫く、良本のいづるを待つ。

譯解

その、十日の夜、中宮のまします御帳臺の東面には、さしつかはされたる内裏の女房たち、參集して伺候す。

また、御帳臺の西面には、かの物怪の移り憑きたるよりましの人々を、御屛風、一雙を引きめぐらして、一人づゝ、その中に圍ひ、その、引きめぐらしてかこひたる、その屛風の口々には、几帳を立て、几帳を立てして、祈禱する僧は、各、よりましを、一人づゝ引受け、物怪を調伏せんと、經など讀みあげてさわぎ居たり。

また、御帳臺の南面には、なみなみならぬ尊き僧正、僧都など、おびたゞしくむらがり居て、精神を込め、加持するありさまは、さながら、不動尊の活きたる形相をも、此の所に、呼びいだし現すべくおぼゆるにも、何とぞ、御安産あそばすやうに、守り給へと祈り、または、かやうに願ひたてまつるに、聞き入れ給はぬかと、さま〲に、思ひまどひて、願ひてもみたり、恨みてもみたりして、人々の聲も、のこらず、一體に嗄れはてたる體は、常とはかはりて、一段殊勝に聞ゆ。

また、御帳臺の北の御曹司と、御帳臺との間の、最も狹き所に、多人數、押し合ひ、ヘシアヒして居たるが、其の時は、氣づかざりしが、御産すぎて後にかぞへてみれば、およそ、四十人あまりも居たりける。

かやうに、狹き所に、四十餘人も、居ならびたる事ゆゑ、チットバカリの自動もならず、ノボセアガリテ、何事も夢中で覺えのない事よ。只今、自分の里より參上せる人々は、とても、この狹き中には、這入りきれず、さぞこまるならん、やつと、すわりたる人々も、裝の裾、衣服の袖などを、おたがひに、讓りあふ餘地もなければせんかたなし、中宮の御乳母など、おもだちて、老いたる人々などは、押さるゝ事のくるしさと、御産の事の心配とにて、ひそかに泣きながら、いつれも、途方にくれて居る。



漢文學講義

佐々木天游

備中古川翁傳論　賴山陽

余十六歲時。翁來游レ塾。以下與二先人一有上舊來過。手寫二海內輿地。及四隣界圖一。來贈二於予一。且曰聞豎子頗可二告語一者。願爲二此學一。予時有レ疾。不レ得二時見一。而翁即去。「余熟二玩之一。與二世地圖一大異。不レ畫二州郡界一。特示二山川脈理一。略著二州名於傍一而已。余因レ此。得レ識二海宇大勢一。已而游二四方一。有三以驗二之。及レ作レ史且論レ事。多レ所二依據一。皆翁賜也。而不レ得レ見二翁詳聞二其說一。可レ勝レ憾哉」

余十六歲の時、翁、來りて塾に游ぶ。先人と舊あるを以て來り過り、手から、海內輿地、及び、四隣界圖を寫し、來りて予に贈り、且曰く、聞く豎子頗る告語すべきものと、願くは此の學を爲せと。予時に疾あり。時に見を得ず。而て、翁即ち去る。余之を熟玩するに、世の地圖と大に異なり。州郡の界を畫せずして、特、山川の脈理を示し、略、州名を傍に署するのみ。余此に因りて、海宇の大勢を識を得たり。已にして而て、四方に游び、以て、之を驗するあり。史を作り且事を論ずるに及んで、依據する所多し。皆、翁の賜なり。而して、翁に見えて、詳に其の說を聞を得ず。憾みに勝ふべけんや。

此は、賴山陽先生の文で。備中の人。古川翁の（翁は老人の通稱なり。）傳記に就ての、議論文でありますが、余自分が。年十六歲のときに、古川翁が。備中國より來りて。安藝國に遊びにこられました。カウシテ自分の先人、（先人は先大人、父のこと。）父と舊き朋友の誼があると云ふ、緣故を以て、來りて、自分の家に過りよられまし

た。サウシテ、翁自身に、手づから、海內輿地、即ち、日本國內の地理と、(輿地、漢書の藝文志の註に、輿地道とあり。輿地は、土地と云ふに同じ。)及び兼て、又、四方の隣國の、支那とか、朝鮮とかの土地の略、あらましの畫圖を寫して、持て來られて、予自分に贈り與へられまして、サウシテ、マタ申されまするには、豎子、コノヤツコハ、(字書に凡卑鄙者皆曰レ豎とありまして、豎子とは、人を賤しめ呼の語でありまず。俚言のコヤツ、又キヤツ、兩樣の意味に、働く字であります。)頗るやや(差多きを、頗と謂ふ。)告げ語りて、物事の道理を、謂うて聞かするに足るべき人物であると、此謂ふことを聞て居るが、今、之をあげるから、此の地理の學問をなせよと謂れました。所が、余自分が、翁の來りて、地圖を與へられた時分には、病氣をわづらうて居たものだからして、其の貰うた當時に、直に見て、地圖をながめて、研究して見ることが出來なかつた。サウして、古川翁も、長く自分の家に逗留されぬで、即、すぐに、去りて歸られましたから、トウ〱、翁より、教を受ることが出來なかつた。(予時有レ疾。不レ得時見。而翁即去。の十二字が、暗に、結末の不レ得見レ翁詳聞二其說一云々の伏線となりてをるのであります。)

サテ、其の後自分が、熟〱篤と、之を(翁の贈られし海內輿地圖と、四隣界圖とを、)玩び、ながめ研究してみました所が、世間に普通流布してをります所の地理圖とは、大變に相違してをりまして、世間の地圖では、一州一郡毎に、此所は何郡、此所は何國と、境界を畫し、分ち畫がきてありますが、今、古川翁が寫して與へられた地圖には、州郡の境界は、別に分ち畫がきてありませぬ。但

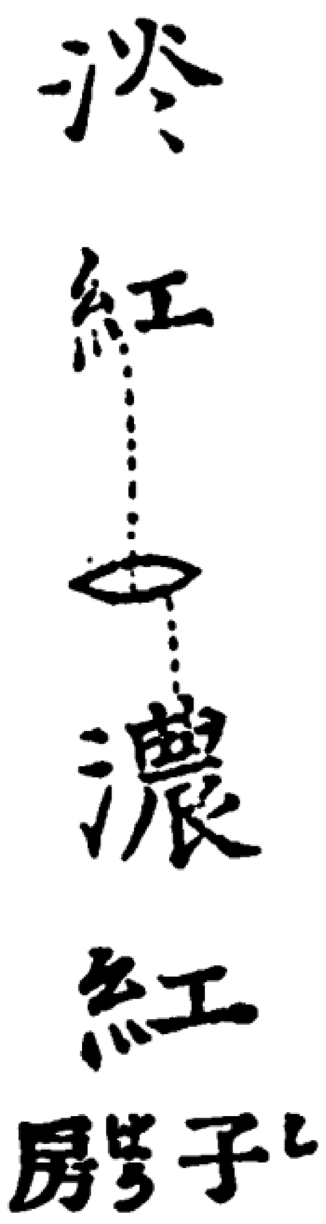
但、(特は但なり。)山川脈理で、山に連り續いてをる所の脈、川の流れてをる所の筋路を示しあらはして、畧、あらまし、國の名を其の横の方に署し、誌してあります計りのことで、重きを山脈水理に置てこしらへたもので、一國一郡杯どの事を略して、天下の大勢を知ると謂ふことを以て、専らと致したものであります。ソコデ、自分は、此の翁の贈られたる地圖によりて、天下の大形の状勢を、(海宇は、天下と謂ふに同じこと。尸子に、天地四方曰レ宇とあり。)識ることが出來ました。已而、はやサウシテのちに、四方、東西南北、處々方々に遊び、遍ねく天下に遊歴して、山川を跋み渉りて、サウシテモッテ、翁の地圖中に在る山脈水理を、實地に證據だてゝ、ためしてみることがあつた。(驗は考視也。又證也。ためしてみることとあり。史、歴史を、(專ら、外史政記のことを指して謂うたものであります。)著し作り、且又、天下の事柄を議論する時に、及びありまして、依り據りて、天下の山川の状體、四隣の形勢など、地圖に依りて論を立る所のものが、澤山でありまして、幾角の裨益になりましたが、是は皆のこらず。古川翁が、自分に下されたる所の賜ものでありますのぢや。(皆翁賜也と、重きを、翁の恩徳の上に歸しましたもので、温厚の筆であります。)が、サウシテ今は、翁は、已に無き人の數に入りて居られますものでありますから、重ねて、翁の目に掛りて、詳に精しく、翁の地理の學説を聞くことが出來ぬのぢやが、遺憾とするに勝コタヘラリヨウヤ。どうも、殘念で勝へられぬ。誠に、遺憾の極みであると、前段を顧み、嗟嘆の文字を以て、本文を結んだものであります。

和畫通信講義（第十四回）

山崎彩峨

墨にて畫くには、符號の順に、花瓣、并に、子房枝莖等を薄墨にて畫き、後葉の表なるは濃き墨、裏なるは薄き墨にて畫き、乾きて後、花心葉脈を濃墨にて入れ、子房には、薄き隈を施すなり。

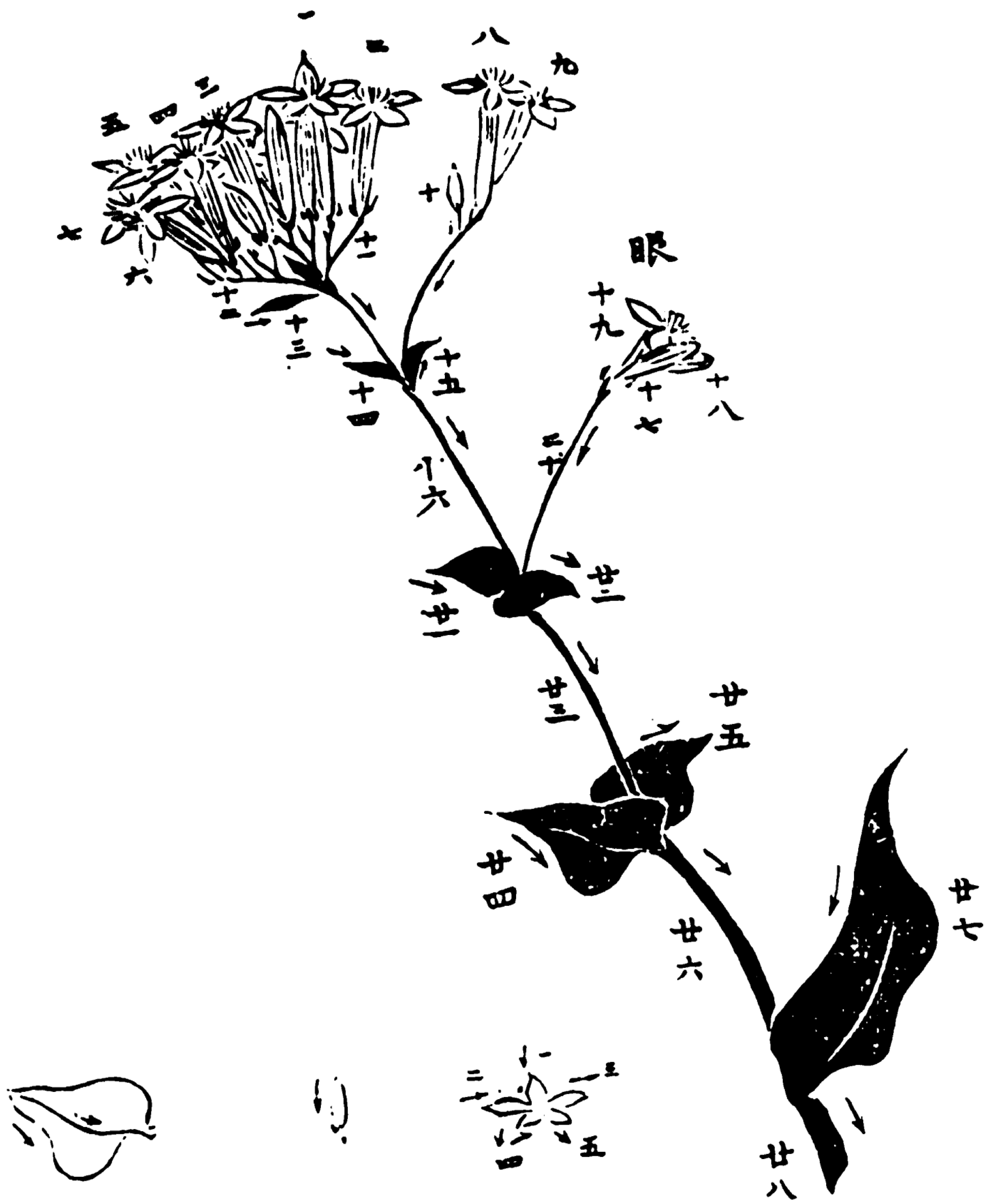
彩色にて畫くには、花は薄き咽脂のさきへ濃き紅色を附して畫くか、又は、薄き咽脂にて畫き置き、乾きて後、濃き紅色



を入るゝもよし。

も同じく、最初に薄き咽脂にて畫き、後ち濃紅の線を入るゝなり。さて、この莖幹は、草のこと故自ら優柔の風あるものなればそのまゝ枝ともいふべき花帶附着の部分は、殊に、優軟纖麗の筆意を使用すべし。色は枝莖ともに黄がちの青色にして、葉は例の如く、表は藍がちに、裏は枝莖より稍濃き黄がちの青色なれども、この草は、總して、餘り藍の多量なる青色なし。かくて、全部を畫き終へたらば、濃墨か藍墨かにて、脈葉を入れ、花心を濃き猩艶脂にて入るゝなり。




一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
眼
廿一
廿二
廿三
廿四
廿五
廿六
廿七
廿八



文林

梅雨將晴　東久世通禧
さみたれは今かはれなん栗のはな
　散にしえたにせみそなくなる

竹風　佐々木高行
あさ風に竹生さやきてやまかけの
　軒端すゝしくつゆそこほるゝ

田上螢　高崎正風
螢とふをたのあせ道せはけれは
　こゝろのまゝにおはれさり鳧

避暑　鍋島直大
出湯にもゆく道あつしこゝなから
　なつにしられぬ宿やもとめん

夏夕　竹屋光昭
ひくらしの聲すゝしくも聞ゆなり
　むら雨すきしなつのゆふぐれ

夏雲　宮地嚴夫
あしたより村雲さわきけふもまた
　夕たちすへくみゆるそらかな

市中梅雨　北郷久政
をやみなきさ月の雨にまちなかの
　行きもしはしと絶えけるかな

梅雨晴　小出粲
さみたれの空ははれてもやま水の
　音なほあめのこゝちこそすれ

船納涼　千葉胤明
日さかりはかた岸つたひすみた川
　さくらの陰をこきめくりつゝ

雨後新樹　遠山英一

露たまる若葉のうへにゆふひかけ
まはゆくさして雨はれにけり

川夕立　　下田春興

さらにまた瀬々の川瀧かけてけり
このみなかみに夕たちやする

夏露　　蜂須賀随子

夕月のやとれる野への夏くさに
ほたるとみえて露そみたる丶

夏夜雨　　鍋島榮子

蚊遣火のけむりはうちにくゆる共
あめのふるよは涼しかりけり

樹陰水　　前田朗子

みつえさす青葉の陰にうなゐ子か
水あそひするなつはきにけり

朝梅雨　　西四辻茂子

梅雨のあめまたけさもはれやらて
くもの往來そひく丶みえける

船中梅雨　　南郷柳子

さらてたに潮たれ増るあまふねの
苫もりてふるさみたれのあめ

時鳥幽　　柳原愛子

さみたれのくもまの月の影よりも
聲かすかなるほと丶きすかな

竹風　　小池道子

くれ竹のはすゑの露のちるみれは
音せぬかせもす丶しかりけり

窓前螢　　岩崎寧子

集めけんむかしの影もおもはえて
ふみよむ窓にとふほたるかな

長谷　　小川直子

汐路ふく風にたくひてきこゆなり
長谷のみてらのいりあひの鐘

籬外螢　　宮地　小東洋子

風かよふ軒端の小簾のすきまより
　すゝしく見えてとぶほたる哉

北野の青葉

小西甚之助

西の都の西の方、西陣の西の果、北野の社の北門入れば、今日此の頃の梅の青葉、木立深う色籠めて、匂へる陰のすが〳〵しさ、端籬の邊いと瑞々しう、梢をわたる鶯も、老いゆく程を忘れ顔なる。御階の下にひれふして、をろがみて後うち仰げば、彼の藤肥州が奉納したりと傳ふなる、大やかなる神鏡は、奉納主の名に負へる、ひかり清らかたち正しう我を照らすに、能く見ればあなあざらげし。朝風にゆらぐ梅の青葉、色も涼しう其の正中に影を留めたる、我は端なく奇感に打たれつ。そも何が故ぞや。佗なし。夫の菅母の詠歌をぞ想ひ起せばありける。「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな。」げに、風葉を寫す此の神鏡、宛がら菅母の願も滿てる月の桂に家の風吹きわたりたらんやうに見做されぬ。奇しき哉此の神鏡、風葉を寫し、又、該の歌意を寫す。

御鏡にうめの青葉のゆらぐにぞ
　千代照る家の風は見えける



女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、銚子參りたらば、盃をとりて一度うくべし。

もし、酌つよく盛りたらば、殘して苦しからず。下土器出ぬ時には、吸物椀の蓋へしたむべし。椀中には、したむべからず。主人對坐ならば、銚子參りしとき、まづ、わなたより參らすべしと辭退すべし。主人挨拶ありて、盃をとるべし。列坐のときは、上坐の人主人へ式代し、さて、次坐へそと式代してのち、盃をとりわぐべし。都て、肴もの、又、本膳等出る時も、辭儀此の定に心得べし。

附、酒一盃を、一献と云ふは誤りなり。一度と云ふあり。一献と云ふは、吸物出で、肴一種にても二品にても出たるを、一献と云ふ。又、吸物が、澆のものなど出で、添肴出るを二献と云ふ。次第如此して數献に至るなり。

一、肴出で、酌又參る。一度うくべし。肴は、まづ、參らぬ方がよし。様子により、參る事あらば、小ぐしなどは、くしをつまみて參るが作法なり。

龜足うちたるものは、龜足をつまみて參るものなり。されども、女儀また少人などはつまみて取り、吸物椀のふたに置き、箸にて押へ、手にて串をぬき、さて、箸にて肴を參るべし。龜足あるものも、此の定にてよし。又、酌參る。うくる事初の如し。後、酢びての肴參る。ひとはし參り、酌また參るべし。辭して、盃を納むべし。主人挨拶あらば、厚く禮謝申すべし。

一、本膳、その外出揃ひ、主人挨拶あらば、饗應の厚きを謝し、一禮あるべし。

一、本膳を居ゑたらば、兩手にてそとうけ、いただくやうにして一禮すべし。主人同等ならば、そと兩手をつきたるばかりにて、よろしきなり。列坐のときは、まづ、次へ挨拶して、膳をうくべし。

観月の記

頼山陽の母

おのれ、頼春水翁の新鶯示兒輩と題したる小箋を藏せり。其の詩に、出谷新鶯聽始奇、遷喬知欲向誰期、好音縱被凡禽妬、嬌舌休爲俗耳嬉、著雨側陰飛未遂、催花枕底喚何遲、人間到處足容樹、不用上林求一枝、とあり。恰も、山陽先生の一生の行藏、この詩中より出たるが如し。以て、庭訓のゆるかせに爲べからざることを感じたりき。今、又、母吾梅颸夫人の、山陽先生と共に、樂浪の志賀の大津なる巖崎雍の家に來りて、琵琶湖上の月をめでたまへる文章を觀たり。其の文、其の書、秋の夜のくすなき望の月かけさやかに、山の端にさしのぼりて、千里一碧の湖上に、金龍を躍らすが如く、めさむるはかりのこゝちすこゝに至りて、又、かさねて家庭の敎、其の力の大なるをさとりぬ。時は、文政十二年八月、門人の相隨へるは兒玉三郎宮原謙藏ありしよし、巖崎氏の跋文あり。本書は、今、坂田郡長濱町吉田芳水の、秘もてる所あり。せめては、其の文ばかりも世の媛たちにしらせまほしくて。

大かた、十五夜はくもりかちなれば、いでや、このごろの空のけしきすぐさで、湖の月見にまからんとて、八月十日あまり四日、襄がぐして、已の刻すぐる頃より出立、日高きほどに、大津なる巖崎氏のかりとぶらひける。あるじ、よろこほひて、何くれとわかぬことなくあるじまうけし、母刀自君は、ちかきほどなやみたまひける名ごり、さはやぎ給はずとて見えたまはず。去年むかへられし

よめの君なん、出でいやなす。としのはと、最なかの月の數ばかりあらん。いとうつくしく、あいけうつきらうたけなるが、ゐたちかしつきものせらるゝ、こよなく見所あり。さて、あないして、鑑湖樓に伴ひゆきたり。のぼりて見れば、

　月よりもまづだ心のはれにけるめさへ及ぬ湖の上

夜に入りぬれは、おもふにかなひて、雲きりのまよひもなく、月はさやかにさし昇りければ、皆、めでくつがへり、興に入ける。やがて、若き人々、あるじも、共に、韻わかち、からうたうたひける。おのれも、月といふ字を得ければ、

　さゝなみもよるとは見えず浦風の
　　しづかにすめる中空の月

　わすれめやくもらぬ秋の中空に
　　めぐりあふみの海の上の月

今宵、この高どのにやどりたり。明日くもりなば、京に歸らんといひおへりけるが、十五日きのふにまして、天つ空はれわたりければ、猶、とゞまり侍りぬ。もたまへるふるき書畫なんぞ、あまた取り出で、なぐさめられたり。暮ぬうちより、船もよひして、うちのりつゝ出つるに、田上山のわたりよりさし出たる月の、まことに塵ばかりのくもりもなく照りわたり、浪にひたしたる影の、きらきらとうちなびきたるけはひ、いひしらず。

　打出る春は初花秋の夜はこかねなみよる志賀の大わた

けふ、季鷹ぬしの歌見侍りけるに、とことはに浪の花さく、とありけれども、この夜の月を見せまほし。酒くみ、ものとうべてあそぶ。

　月夜よしと船漕ぎいでゝ鳰の海の深きなげきをくむがうれしさ

かへり來ても、なほあかず。樓に登りて見居り。げにや、むかし物語のふみを、此の最中の月に心ゆきて、筆とりそめし事なぜをも

おもひうかべらる。ひらのねおろしに帆かけて出たるしも、いつち行けん。漁すらんとおもはゆる小船ともに見えずなるに、ただ、海の面さながら靜なり。

魚をとる聲のみしるし志賀の海やよもしづまれる月のさよなか　あすは、つとめて、出立んに、夜もいたく更にたり。寐なんなといひあへりければ、

明ぬともよしや最中の月見むと
　はる〱來ぬる秋の水うみ
玉くしげ二夜とまりて見れどあかぬ
　この高どのゝ月のかゝみには

梅颸

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資て我が短を補ふべし、他の短は、以て、反省の料とすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせところの愚をなすべからず。

第四章　獨逸婦人

(其の二)　獨逸婦人と教育

獨逸に於ては、一千八百六十年頃より、女子教育熱は遽に高まりしものゝ如し。而も、其の源泉は、女子をして、獨立獨活の道を得せしめよてふ、生存競爭上經濟的方面より流出し來れり。左れば、其の結果にや、女子の職業學校最も多し。而して、當初、アドルフ、レッチ氏、女子職業獎勵會てふものを起し、氏死してスケペレー、レッチ女子後を襲ぎて、製圖、音樂、裁縫、割烹等を教授

する學校、及、商業學校を建設せしに、數年ならずして、頗る盛大に赴き、各地方に於ける同種の學校を起すの好模範となれり。

獨逸は、由來、女子の權力は、英米等に比すれば甚だしき壓迫を受け、其の結果、女子は未だ大學に學び、男子と均しく聽講する能はず。故に、大學以外の專門學校に於て、最終の教育を受くるを常とす。若し、大に學ばんとするの女生は、瑞西或は英米の大學に入り、其の希望を充たさゞるを得ず。然るに、女子教育に於ける四邊の大勢は、舊習に固執せしめず、有眼の識者と氣力ある婦人とは、相唱和して、女子教育の發達に盡瘁し、幾たびか、伯林に大會を開き、其の結果、諸般の請願を議會に呈出し、今を去る三十年前の頃より、女子も、製藥、事業、郵便電信事務等に關するを得るに至れり。而も、一般の業務に於て、女子の關與せざること頗る多し。之を要するに、獨逸にては、女子は、家庭の慈母たり、良妻たり、學校の良教師たり、手工の名人たるを得るを、家に對し、國に對して、最上乘とするものゝ如く、未だ、女子をして、凡ゆる男子の爲すべき事をなさしめ、男子に等しき權理を得せしむることには努めざるなり。



○獨逸大學と女子(東朝)普魯士大學にては、婦人に、通常男子の學生と、同席聽講するを許さゞるの制規あるも、聽講希望者には、特に教授の取計ひにて、或課目に限り聽

講を許すことあり。獨逸伯林の婦人團体は、去る頃、議會に正式的に、婦人の大學聽講を許すべしとの請願を差出したり。此の請願は、獨逸婦人の高等教育希望者の増加したる一證として見るべきものあるが、現時、斯かる希望者は、四百十四人あり。内、伯林大學に二百卅八人、ボンナ廿六人、ヘッテンゲンに三十二人、クレーセルワルドに廿七人、ガールデに十五人、キールに十七人、ケニグスブルヒに三十三人、マルブルヒに十八人あり。其の年齢は、二十才以下の女子二十二人、二十才乃至三十才の婦人二百五十人、三十才以上の年増百四十二人にして、之を國別にせば、獨逸人二百七十七人、露國人五十九人、米國人五十人あり。又、宗教に別ては、新教徒三百人、舊教徒二十四人、猶太教徒八十八人にして、有夫の婦人三十六人、未嫁の女子三百七十四人、寡婦三人あり。此の内、歴史及び哲學の研究者百五十九人、美術及文學の研究者九十人、博言學の研究者七十二人、物理學及び數學の研究者四十八人、醫學研究者十四人、齒科醫學研究者三人、法政學科の研究者十三人、神學研究者九人、古語學研究者四人にして、該女子の父の職業を探ぐれば、中以下の官吏二十三人、商工三人、商人四十四人、農家二十四人、軍人十七人、高等教育を受けたる者百三十三人、中等教育を受けたる者十三人ありと。

女子要書解題（津之部）

三浦千畝

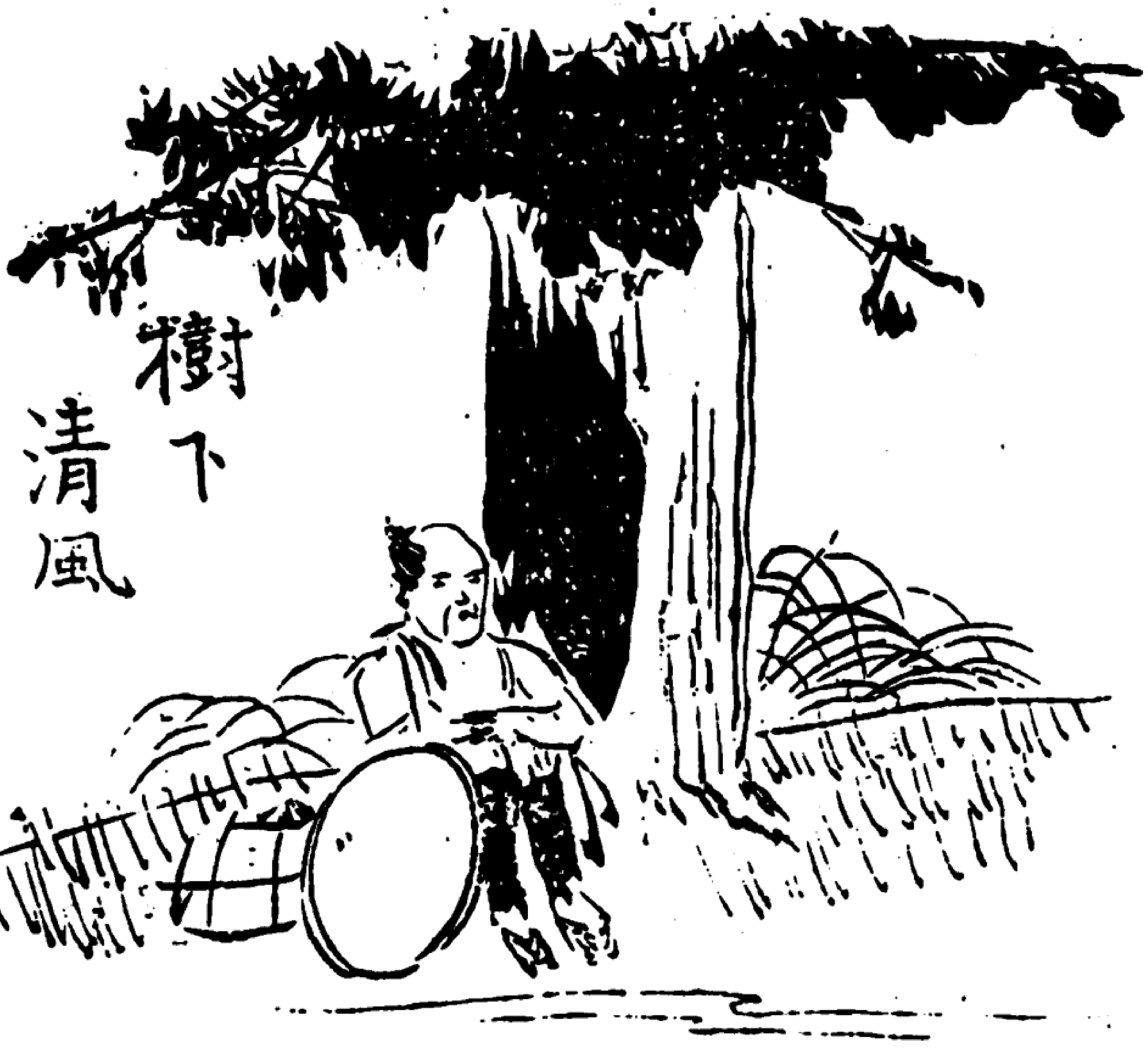
壺の石文（輪入）　十三卷

元祿十一年の刊行なり。この書を壺の石文と名

づけしは、かきつくしてよ壺の石文と云ふ古歌にとりしよし、自序に見えたり。さて著者は、群書一覧には撰者詳かならずとあれども、此の書は熊澤蕃山の子ある人の作あること、文中に見えたり。貞女烈女判上巻に、「同志云、先生の女子訓に云々、吾子先生の子として云々」又、「父は以學二人のゆるせる者なり云々」さて、或人の鈔下巻には、『吾子 予(著者)につきて老父か道を學ふもの云々、吾子老父が大學小解を見るや云々」など見えたり。按するに、女子訓、大學小解、共に蕃山の著書あり。又貞女烈女判下巻には「予が母方の祖父は、矢部氏と云ふ云云」とも見ゆ。(蕃山の妻は矢部氏あり)これらの文によりて、此の書の作者は、蕃山の子なること明なり。さて家譜を見るに、蕃山の子、男子四人女子七人ありて、男子、長は右七郎といひ、蕃山を氏とし、次は左七郎、野尻氏を冒し、三は武七郎、熊澤氏を稱し、末は左内といひ、亦熊澤を氏なし、播州明石侯(後封を下總古河に徙さる)松平信之朝臣に仕へり。此の書は、即ち、この末子なる左内氏の著あるべし。そは貞女列女判上巻に、山城國生間氏夫婦善行の事と題して、左の如く記せり。抄出して著者の小傳に代ふ。

山城國、都近き東南にあたりて、一村あり。(千畝按ずるに、こは山城國鹿背山と云ふ所あり。蕃山大和の吉野より徙りて、こゝに寓居せり。何某が故郷あり。)西の方大川にして、三方險山なり。里の四方皆名所にして、地景おもしろく、土地優に、人の心やさしき所あり。何某が父、二とせばかりすみて、何某をうめり。なにがし二歳のとし、西國に家だち

してうつるとて、(千畝按ずるに、番山、山城の鹿背山に居ること二年、寛文九年松平信之侯の召により、播州赤石にうつる)何某がはらからあまたありしかば、何がしは末にうまれて、いまだ赤子なりしかば、道すがらもむつかしとて、乳母をそへて、其の里の地士、生間氏といふものにあづけのこしけり。此の生間、親族にもあらず、只父二とせ、かの村に住たるゆかりばかりぞかし。(中略)何某幼少の時は、柔弱なる事至極せり。四歳に至



まで足たゝず。五歳に至まで物いはず。六歳の時驚風をわづらひて、十死にして一生をあきにいたる。夫婦勞悲しみ絶二言語一西國につぐる事、櫛の齒を引。漸く蘇生して夫婦顔色解。何がしが幼名、十介といふ。名の相應あらざると云て、改て長吉とす。長命吉慶を祝してあり。(中略)只いかんして夫婦の恩を報せんや。子孫を慈愛せんとおもふに、何某貧乏なり。又千里をへだつ。(千畝按ずるに、著者この時下總古河にありしこと、此の書の自序

に『つながぬ船のこがで月見るとか聞えし所に、住侍けるころ云々』とあるにて明なり。」いかむともすることなし。夫婦が事朝暮に忘るゝ事なし。見る人おこかましく、百笑の種となるとも、今此の巻末に、夫婦の善行をしるして、善夫善女とす。又万一の恩を報せんとなり(下略)

この文によりて、此の書の著者は、蕃山の末子熊澤左内なること、又著者幼名を十介といひ、寛文八年、山城國鹿背山に生れしことを知るべし。さて此の書を作りし所由は、自序に見えたり。

明石高砂の浦ならねども、つながぬ船のこがで月見るとか聞えし所に住侍けるころ、あねなるがむすめの、又似なうなれ侍しが、ふかくいとをしみ有ながら、己が世々にわかれつるが、あまりにかなしひおもひ侍るにや、なみならでも、かたしろとなるべきものをかきてよと聞えしほどに、(中略)やくなき事どもかきつゝりしを、三巻にわかちて、歸雁の文とか名づけ侍りし。それより、見ならひ聞ならひ侍りし事を、彼歸雁のおくに、日記などのやうにかきくはへつゝ、とし月過るまゝに、八巻ばかりになりにけり。此の比また、其の娘にはあらぬが、遠の國におなじころなる姪にて侍るが、是はわきてかなしうおもふならひなるが、さきの娘におなじう、心をあはせたるやうに、いひおこせ侍りしが、我としふるまゝに、なか〳〵あはれに覺えて、八巻にまた五巻をかきそへて、(下略)

その目録は左の如し。

歸雁の文上中下　介婦の訓一巻

慈母の箴言上下　しつけ方の帖一巻
賢女貞女の判一巻　貞女烈女の判上下
似せもの丶判一巻　或人の尋上下

さすがに著者は、番山の家學を紹ぎたるだけ、當時儒者一流の女訓とは、甚その趣を異にしたる所多し。特に源氏物語中の人物に付きて、批評を試みたる所などは、慥に番山一家の持論とも見るべく、これをかの源氏外傳などに合せ見ば、更に興あるわざなるべし。

詠史百首(加藤千浪作)評論

海上胤平

木曾義仲

うしくるまのりちかひしや粟津野に
　身もおちぬへきはしめありけり

牛車のりちかひしやとは、俗調あり。身もおちぬべきはしめとは、こゝろゆかず。一首のうへ解かたし。身ものも文字も、おちつかず。

源義經

さかしらのなき名にぬれしころも川
　身のしつむへきところありけり

濡衣といふことを、衣川に活用したるなめれと、さかしらのなき名にぬれしとは、語をなさず。結句、しつむべきところありけりといへるも、拙なくて、見るにたらず。

妓王

今さらに思ひはとけはうれしきを
　おにかとのみもうらみけるかな

解といふを、佛にいひかけたるにや。いひかけたる詞も、いひなしによりては、みやびなるべけれど、わろくもてつけたるは、口輕にいやし

く、狂歌などのやうにて、さゝくるしきものなり。此の作者、いひかけをむねとせられたるにや。數々ある中に、一つとして優なるなし。ただ、ものしらぬ人の、哥をよろこはすまでなるべし。

佐藤嗣信

やしまかた命をまとゝかねてより
おもひしらすはくやしからまし

命を的といへるは、俗調なり。凡、武士の、軍に出るに、いのちを捨ることとは、かねてより、思ひ定めたることなり。況や、嗣信の如く益荒雄をや。かねてよりおもひしらすはなどいふも更なり。悔しからましも、いふべきことかは。

佐藤忠信

生死をうちあらそひしみたれ棊に
かけしは君か命なりけり

あらそひしとあるは、いかゞ。こは、あらそひてとせねは、叶はぬなり。かくしても、また、事實たがへり。みだれ棊に、命かけたるにはあらざるをや。

作文雜話（四）

安藤晴晨

文章の種類、及各種の特質

人間の思想か、物に觸れ、事に感じて、さまざまにかはる如く、文章も、それがあらはす思想にしたがつて、さまざまの形をとる。

先文章は大體二つにわかれる即叙說の文と辨論の文との二つにわかつ事ができる

敍說の文とは何であるかといふに、講義錄の如きもの、歴史の如きもの、傳記の如きもの、すべて、事實の記敍を主とするものをいふのである。

辨論の文とは、政事上の論難辨駁とか、學術上の研究論文とかいふやうなものをいふのである。

右に擧げた**敍說文を、また二つに分つ事ができる。**

即、**說明文と記事文とに分つ事ができる。**

說明文とは、科學の解說とか、文學の講義とかいふやうなもの、、すべて、說明を主とした種類をさしていふ。

記事文とは、とりもなほさず、事實の記敍を主とするのであるが、その事實は、現在のでも、過去のでもよい。歴史傳記、または、紀行文日記の如きもの、すべて、この種類に屬する。

右述べた所を、ざつと表につくつて見れば、次の通りである。

- 文章
  - 敍說文
    - 說明文 ― 講義批評解釋等
    - 記事文 ― 歴史の傳記日記等
  - 辨論文 ― 政論哲學等

書簡文といふものが、また、一つあるが、これは、あらかじめ、いづれに屬するとはいひ難い。書簡文それ〳〵の性質にしたがつて辨論に屬するのもあらうし、記事に屬するのもあらう。これを、軍事上にたとふれば、いづれの隊に屬するともきまつてゐぬ。遊擊隊の如きものであらう。

さて、文章の種類は、かうであるとした所で、たゞ、斯の如く分類しただけでは、何のやくにもたゝない。よく、これらの文章、それ〳〵の特質と

いふものなしならなければならない。それを知つた上で、それ〴〵の文章にしたがつて、書く時に注意の加へ方を異にしてゆくべきである。

説明文の主と司る所は、その觀念を、極めて明截に讀者に傳ふる事である。それであるから、その文は、簡易直截を貴で、語句の曖昧模糊にわたるが如き事を避けるので、美文などゝいふ、餘情とか餘韻などゝいふやうな事は、此の種の文體に於ては禁物である。

記事文の主と司る所は、その事實の明瞭な印象を、深く讀者に與ふる事である。歴史の如きもの、記行の如きもの、事實の正確を重むずるは、いふまでも無いことではあるが、それと共に、讀者に感興を與ふる事を、一層深めむが爲に、事實の幹に、色よき花をそふるのは、敢て妨なきのみならず、却りて、結構な事である。たゞ花をそふるに當りて、この文體の、純粹の美文と異なる所以をよく悟りて、本末を顛倒せぬやうにすればよい。

辨論文の主と司る所は、その所編の主旨をよく貫徹せしめ、讀者をして、これに賛同せしむるにある。それであるから、論理の正確なるべきは、いふまでもない事であるが、殊に、用語の撰擇、章句の排列に、心をもちゐねばならぬ。この文體は、最、作者の手腕を要するので、この戰場に於ける勝敗は、實に、將軍の方寸に存する、或は孔明の八擒八縱の法、或はグスターフ、アドルフスの策線法、正兵奇兵、あらゆる戰法を用ゐて、敵を破らむとするのであれば、文才の最花々しき戰闘は、こゝでみる事ができるのである。

大體の分類、及、その各種の特長は、右のごとくであるが、その中には、記事文でありながら、辨

論文の性質を有してゐるのもあらうし、紀行文でありながら、解釋的の性質をもつて居るのもあらうし、それらの間は、互に、複雑してゐるものと承知せられたい。

大和めぐり（承前）

井上頼文

かくて西の門を出づれば、石階あり。此を上れば、西圓堂、峰藥師といふあり。六角の堂にて、中に壹丈六尺の佛の座像を安置せり。さて如何なる故にか。奉納物には、鍛刀錐の類おびたゞし。大工鍛冶の佛にやなど打笑ふ。こゝは、やゝ高ければ、こゝかしこに立ちつゞきたる僧坊、本堂ども、あらはにみおろさる。供所といふありて、守札畫圖などをひさげり。我も一枚を求めて開きみれば畫いとこまかにて、其の始めに、

夫當寺は、人王、三十二代、用明天皇、即位元丙午年、勅願に依て、御造營なる所なり。三箇の鎭壇を地底に構へ、首尾十五箇年を經て落成す。蓋、皇國勅願寺の權輿なり。殊に、伽藍は、百濟國の妙巧に係り、實に海内無雙の古刹にして、火災の難なく、予今殆一千三百年也云々

としるせり。あはれ妖魔の住へる事、かく迄久しからむとは。さばれ。此の建築、この彫刻、この繪畫等は、いかに、其のかみ丸木もてくみ、ちがやもて葺きたる、ひきゝ屋の中にすみし人々を驚かしけむ。さては、いかに蒙昧暗黑の中に眠りし人等の目を覺しけむ。とまれ。かくあれ。佛法傳來と共に、我が國の技術に著き進歩を與へたる事はいふべくもあらず。されど、こは皮相的の文明あり。形而下の、開化のみ。其の精神的のありさまは、果して如何ありしか。思へば尊嚴ある、我が國體は、實に彼等が爲に汚されたり。我が國政

治の運用上には、大なる妨害を與へられたり。其の弊害の存する所をかぞへあげなば小指もそこなはれぬべし。神人の別、君臣の分、昭乎として較りなき、我が國體にきづゝけしものは、抑誰ぞ。みだりに、客神に禮して、畏くも龍體をそこなひまつりし馬子あり。ほしいまゝに廟堂に拜趨して、帝位を覬覦せし、道鏡あり。偖は、本地、垂跡の説を唱へて、神典を亂らむとせし空海あり。古より定りし神の御地を移して佛を祭りし、最澄あり。行基、玄昉、菩提、佛哲の徒、これ等、皆同じ穴の貉にして、其の及ぼしゝ弊害は數ふべくもあらず。數多の貴族は、戒を東大寺に受けしにあらずや。かしこくも、一天萬乘の大君にして、御みづから三寶の奴と稱し玉ふにいたらせ在りしにあらずや。宏大なる土木は、年々増加し、人心は、一般に、惰弱に流れ、財帑は、空耗し、民力は、疲

弊し、延きては、武門の專權となり、保元、平治、承久の亂は、實に、こゝに基したりしなり。嗚呼、宗教の弊ほど恐ろしき者はあらじ。聞く。歐洲強國が他國を征服せんとするに當りては、先其の宗教を以て、敵國の人心を感化し、之に繼ぐに、干戈を以てすとかや。今我が國のありさまは、如何に。西洋各國との交通開けし以來、此に三十餘年。百般の文物制度に於きては、一つも欠くる物あるを見ず。皮相的の文明に於きては、已に具れりといふべし。さて精神的にいたりては、いかに。彼の耶蘇教の勢は、いかに。内地雜居も近きにあらむを。思へば、我等國學者の心すべきは、先こゝなりけりなど、萬感胸にあつまりて、思はず目つり、こぶし握らるゝ程、不意に脊中を打つ者あり。人々は、早下りしに、いつまで、何をながむるぞと言ふに、打驚けば、誠や思に沈み居て、

獨とり殘されしなりけり。急ぎ、下る。二三丁走りて、追ひしきぬ。案内の老爺は、元の道に、余等は、南大門を出でゝ、松原にかゝる。法隆寺驛より、滊車に乘らむとてなりけり。此處より、十町許りなりと聞く。皆々乘りおくれじと、いそぐ。ぬかりみに、足踏み入るゝもあり。泥はねあげて、つぶやくもあり。とかうして、今三町ばかりといふほどに、きとかなたを打見やれば、南無三。時機、已におそし。滊笛一聲、煤烟空を横ぎりて、轟々たる響と共に進行を始めたり（評、跣足ならざりし惜む）停車場につきし頃には、一抹の烟、遠く名殘をとゞめたる外、影だにとゞめず。悔むも、せんなし。さらばとて、こゝに最後の發車を待ち合する事とはなりぬ。待つ身はつらしと、うべもいひけむ。一時間あまりの程、長しとも長し。かゝる程に、短き秋の日かげとて、早かなたの山より暮れそめて、見るが中に、あたりやゝ暗うなりぬ。山寺の鐘もひゞき、家々のあかりもともりたる頃、やうやうに滊車は來りぬ。皆々、打乘る。鈴はなり、笛はひゞきぬ。車は、徐々と回りそめたり。田やゆきし、畠や去りけむ。山や飛びし、川や來にけむ。暗ければ、見えず。たゞ轟々と、闇にきしる車のひゞきを聞くのみ。

三十分ならずして、郡山驛を過ぎ、奈良に着きぬ。車を下りて、たどりゆくほどに、宿よりのむかへにあへり。雨、已に晴れたれど、道、いとわろし。つかれはてたる足には、五六町の宿も、なか〳〵遠き心地す。やうやうにして、ゆき着きぬ。やゝ大なる家にて、軒の行燈に、かまやとしるせり。いとうれし。草鞋とく間も、もどかしく、いそぎ上りぬ。先、湯に入りて、疲れたる足なでなどす。此の宿にて、我々の目に珍しく思はれしは、

電氣燈なり。（評、天眞爛漫）田舎者のかなしさ。話しには、兼ねて聞きたれど、見るは、今が始めなり。されば、あやしむも、あながち無理ならぬ事ながら、如何に、此の燈のまばゆさよなどいひつゝ、畏る〳〵指もてホヤを撫でゝ、こゝの下婢に笑はれたるは、いとはづかしかりき。かくて食事も終へつ。つかれたれば、物みるはあすの事として、今宵は、早く眠らむといふもあり。又打つれだちて出で行くもありき。余も二人三人とたちいでたりしが、この宿屋のわたりこそ、やゝにぎはひたれ。他は、已に戸をさしたるあとなれば、はいなくてかへりぬ。かくて夢路にたどり入りしは、何時なりけむ。



衝口漫言（二）

白松園主人

○我心石に非ず轉すべからず

詩經の邶風に、我心匪レ石、不レ可レ轉也、我心匪レ席不レ可レ捲也、とあり。男にもあれ、女にもあれ、志の壯烈にして、犯しがたき者のいひなり。好個の言といふべし。余、幼時、賴山陽の日本外史を讀みて、彼の平重衡が、敵人に生擒せられながら、猶自刃すること能はず、女子に親み、佛を唱へ、果ては生を偸みて僧たらんことを願ひ、女々しくも朗詠して、項羽の悲歌に擬し、戀々として餘命を惜みしは、匹夫匹婦の痴態を出づる事一歩ならず、まことに、男子の氣節なき者かなと、思はるゝに、外史には

いかにも、赳々たる豪傑の士の如く、かきなされたるはいかにぞや。山陽の筆にも似ざりけりと思ひき。吾妻鏡には、頼朝と對面せし時の一段をば、勇士の度量あるがやうに物しつれば、思ふに、之れに本づかれしなるべし。然るに、瀧澤馬琴は、玄同放言に重衡の人格を論じて、痛快を極む。その結論に曰く、

父兄の威德によりて、槐門淸華の上にをり、その半生だも保ちしは猶幸といふべし。孟子誦孔子之言曰、志士不忘在溝壑、勇士不忘喪其元。世に僕夫たりとも、常によくこの語を記誦して、よくその志を行はゞ、難に臨みて苟も脱れず、又唯恥辱に遠かることあらむか。

此の論、頼氏も亦、首肯する所あるべし。

〇士は己を知る者の爲に死す●●●●●●●●●

史記刺客傳豫讓の言に、嗟呼士爲知己者死、女爲悅己者容、とあり。我戰國の頃、道義地を拂ひて、只利害に依つて嚮背を決し、小義の爲めには命を隕す者あれど、大義の爲めに、天下に唱ふる如き、名分氣節の士なかりき。此の時に當り、天一の豪傑を下して、人心の腐敗を刺戟せしめぬ。信州の眞田幸村これなり。太閤知遇の恩に感じ、尫弱依る所なき大坂方に與して、百萬咆哮の東軍に抗し、家康が辭を卑うし、大祿をかけて招けども罵つて應ぜず、始終豐氏の爲に盡して、智勇無雙の名を敵味方に赫かしゝこそ、實に武士道の好標本なりけれ。世人その父昌幸が、初め武田氏に屬せしによりて、忠臣二君に仕へずの語を擧ぐれど、昌幸は或は然らん、幸村に至りては、然らざるなり。其の兄信仍と、關原の役、東西軍のいづれに附かんを論せし時、男子は義のために動くべし、成敗は豫め問ふ所に非ず、たとひ戰

敗れ祖先の祀を絶つとも、そは時の至りしなり。不發にして家を保つとも、何の甲斐あらんやと云へり。其の士を牽る子を訓る言、悉く發心に出でざるはなし。只その志の大ならざりしを惜むのみ。思ふに後世の俠客と云ふ者、この遺風を慕ひて、起りし者、蓋し尠からざらむ。かくては、幸村は戰國に於ける、俠客の大立物か。

○**香餌之下必有二死魚一**

之れ三略の軍籤にある言なり。また重賞之下必有二勇夫一ともあり。これ古今和漢共に等しき慣例にして、時勢の進歩は、益す此の程の機運を促して止まず。上は内閣諸公を初め、下は郡縣の小吏に至るまで、・として香餌を求むる爲めに、齷齪奔走せざるはなし。此の水草を追ひて展轉する者、必ずしも死魚あるに非ず。自ら灰殼燕の一員と稱する者あるに至る。惜むべきかな。昔は、必ずしも、香餌の下に動く人のみに非ざりき。淺見安正の高足、若林進七、人となり慷慨、その壯時貧苦と鬪ふ時、歌うて曰く



寺在二大津小關邊一
僧房五六年無レ主
北窓座見比良嶺
東阜歩望志賀浦
樹稠落葉足レ炊レ食
土顯蹄臨宜レ稱レ圃
平生素欲レ咬二菜根一　今日幸得レ甘二辛苦一
壯骨不レ憚負米勞　啜レ菽飲レ水養二老父一

諸侯に仕るを屑しとせず。終に釣に死するの魚

ならざりき。

○一唱三歎

源親行の東關紀行に、一唱三歎の文字多し。當時文士の、佶屈ある語多きに比して、いづれぞ。左に一節を載す。

十余日の日數を經て、鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽ある砌に至り、ことに目に立つ所々、心とまるふし〴〵をかき置きて忘れず、忍ぶ人もあらば、おのづから後の形見にもなれとてなり、東山の邊なる住家を出て、相逢の關うち通るほどに、駒ひきわたる望月の比も漸う近き空なれや、秋霧立わたりて、ふかき夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子猶殘月に行きけん、幽谷のありさま思ひ出でらる。

○自家撞著

東都の新聞多かる中にも、彼の讀賣新聞は、さきには公德問題を唱へて社會を鞭撻し、今また言文一致を鼓吹して、教育學術界に貢献せんとする等、吾人が認めて、社會國家の爲に、尤も多とする所なり。彼の惡德無責任なる新聞が、恣に毒舌を弄して、社會道德を蹂躙し、社會人心を腐敗せしむるに比して、優に品位面目の第一位を占むる者として歡迎したりき。既に此の如く、主義あり、品位ある大新聞にありては、あらゆる方面と、あらゆる場合との敵に對し、苦戰奮闘せざるべからず。況んや、その主張する言責のもとに於てをや。然るに此の頃、該新聞の第一面に連載する小說は、何たる醜陋の文字ぞ、「紺暖簾」といふ、題すでに俗臭の紛々たるをおぼゆ。その記事や、最も劣等なる男女が、淫奔卑猥の狀を猫寫してなほ慊らず、

挿繪の醜と相待ちて、一見嘔吐を催さしむ。噫、これをしも、公德問題主唱者の反影ありといふか。讀賣新聞にして、あは、思想界の潮流を逐ひて生活し、腐敗改善の實を舉げ、言行一致の樞機たる事能はず。嗚呼自家撞著の言論、吾人何ぞ他の群小新聞を貶むる勇氣あらむや。

○資格とは何ぞや

一に曰く資格、二に曰く資格、資格者誇りて曰く、彼は無資格者なりと。知らず資格といふ者、大方表面の看板のみを指して、些も、その實の有無をは問はざるを。危いかな資格者、千百の僥倖を期して試驗に應ず。意外にも中る事を得て、得意滿面、揚々として天下を呑むの慨あり。這般の消息は、殊に教育者間に多し、と聞くはまことか。或は阿り或は狃み、自治者の責任を忘れて、被治者の歡心を買ふに汲々とし、以て策の萬全なる者と思へり。その心事の陋劣ある、公爭に趦趄して、小怨を忿懣す。噫、之をしも眞の資格者といふを得べきか。看板の資格を得んとする者は、須らく、品性の資格を養ひ得たる後に於てせよ。



教の庭

皇孫殿下の御降誕を祝ひ奉りて

(日本女學校職員)

西澤之助

あれませる御子は產皇子國民の

あふきてまちし御子は產御子

川崎又次郎

更にまた千年の影を添はりける

春の御山の松の二葉に

三輪田　眞佐子

夏樹立瑞枝さしそふ青山の
深き御陰をあふく今日かな

富樫　孝子

大みすちいやつき〴〵に榮え行く
すめら御國は常磐かきはに

刈屋　他人次郎

青山の松の若葉の千代かけて
いよゝ榮えむあまつ日嗣は

田島　利三郎

よき國のよき大御代に生れあひて
よことかさぬるけふそたのしき

梨本　のぶ子

めつらしき光さしそふ春の日の
みかけをあふくけふそうれしき

松島　八重子

生ひたちて朝日にゝほふ若竹の
千代の色ます園のめてたさ

藤岡　新一郎

朝日さす春の御山に生ひそめし
松に千年の影は見えけり

福岡　藤兵衛

萬代にかはりはあらし九重の
みそのゝ中に匂ふ藤波

安藤　正次

うれしくもかゝれつるかな彦里子の
われましぬてふこのみのり文

青木　貞子

あさひかけにほふ御園の松か枝に
をゝしくたてしひあつるの聲

宮島　茂次郎

うれしさにいふべきすちもおもほえず
われます御子の彦里子にして
南　寛明

しげりあふ御苑の奥の若竹の
うきふしゝらぬ君か御代かな
宮崎照子

陰ふかくしげれる園の松が枝に
緑そひゆくけふの嬉しさ
下田義天類

影廣くなりゆく竹の園生には
實をはむ鳥もすみよかるらむ
椎名秀子

君か代にめでたきふしの数そへて
いやさかえゆく竹の御園生
師岡須賀子

皇孫はあれませりけりいつしかと
まちし彦皇子われませりけり
鈴木すゑ子

わか雄々しみとりも千代にさかゆへき
いろをこめたる園のわかまつ

八月五日兼題

閑居荻

地　三河宮崎郵便局鈴木榮方　源たけ子

ひとりねの夢もみたれてよもすから
をきの葉かせそ身にはしみける

評に曰、こゝろ言葉、よくとゝのひて、あはれふかし。

人　松山門前端町八番地　上原のぶ子

世の秋をのかれてすめるいほりにも
をきの葉かせはかなしかりけり

評に曰、さしたるふしもなけれど、實情さもありなむ。

秀逸　三河　坂本てい子

かまのゆのたきる音さへすみゆきて

さびしくそよくにはのをぎはら　羽後　谷口房子

○

いく度かおとろかすらんのかれ住む
　いはのゝきはのをぎのうはかせ　下野　青木たま子

○

おほかたの世の秋かせをわかいほに
　ひとりしめたるにはのをぎはら　東京　中村伊曾子

○

その庵にすみあれてしもこのゆふへ
　をぎむらさわくかせそさびしき　東京　穂積稔子

○

まれにたえ人はとひきてをぎの葉に
　おきはたえせぬかせのおとかな

（以下原稿到着順）

世をいとひかくれし庵のまかきにも
　ときしりかほになきそまやける　中郷瑞子

荻のはのそよくゆふへはわかやとも
　さびしさまさるこゝちこそすれ　村上操子

とふ人はたゆてさびしき手まくらの
　ねさめおとなふをぎのうはかせ　野口信子

朝なゆふなともとこそなれをぎの葉な
　おとつれてゆくのきのあきかせ　佐々小夢子

風のおとの身にそしみけるかしのみの
　ひとりふせやのをぎのともすり　佐々有郷子

世をいとふしはのいほりの荻のかせ
　またきにあきをしらせかほなる　坂本豊子

のきはなる荻の葉分くるゆふかせは
　あきのあはれのはしめなりけり　林環子

獨りゐになれしものからさびしきは
　をぎのうは葉をかせわたるころ　名取正代子

人とはぬいほりなれともあきゝぬと
　おとつれてふくをぎのうはかせ　河田いし子

分けてとふ人しなけれはあさちふの
　にはのをぎはらつゆもこほれす　三井眞子

手まくらに驚もうき世のひと来ぬと
　おとろくにはのをぎのうはかせ　島津信子

さらてたにさみしきやとの夕まくれ
　つゆふきみたすをぎのうはかせ　岡山眞子

このころはわびしき宿もいやまして
　をぎの葉わくるかせそ身にしむ　横井ゆき子

八重むぐら露けきやとのさみしさに
　あはれをそふるをぎのうはかせ　村瀬花子

いとゝしくあはれしらるゝわか庵の
　をぎの葉かぜそことにわびしき　岡山幸子

わかいほは荻の葉すゑを吹きわたる
　おとより外にとふひとそなき　横井ふみ子

あさな夕な浮き世のちりをはらふなり　菅とし子

秋の庭

しつけきにはのなきのうはかせ

世をいとふゝせやのゝきにおとたてゝ　金津文子
なき吹くかせも身にそしみける

のかれすむやとゝはいへとよの中の　徳永[illegible]喜子
あきをつけこすなきのうはかせ

よしすから庭のなきはらふくかせに　徳永貞子
ともなきやともまわかしきかな

とふ人もたゆてしつけきわかやとに　徳永綾子
よすからさわくのきのしたなき

わひすみの友とことなれあさなゆふな　澤田春子
めなれしにはのなきのうはかせ

木の葉よりほかに音つれなきいほに　澤田靜夫子
なりふしさわくなきのうはかせ

秋かせはゝやふきたちてわかやとの　濱口貞子
にはのなきはらそよきそめけり

こゝろからうき世を避けて住む庵の　篠山幽子
なきの葉かせにものおもふかな

ありとたにしられぬやとのおきの葉を　日向きむ子
うらやましくもとへるかせかな

人とはぬやとにもあきは来にけらし　山田いれ子
みにしみそむるなきのうはかせ

ひとむらの秋をうゐすはわかやとは　山田米子
とはてすきましあきのはつかせ

人とはぬやとゝしりつゝなり〱は　田代艶子
なきの葉かせにおとろかれぬる

かくれ家の庭もせに生ふる荻の葉に　田代綾子
そよくあきかせいとゝ身にしむ

ひとりゐのさみしきみには殊さらに　神田ふれ子
なきふくかせのおとそかなしき

世をさけてひとり谷間にすむいほも　中舘やう子
なきの葉さわくころそさひしき

ひとゝはぬわかやとなから秋のはに　吹田たけ子
はつあきかせのおとつれにけり

夕くれのさひしきやともおとたてゝ　白石貞子
にはにさほへるなきのともすり

世の中のうきことしらぬいほなから　伊勢村春子
おきふくかせにあきはきにけり

よをしのふおくやまさとのさひしさに　山崎たま子
なきの葉風なともとこそすれ

おとつるゝ軒はのなきのかせならて　桝田益子
こゝろなくさのなきすまぬかな

人とはぬむくらのやとのさひしさを　安井鎮子
こゝろともせぬなきのうはかせ

風ならてとふひともなきわかやとは　松尾せい子
みちさへ分かすしけるなきかな

とふひとのたゆし門邊のゆふくれも　椎野ぬき子
なきにはかよふあきのかせかな

あきかせはもらさゝりけりさと遠く　椎野秀子
さひしさにはのなきのうは葉に

とふ人もあらてさひしきゆふくれに　椎野森子
おとつれてふくなきのうはかせ

わひしくもなかむるにはの夕くれに　椎野鋭子
なきのうは葉をあきかせそふく

しつかなるくさのいほりを訪ふものは　福原薫子

ひとむらしけるなきのうはかせ

うつりゆく月日もわかぬかくれかに
あはれなそふるまつのしたなき　福井茂子

ひとりすむもくらかやとは人とはて
きくもさひしきなきのおとつれ　橋本小菊子

人とはぬむくらかやとにおとすなり
つきのかけすむなきのおきむら　嵯峨根千代子

秋かせになきのひとむらおとたてゝ
しつけきにはにふしみたれけり　中野はな子

かくれかのしつけきにはのやれかきに
つゆにみたれてそよくなきはら　瀧本春子

静かなるにはにみたるゝむらなきの
いまなさかりとなにそいてける　浦野こう子

静かなるにはにしけれるあきくさの
なかにましれるなきのひともと　長岡とめ子

むら里をとほくはなれてしつかなる
やとにもかよふなきのうはかせ　櫻井方子

いつの間に夏もすきけむかくれかの
にはのなきはらむしそなくなる　鴻　翠子

静かなるふせ屋のにはのなきのはゝ
あめにみたれていとゝそよける　小島ひさ子

静かなるにはなかむれはおとたてゝ
つきやまかけになきそよくなり　横地かすみ子

山さとにしつかにすめるしつか屋の
のきはにそよくなきのひとむら　馬渡眞砂子

静なるにはのなきはらそれのみか
はたなるむしもおとなたてけり　合田きのへ子

しつかなる山のいほりに来て見れは
のきはのなきにかせわたるなり　高橋芳子

やまかけのいほのゝきはにしけりあひ
つきまちかほになきそゝよける　田裂たま子

つくろはぬふせ屋のにはの荻の葉は
かせのまに〱うちそよきけり　田中ちゑ子

世にうとき草のいほりにすみなれし
身にもわひしきなきのかせかな　背島とく子

こゝろやる方しなけれはうきなから
なきのかせにもしたしまれけり　雨森つる子

かくれ家はとふ人たにもなきものを
なにさりくらんなきのうはかせ　野口靜子

おとつるゝ荻の葉かせはなか〱に
かなしさそふるあきのゆふくれ　佐々値賀子

しつけさも虫のなく音もかきつめて
あはれ身にしむなきのひとむら　吉澤よし子

とふ人もなきいほなれとおとたつる
なきのはかせにあきそしらるゝ　伊豫田ふく子

とふ人はおもひたえたるやとなから
おとろかれけりなきのうはかせ　阪本榮子

しつかなるところときゝて宿りしな
よすからさわくなきのうはかせ　早川たれ子

市にすむひとはゆめにもしらさらむ
ひとりすむ庵のなきのうはかせ　河合縫子

すゝみにと來し人たえてやまかけの
しつけきにはそなきのおとする　三宅中枝子

さひしさの常なるやとも身にしむは　服部萬子

あきのゆふへのをきのうはかせ

さらぬたにさびしきやとに音たてゝ
あはれをそふるをきのゆふかせ　服部正子

世をすてゝひとりすむなるわか庵は
なれてもさびしをきのうはかせ　大谷津米子

人とはぬわかゝくれかに音つれて
身にしみわたるをきのうはかせ　荒野たに子

人とはぬいほにしあれとあきされは
おとつれそむるをきのうはかせ　小畑まつ子

山すみのねさめわひしもよもすから
をきふくかせのおとはかりして　熊澤しつ子

すみひとのこゝろもしらす音たてゝ
のきはのをきにあきかせそふく　財田とみ子

世をさけし身をもたつねてうき秋の
かをこそかよへにはのをきはら　永井さい子

かくれかもふく秋かせのたつねきて
のきにみたるゝをきのともすり　山本梓子

わかいほはとふ人もなしをきのはの
かせにこたふるおとはかりして　富田きよ子

ひとり居のさびしき宿をおとつれて
あきをしらすかをきのうはかせ　杉浦いと子

世はなれてうきには遠くすみぬれと
身にしむものかをきのうはかせ　吾妻ちか子

のかれすむこゝろもしらておと高く
をきのうは葉にかせわたるなり　戸塚てつ子

ひとり居るやとは荻ふくあきかせに
おとなはるこそさびしかりけれ　方山あや子

すむやたれちりの外なるかくれ家に
あきをしらするにはのをきはら　川村松子

この中をよそにへたつるかくれかは
そよくそさびしにはのむらをき　平尾あさ子

さびしさをこゝろとすめる宿なるを
なにさわくらむをきのうはかせ　高石登代子

あきに風をきの葉さやくしはの戸の
ともなきやとはゆふへさびしも　樋口孝子

山ふかく世にかくれかのつれ〳〵を
おとつれそむるをきのうはかせ　佐野きやう子

淋しさになれてもあきのゆふくれは
をきのうはかせみにもしみける　瀬戸ゑい子

またしてもかせにそよめくからをきに
いさなはれけりひとゝおもひて　松原ゆきゑ子

日くらしのこゑあはれなる夕まくれ
そよくもさびしをきのうはかせ　戸賀崎治子

うちそよく荻の葉かせのさびしさも
かたるひとなきやとそわびしき　戸賀崎久子

いつもふく風にしあれとさびしさは
ともなきやとのをきわたるころ　園田婦美子

とふひとの絶てあとなきわかいほを
おとのふものはをきのうはかせ　高橋松江子



八月五日分兼題

暑中見舞の文

天　和泉國泉北郡深井村　福原壽美禮子

土用中とは申ながら、わきて、昨日今日は、黒金も溶くるばかりの炎熱、いと堪へがたく侍るを、君には、いかゞ渡らせ給ふや。御住居は、殊に御高臺にて、四方野原を見晴らせられ給へば、格別なる御暑さもおはさゞめれど、折からの御障りも、あらせ玉はざるや。日頃は、打たえ御音づれもいたさず、無禮の罪は、よきにゆるさせ賜はれかし。さては、此の氷砂糖一折、暑中御見舞のしるしまでに、かくは。いづれよき折をうかゞひて御地にまでもと思ひたまへ侍り。あら〳〵かしこ。

地　深川區大住町四番地　中村伊曾子

ひるなかは、草木もしほるゝ如き、あつさ、御國のはて南の方も思ひやられ候。この日頃、御一同様には、いかに渡らせ給ふらむ。尤とも、御家居は、園ふも廣く、住なし給へば、一きは御涼しさの、まさりて、被入候はむと、存じ候が、かつ、御左右伺ひ參らせ候。手前方は、同じ都のうちながら、市中の住居とて、ことに凌ぎかね候を、思ひやりたまはるべく候。此の梨一籠、川崎より送りくれ候まゝ、かねてより御孃様方御このみ之由承り候間、御粗末に候へども、差上申候。先は御見舞のしるしまで。あら〳〵かしこ。

人　上總山武郡増穂村　白石貞子

ふり續きたる五月雨の打かへしにや、わけて、今年は暑氣はげしきやう覺え申候。けさの新聞に、昨日は九十七度も騰り候由相見え候ひしが、私事在京の砌にてすら、あの通りに候へば、定めて、御凌ぎがたき御事と存じ候。次に、私宅一同、無事に相くらし居り候まゝ、乍憚様御安神なし下され度候。かねて申上候通り、神田橋の講習會へは、せひ出席致す心組にて、其の節は、親しくお目もじの上、御きげん御伺ひ申すべくと樂み居候處、少々差支生じ、ために、今回は殘念ながら見合せ候事に相成候間、あしからず御思召下され度願上候。毎度御話しいたせる九十九里の濱は、平凡の磯邊にて、諸所の海水浴に目馴れ候御君には、別段の風情もおはしまさぬ事とは思ひ侍れど、砂白く松青き一の宮と申所は、近年に至り、御地より

も澤山避暑遊ばさるゝ御方々も有之候由あれば一度は、ぜひ共御案内申上度、御ひまあらせ給はゞ、御妹子御同伴、十日位御滞在の御豫定にて御越し下され候様御待ち申居り候。時節柄、折角御養生専一に祈上げ候。何、末ながら、皆々様へよろしく聞え上げ下され度、先づは、御見舞までわら／＼かしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有隣子

此ころの暑さに、硯海も湯となり、茂林も枯れしぼみつるに、いかゞ御くらしあそばされ候か。伺ひ不り候御館の高楼には、朝夕の風すゞしく涼夜ともに、夏をわすれたまふらん。しかれども、照りわたる日影は、都もひなも。ひとしく。おはしまし候へば、避暑を御専一と存上候。時季の御消息を、音信たてまつらむと欲して、かくなし、あなかしこ。

中郡瑞子

とし月の神のみこゝろぞ、なか／＼にうたてききはみなる。さつきのころほひは、ほうしからぬさみだれの打ちつゞけしものを、このころは、いかで一ト村雨など日毎にれんじわびつるに、など、みそらに一ひらの雲だになき。庭の草木もしぼみはて、梢にすだく蟬の聲もいと苦しげに、庭に撒つるやり水さへもぶとくなる、水無月の此暑さには、いぶせき伏屋に住むくるしさは、甑のうちに蒸さるゝ心地し侍るを、まいて、ゆるう清やかにすまひしたまふとはいへ、夏しらぬ山里より、初めてらうがはしき都に移り玉ひし御身にはいかにうち惱ませ玉ふらむ。いとおぼつかなきまゝ、近くばふりはへて訪ましものを、海山とほくかけへだつ身は、それも、ねしおうせぬぞほいなき。聞けば、都の夏は、病多しとかや。されば、よろづに御心せられ、さきくましく玉へかし。まづは、せうそこして、みけしきうけたまはるになむ。あなかしこ。

赤倉かれ子

てりつゞきて、土さへさくといふ、此頃のあつさに、いかゞすごさせ給ふらん。御家居は、庭もひろく、山水などの、ながめもよしことに、北方の御別荘などへならせ給ふよし、日々かはらせ給ひて住なし給ひなば、木立やり水などゝかくべつに、涼しく候はんと、うらやましう存し上候。妾かたは、ところせきすまひにしあれば、いかで、一村さめふれかしと、庭の草木も、まちほねて、外より一入たへがたきを、思ひやり給へ。この、氷菓子は、めづらしからぬものなれど、妾の手製に候まゝ、御なぐさめまで、御らんにいれ候。ちかきほどに、さふらひてとは存じ候へども、まづは、時候御みまひ申上候。かしこ。

谷口房子

今朝の一村雨の、うれしと思ひしまもなく、又照りはたゝく空の、なか／＼堪がたうて、伏屋の内の苦しさは、さながら、こしきの内なる心地せられたる。廣らかなる御住居にはあれと、此の頃の野を行く小鹿の角のつかのまも、ひまなき御身にあれは、嘸なやませ給ふらんと、いとおぼつかなくて、一筆伺ひたるになん。

金津文子

花よ蝶よと狂ひまはりし彼の日も、はや、いつしか夢の如くにすぎ去りて、今しも、青葉色こき夏ざかりとこそ相成候、いと御暑はしきあなた様には、御きげん如何にわたらせ候らん、御伺申上まいらせ候。次に、妾事、御かげに依り、無異その日／＼をくらし居り候へば、御安心下され度候。さて、其後は、一度として御

何も申さず、いつも〱御無沙汰がちに候。さりながら、御慕はしきあなた様の事は、あけくれ忘れ申さず候へども、實は、日々の課業におはれひまなき我身なれば、何とぞ其へん御察し有之候うて、御ゆるし下され度候。ついては、待ちに待ちたる暑中休業も、最早や、四五日をあますのみに近づき候へば、山々なる話も歸省の後にゆづり、くはしく拜顔の上申上ぐ可く候間、左樣思召し下され度候。此の品、粗まつに候へども、當地の名物に候へば、暑中御見舞のしるしまでに、御目にかけ候故御笑味下され度候。先づは、つたなき筆もて、御見舞まで、あら〱かしこ。

篠田圓子

物しめ〴〵しかりし梅雨は、とく過ぎ去りて、早、蟬のもろ聲いと堪へがたき候と、なり侍りぬる折から、君には、如何にすぐしたまふらむ。元來、夏まけの遊ばす御性なるが上に、かてゝ加へて、此の年は、うち日さす都の御住居なれば、一際、御波がかたくおはしますならむと推しまつる。幸ひと、爰元にては、一同、何の障りもなう物し侍れば、余所事ながら、御きもじ易うおぼし給ひてよ。さりながら、昨今は、あしき病ひのいみじう流行いたすとの事故、そを避けむがため、日ならず、鎌倉の別莊へ趣かむとの心組に侍るまゝ、いかで、君にも、御差し支へおはしまさずば、此の群に入り給はずや。別に、是てふ御もてなしとては、あらぬ物から、唯、靑々たる山水を友として、いさゝかも、お氣を置かせ給ふやうの事は無之、丁度よき折とて、なめげながら御そゝのかし申侍るになむ。若し、思召あらば、こよなう嬉しう存じ侍る。先は、例のみゝずがきにて、一寸暑中御見舞まで。あら〱かしこ。

倉島いし子

てりはたゝきて、土さへ、さくといふ此頃の、暑けさ、時節とは、申ながら、誠に、堪へがたく候折から、御許樣には、如何に、渡らせられ候か。さだめし、御機嫌うるはしく、御くらしの、御事と、推し、まいらせ候。爰許と、異状無く、暮らし居候間、御心安う思し召し、下され度候。其の後は、打絶ね、御音づれもいたさぬは、日々針もつ業を、學ばんと、心がけ候まゝ、斯かる、不禮に及びしまゝ、平に御ゆるし下され度候。日々、あつくるしき、につけても、思ひ出づるは、御地の事、清く涼しき、山里に住み給ふ御身には、日中の、むすが如き、暑さも、嘸ぞかしうすらぎ候はんと、最と〱おうらやましう、存じまいらせ候。何か、暑中のおなぐさみにもとは、存じ候へ共、何も、思ひ當らず候まゝ、本月發行の女鑑、婦女子には、最とも、有益なる、本と、思召いたし、進じ參らせ候へば、御つれ〴〵の折々には、おひもとき下され度候。申上度き事は、澤なれど、拙なき筆の運ばぬに、先づは、時候の、御見舞まで。あら〱かしこ。

田代艶子

土さへさくといふなる、此頃の御あつけき、かの佛の御幽も、思ひやられ侍り。折からとて、御さはりもおはさずや。伺ひ奉りぬ扨も、御すまひは、市中のちりをばさけ給ひて、なつしらぬ、御ありさま、なれば、かゝる折には、木かげ、すゞしきやり水のあたり、はた、すゞ風ふきくる、高殿などへものし給はゞ、まだ、こぬ秋の、こひしうも、おはすまじくと、いと御うらやましうこそ。此方は、所がらとて、一しほあつさやらん方なく、ひるは文見る事も、ものうくて、只、夕風をまち居侍るのみ。さあれ、幸ひに、いつれもさはりなふすごし侍れは、他事ながら、御心安め給はるべくなむ。偖、此のこはいと御はつかしくは侍れど、きのふ、山里のしるべの許より、送りこしものに侍れば、いさゝか御つれづれの一はしにもと、さゝげ侍るにこそ。何れ、ちかきにさぶら

ひて、よろづはきこね上べけれど、まづは、文もて、御けしき伺ひまて。あなかしこ。

山崎たま子

いつしか更衣の節に移り、そよふく風も夏めきてより、いぶせき雨ふりしきり候らひて、さほどまでもおはさざりしが、ふりあがりのきのふけふ、さながら、むさるゝ心地して、しやかの産れし印度の國もかくやと思ひ堪へゐるにつけても、御塒の空の忍ばれ申候。さるは、本邦中にて、最も暑地に、住まさせ給ふ、御やかた、未だかゝる氣候に馴れさせ給はぬ御君には、如何ばかりの御あつさにや、推し計るだにあせばまれ申候。且、一昨日の新聞紙上に、伺ひまゐらする處によれば、名を聞くだに、身の毛もよだつ計りなりペスト病、氣候のあまり不順の爲とて、著しく流行いたし侍るよし、承り胸つぶれて心さわがれ、とる者も取あへず、一筆伺ひ奉候。御兩容をはじめまゐらせ、御君には、みぎのさはりもあらせられず、例の持病もいで給はぬにや。心もとなく存じやられ候まゝ、御けしき　かまほしく存じまゐらせ候。二、私方にも、暑々露の嬰りもこれなく候間、よそごとながら、御心安く思召し被下度候。偖て、この葡萄酒、此の内、某會社より初賣出しいたし候ものにて、よほど、暑中にかなひしものゝよし、承り候まゝ、廉少には候へど、未だ、御地に發行致し申さず候よしに候間御召し下され候はゞ、いと本意に御座候。萬行屆き給ひつる御許なれば、申すまでも候はねど、本州と違ひ、緯度も餘程ど異り居候やううけたまはり候間、此の上ながら、御養生、神かけてねぎ上まゐらせ候。

桝田益子

あらかれの土も裂べき此ころの暑さいかに、物し給ふらむ。ひときは、覚ね侍りて、うしろめたう侍るものから、廣らなるみ園を、清らにかきはらはせ給ひて、床夏の花の上に、塵もすゑず、やり水涼しくせきいれて、夏をよそに、こゝろすが〳〵しう住なし給へれば、いよいよ、平らかにおはしますらんと、嬉しう、侍り。心のうちには、おこたらずながら、打たゆみて、文だには奉らず、おろかにや、おぼしめすらん、罪さりがたうなむ。例の御すさびには、玉だれの小簾もる、月に、時鳥を待給ひ、御庭の、かくの木のみの香に昔しのび給ひて、霧の光りも、おもてふせつべき玉の御言の葉、あまとおひしげらせ給ふらん。夕風の吹きさそひて、葉こゝにもこぼれ來なば、如何ばかりか、嬉しうてぞ。御かぞいろ、せうこの君たちにも、よきにきこね給てよ。猶、今、暫し折すぐしてひまねて、まうのぼり、よろづ、御まのあたり、になむ。

玉しける清きみそのゝ涼しさに
　よの夏といふ物やなからむ

松尾せい子

茜さす日にあらかねの土は裂け、筧の水もかれ〳〵になりぬる此頃の暑さを、御あたり皆々樣には、如何に凌がせ給ふらん。御伺申上候。さらぬだに、所狹き伏屋の中は、あつさも一しほなれど、やからうちつどひ、心にへだつ雲もなく、あはれなる夕顏棚の下すゞみ、にひるの暑さを洗ひ去り候。いつしかも、庭の荻原風そよぎ、萩桔梗など咲き初め候。月影更けゆく窓の下、蟲の音のきこゆるは、秋ちかくなり候にや。日頃怠りの身は、今更に、關守なき月日の流れに驚かれ、明日は垣根の朝顏に、おくれじと思ふも、甲斐なしや。君には、學の道をたどらせ給ひて、貴き光陰を、さこそ惜しませおはすらめ。くだ〳〵しきたはごとに、妨げ侍りしを免し給ひてよ。先は、御氣色伺ひまゐらせたくてかくなん。あなかしこ。

吉澤よし子

草木も枯れなんばかりの、此頃の暑さ、たへがたく候へども、何れも様、御機嫌よく御座おはしまし候や。とりわけ、御老人様、和子様たちには、いかばかりかと、御同様、老人、小供の御座候、身には、御察し申上候、何卒〳〵、御自愛の程、ねんじ上候。こゝもと、老人、小供まで、幸に無事にまかりあり候まゝ、御心安うおぼしめし下され度候。横濱よりの土産として、天然氷、到來數し候まゝ、少々ながら、分ち差上參り候。暑さ忘れの伴とも、相成り候はゞ、嬉しう存じ參るべく候。先は右御見舞まで、かしこ。

阪本榮子

昨日今日は、御あつさ、俄かにいやまし、ほとけの生れし國も、かくあらむと、思はるゝばかりにおはし候折柄、いかに過させ玉ふにか承り度くなむ。暑きほどの御とじらひ、疾くに問ね上ぐへかりしを、例の、筆取るわざに拙く、かつ、何かと事繁き身とて、心にかゝりながらも、つひ、今日まで、御音づれを怠り居り候は、いとも面なき事になむ。いかで、さる方にはゆるし給ひてよ。さて、此のくずそうめん、國元より送り越し候まゝ、いさゝかながら、御裾分申上候。幸に、御口に叶へ候はゞ、こよなう嬉しく存上候。先は、あつさ御見舞まで。かしこ。

石川元子

文して申上候。時分柄まちしさくらもうつろひて、今はたゞ、くもまにさけぶほとゝぎすを待つのみと相成候。御家内皆々樣、あつさの御障りもなく御凌き遊され候や。其の後は、心にもなき御そねんに打過ぎ、失禮の程御ゆるし被下度候。今年は、長雨にて、いつもよりは涼しく候處、晴天に相成候てより、俄にあつさも加はり、誠に堪へかね候。さりながら、衞生のゆきとゞきたる有がたき御代とて、はやりやまひのうれひもなく、御互に安心に候。

此の頃は、私も暑中休暇にて、家にこもり居候まゝ、一度御いて被下度、都とはことかはり、田舍の事故、何の風情も無之候へ共、あを〳〵としたる山ゝ、清き流れなども、物めづらしきかと存候。何卒、皆々樣御つれたち、御避暑かた〳〵、御車に寄せ給はんこと、日々待ち居候。先は暑中御見舞まで、あまりは、御目にかゝりゆる〳〵御はなし申べく候。あら〳〵。

山口澄子

あら金の土もさくてふ此の頃のあつけさ、如何過させ給ふらん。物ふりたる山下水の清らけき御住居は、定めし、夏をも知らで、日々文の林をわけ給ふらむ御事と、いと〳〵、うらやましう存じ候。私方は、所せき住居に侍れば、日盛は、命と頼む風も絶へ、風鈴の音もなりやみて、いかにとも凌ぎ難く、只、氷を命とあへぎつゝ、日を送り居候。扨、此の夏菊は、祖父が、老後の樂みにとて、年々庭前に ゑさせ候ふに、今年は、わきて大きう咲き出で、只、一人もてはやさん事の、あたらしうおぼね侍りし折柄、かれ〳〵、祖母樣には、よろづの花をめでさせ給ふ事、胸にうかび候ふまゝ、小蝶の夢驚しつゝ切りとり、員して進じまさらせ候。尚。近頃、ほのかに承り侍れば、をちこちに、よからぬ病、流行致すよしにつき、折角、御休御大切に遊ばされ度、聊か、御注意申上候。よろづは、近きにさぶらひてこそと存じ侍れど、まづは、時候見舞申上度候、かくは拙き筆をとり候。かしく。

友澤武子

古人のいひやしけむ、まこと、不二のねの雪さへきゆる此の頃のあつさを、いかゞおはしますらむ。そこもとには、いとゞすがしく、すこやかに御くらしあそばさることゝおしはかるになん。この方にも、うちつれ、事なく日をすこし居候から、御心やすくしてよかし。さて、去年の此頃は、おなじ東の都にありて、同じ學の

窓に通ひて、ともにむとくといひて、あつき夏の日の夕はいとゞしき涼しき隅田の川にあせながして、互に、むつひかはせしな、今は、只獨りかしましき都に殘り、君は、彼てより、うはさありし涼しき殿にゆかしく樂まれ候こそ、こよなううれしく、うらやましくはへるになん。かく、昔をしのびこの頃の土さへさくるあつさに、拙なきふでに、蚯蚓がきしてみけしきうかゞふになん、あなかしこ。

くさぐ〳〵

皇孫御降誕を祝

桝田益子

呉竹のみ園はいよゝ茂りあひて
　み代の榮えの限りしられず

春の宮のみ園の園に朝日影
　にほひをそへてかゞやきにけり

呉竹の世々のしつめとあれましゝ
　みこの君の御代や萬ち世

おもひいで

金津文子

故郷を月にしのひてわが居れば
　山ほとゝきすなとつれにけり

そよと吹し風たにあらぬ夏の日は
　はなつひまなきさし扇かな

我がにはの松の梢になく蟬の
　聲もすゞしき夏の夕くれ

日の御旗ひろがへしらつゝいくさ艦

水きはに今や咲くらんかきつばた
　波わけゆけば月そてらせる

五月雨しげき夕くれのころ

夕立のこころ涼しき河の邊の
　柳のかげにとふほたるかな

少女子がそでふりかへす夏衣
　うすき袂に月の宿れる

このころ

金原玉城子

蚊やりたく賤がのきばにほの〳〵と
　くれてもにほふゆふがほのはな

なつのひの暑さをさけにいでつらむ
　しほあむひとのおほいそのうら

すまあかし月にゆくよのすゞしさに
　なつともしらぬたびのそらかな

更衣

福原菫子

櫻色はやぬきかへて今朝よりは
　たもともかろき蟬の羽衣

清風入管絃

野口信子

なりしもあれしらべあはせて糸たけの
　音にかよひくるかぜそすゞしき

野口靜子

をさまれる御代のすさびにいと竹の
　しらへすゞしくかすがよふなり

坂本豐子

松かげのゆにはゆかしきいとたけの

しらへにかよふかせのさやけさ　佐々小琴子

よのちりをさらひて風のさやけきは
かみのゆにはのいとたけのこゑ　佐々有隣子

糸たけのしらべにかぜのおとそへて
すかゝしもよ神のひろまへ

友の嫁きしと聞て送る

平塚みとり子

鳥のこゑなども、殊の外、春めき候ふにつれ、梅の花の時を得顔なるを、如何に物したもふぞや。其の後は、絶えて難波江のよしあしも承られば、最、心もとなうなん思ひ給ふる折ふし、友どちの許より文おこせたれば、取るものも取りあへず拜しまつり候處、御許様には、去る月、滯なく彼の君のもとに嫁かれ給ひぬるよし、目出度とも目出度、祝ひ參らせ候。つばさならぶるあしたつの、千代の契をこそ、如何斗か嬉しからめ。彼の君、行末頼母しくましませば、諸共にのどけき春の光に逢ふこと見るが如し。今更申に及ばねど、日頃の貞操をもて、重き務を全うし給はらばや。此の品、あまり粗品にて、げに心恥かしう侍れど、御祝儀のしるしまで、小包郵便もて閉に御送り申上げ候まゝ、御清玩下さる可く先は、右、御よろこびにと、かしこや。



後樂園拜觀記（巽）

山岡螢雪

●小盧山

得仁堂の前に森々として、古木生ひ茂りたる奇山ありけり。これ即ち、山城洛東の風致をうつしたる處、小盧山といふ。時の碩儒林道春文を撰し、斯景を摸してあますなし。曰、

洛東有山曰音羽。有寺曰清水。有瀧。故世稱曰小廬山。蓋仙釋之窟宅也。一旦移之於武野之邸。庭不盆而木。山不簀而數仭。不竺而飛來。不蓬瀛而分左股乎。銀河三千尺。大士觀瀑於此。草庵二百年。老翁留履于今。蓮社之橋雖無俗客之過。杏林之陰。自有眞仙之趣。遠而近者。望中千里。海山之佳景。朝而

碧者。雍上四時。風雲之變態。北嶺礬花。指梅以爲伯仲。即是補陀之堅坐也。東閼草木望風而知威々。可謂君子之成德歟。嗚呼偉哉。與其潔也。與其進也。添乎進此山色也。夫惟是清淨身無垢界者乎。

而して、歩を左りすれば、いとふるびたる萱門につきぬ。門内には、そのかみ神田上水を以て水車をつくり、其の流れを大堰川と、小廬山のはとり、飛沫紛々たる瀑泉に注ぎて、大に美觀を呈したりしも、星移り物かはり、今は、わずかに石材一部を存するのみ、然れど、水は鏡の如くに澄みて、清流潺々むかしながらの趣きあり。

●圓月橋

それより濃綠滴たるばかりの樹陰を過り、溪氣津く津たる流水のはとりに至れば、清涼掬すべく、こ



こに半月形の石橋あり。之れすなはち、圓月橋にして、園中の一美觀なり。はじめ明人舜水、深く義公光圀に寵せられ、特に命を蒙り、沈思默考數日の後、當時の名匠駒橋嘉兵衛をして、工を起さしめたるもの、結構壯大といふにはあらねども、流石に雅趣に富み、又其の堅固なること、實に驚くべく、彼の有名なる安政の大地震だに、依然として損する處なく、今なほ人を渡すべければ、當時その術の如何に進歩しつゝ有りしかをも、推諜らるべし。

若しそれ、金烏西に沈みて、澄み渡る長空一點の雲なく、世は悉く玉兎の有とあり、皎々たる光若葉をもれて影おはきころ、獨り橋上に停ずみ、苔むしたる橋欄に倚りて、四隣をなが

むれば、風しづかに聞として音なく、両岸の雑草露をむすびて玉かとうたがはれ、烟波ねむれる江面清うして名鏡のごとく、半月の橋かげ水上に浮びて、さながら満月のごとく、猿をしてもし樹上にあらしめば、例の長き手をたれ、如何ばかりか名月を取まほしくなさんものを。あはれ、如上の風光、神韻縹渺として、我が筆の及ばざるこそ遺憾なれ。されば、松亭子が親しく寫したる筆をかり、聊か、そが短を補ふ事とはなせり。



●八封堂

詩味饒なる圓月橋を渡り、鬱蒼たる老樹のあひだ、徑を行くことわづかにして、八封堂に着きぬ。堂は八角にして、角毎に八封を畫す。仍てその名ありといふ。今はむかし寛永六年、光圀年甫めて六歳、迎へられて水戸家の世子となりし、其の年十一月五日、祖母なる英勝院に從ひ、はじめて、時の將軍大猷公家光に謁す。公、一見、光圀の凡ならざるを察し、即ち、侍臣に命じて、數多の玩具を陳列し、其の好む所のものを撰ばしめ、窃にためす。光圀、即ち、謹み熟視する事暫にして、其の中より、文昌星の銅像を取り、之れを示して他を顧みず。家光大に感嘆し、手づからこれを授け左右にいつて曰く、此の兒將來必らず文學を以て、名を後世になさん、と、果して其の言の如く、長ずるにおよびて、益々、文學を研究し、博く國典、古儀に精通し、遂に、大日本史編纂の偉業を成し、以て大義名分を明らかにせし、其の蹟、實に靑史に赫々たり。嗚呼文昌星

や、鳴呼文章星、汝が左右にさゝぐる筆硯に日森羅萬象一つとして敵なく、誠に、生殺與奪の利劔にして、其の記する所は無限、その理想また無邊なり。されば光圀敬慕の情、日にあつく、後封を受くに及びて、此の像を茲に祭りしも、今は、金毘羅を安置しあれど、堂内は總て敷石にて、昔のまゝなりといふ。此の堂の側少しく高き處、熊笹生ひ茂りて、吹き渡る風の音すごき木かげに、いとおゝやかなる塚あり。これ即ち、小町塚にして、義公光圀が戯れに、水府小町村なる小町塚の石をうつしたるが故に、名づけたるなりと。

●蠟梅

八對堂の前に石階四十七段あり。人稱して、愛宕坂といふ。降れば程なく、老梅の蛾嵯たる枝頭、今なお名殘なく荒廢して、人の足をとゞめざれども、嚴冬漸く去りて、峻寒なほ料峭たるころ、枝をこゝにとゞめば、梅花繚亂として雪に咲き、暗香馥郁、花氣心骨に透るの趣きあらんか。權中納言光圀卿賦していはく、

此樹元從眞蝋來。移栽喜看園三開。
年前放蕊暗含馥。宮樣額黄清絶埃。
臘底凝枝横似玉。除醸帶露瀉金杯。
忠宜遺愛今猶古。春風山庭一樹梅。

更に又、權中納言源綱條卿は、

清淡蝋梅能似粧。玉枝金蕊骨嚴霜。
對花今識物同類。一般芳心由總香。

とうたはれたり。

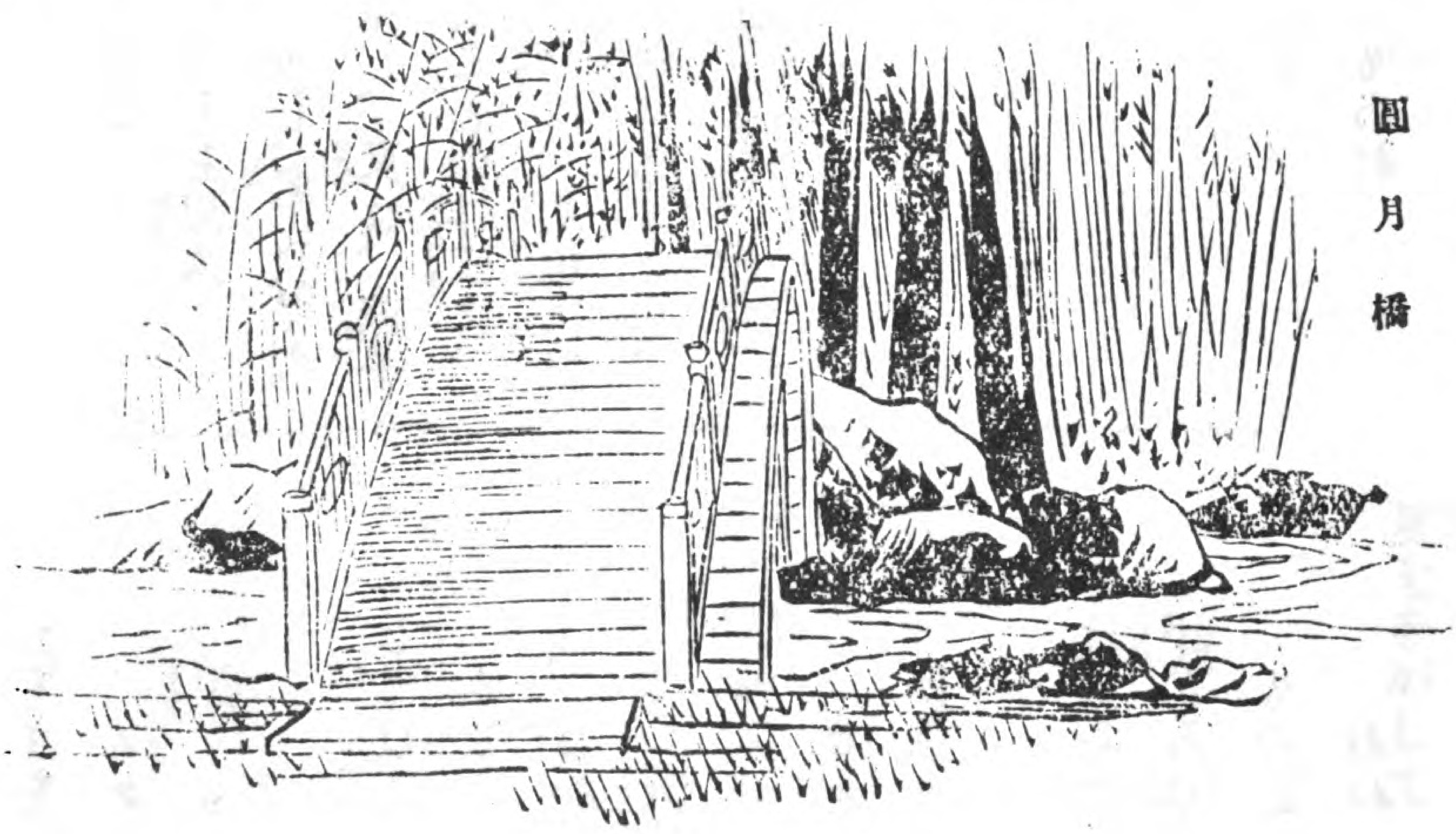
●醉月亭

疎影横斜の外、濃香芬々たる梅林の彼方、嵯峨丸太を以て建て、まことに、韻致に富める東屋あり。昔、唐朝の詩仙李白が、桃李園の序に、飛羽觴醉月といひし其の語を引きて、かくは名付しとぞ。又、夏のはじめともなれば、亭のほとりは、こゝかしこに黄金をちりばめたらん如き山吹の咲き亂

れて、いと、麗はしきより、またの名を、山吹の茶屋ともいへり。

●不老水

亭を出で丶、今を盛りに咲き匂へる江戸紫に、白きもまた一入のながめありて、さながら、天津乙女が胸飾の瑤絡かと疑はるるまで、いともやさしく垂れかかりたる藤棚の下をくゞりて、清く流るゝ小川をこせば、年ふりたる松の、いとをかしく龍のわだかまれる如き木かげに、石を穿ちて造りたる小き井戸ありて、其の上に篔簹衛茅ありけり。これ不老水にて七かはとも



圓月橋

稱し、如何ばかり晴れつゞきて、一滴の雨だになき旱天にも、或は、月余に渡る霖雨のころも、水量少しも増減せずとか。ああ、奇きなるかな。あはれ、其の名の因て起りたるも、けだし、こゝにあらんか。

●田端の水田

こは、義公が夫人をはじめ、敷多の侍女をして、下民の辛苦を知らしめんとて、特に、自ら指圖し以て、親しく耕作の業をなさしめ、且其の、収獲したるものは、悉く神にささぐるを例となせしが、い

つの頃よりか、彼の業平朝臣が、
から衣きつゝなれにしつましあれば
　はる〴〵きぬるたびをしぞ思ふ
と、そゞろに口吟み嘆賞せられたりし、名におふ、三河の八橋を摸し、或は、橋を架し、又は、燕子花など、あまた植込みて、時はことの外盛に、いと、優しく、美くしきにかへ、今は、次第に衰へたれど、僅ながらも昔の様の存せらるゝこそ、いと〳〵床しく、又、あはれ深き至りなれ。(未完)

夕立

ゆり子

てりつゞきたる　夏の日の
日でりに土も　さくる頃
草木もしをし　うなだれて
わつさになやむ　折しもあれ

たちまち空の　一方に
ムク〳〵ムク〳〵
黒くもこそは　おこりたれ
さてはとおもふ　程もなく
みる〳〵四方に　ひろがりて
日かげは見えず　なりはてゝ
天地もをぐらき　その中を
ぬふが如くに　いなづまの
ピカ〳〵　ピカ〳〵
きらめきいでたる　ものすごさ
すはこそ物の　おそへれと
おどろく處女子　うなゐ子ら
ものとりいるゝ　はしための
あわてふためく　耳もとに

何のようしやも　なるかみの
ゴロ／＼／＼　ピシャ／＼
はたゝく音ぞ　すさまじき
はやての風の　ふきいれて
小簾のつりては　切られたり

こはかな
はじと
立ち
よれば
すきもな
らせな
よて
さまに
うつはわられの　それならで
バラ／＼／＼　ザアー／＼



夏をながして　ふりいでぬ

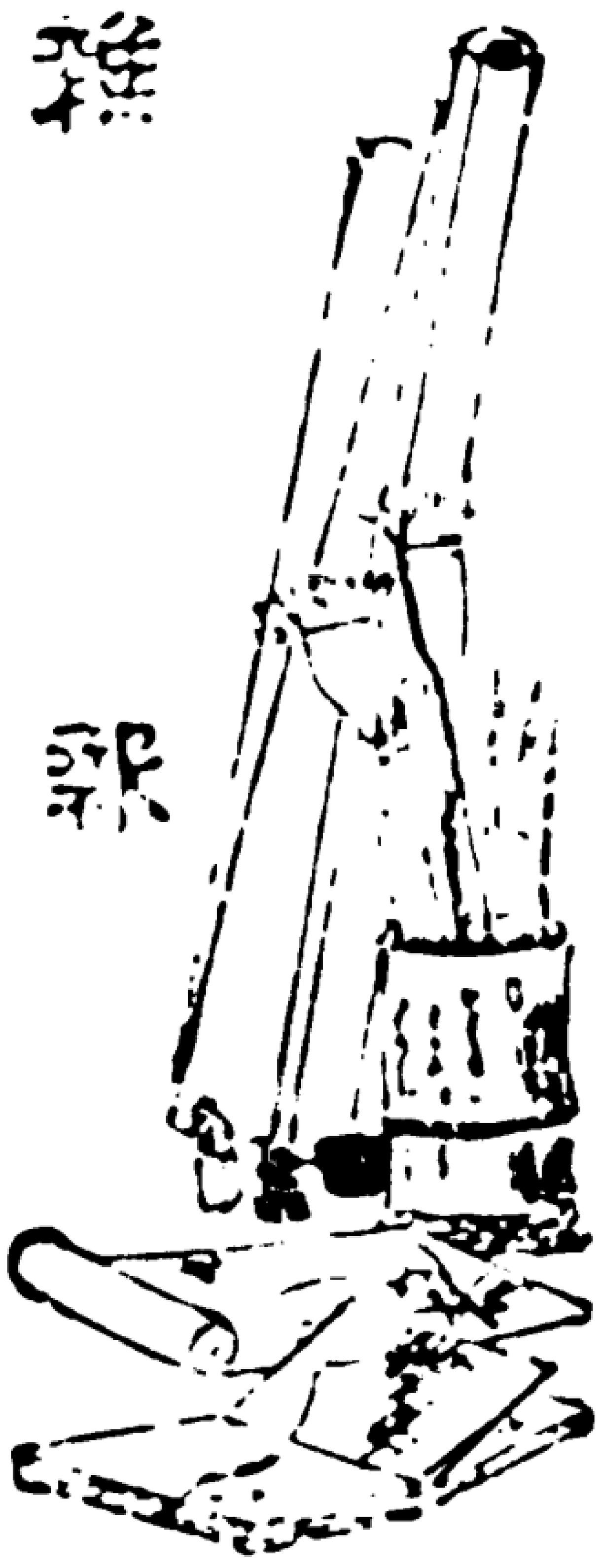
幼兒

與太生

位や戀ふる　名やのぞむ
さても父親は　何すらむ
朝に晩に　くるま驅り
母をもすてゝ　夜も居ず

母御はひとり　家をまもり
つれなき人も　うしとせず
かには斯には　すごせども
思は盡きず　夜も寢ず

たゞ幼兒は　何も知らず
乳房をさぐり　もてあそび
やがては睡る　その夢に
如何なることか　ゆめむらむ



挿繪

○宮廷錄事

聖上御避暑の事

申すも畏けれど、我　皇上陛下には、萬機の政務を御親裁あらせられ、殊に日清戰役後內外御多端となりしより、隆冬盛夏の候と雖も、宵衣旰食孜孜として、御勵精あらせらるゝにぞ、去る卅年以來未だ曾つて、避暑行幸等の事とてはあらず、最

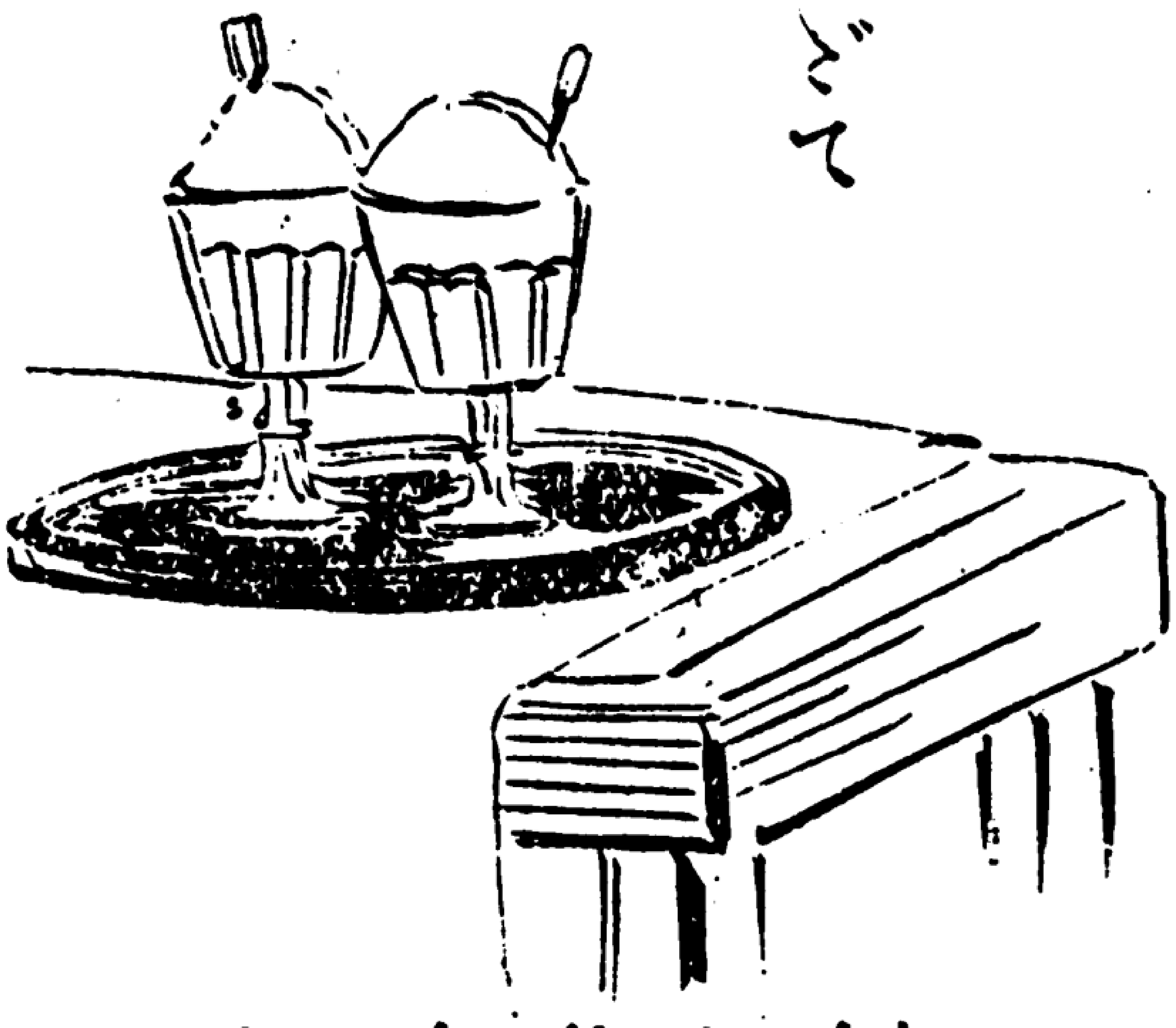
も三十一年の十一月には攝河に於ける大演習、又た卅三年四五月の頃には、海軍演習を攝海に御閱し給ひしことありしも、开は大元帥の御資格を以て統監あらせられしにて、決して御保養等の儀にあらず、されば常に御側近く伺候し奉る侍從侍醫の人々は、御避暑行幸の御事を、昨年も御勸め奉いらせんとしたるに、偶々北淸匪徒の事變ありて、遂に御沙汰止となりたるが、本年は同事件も既に一段落を告げ、內外御政務亦た少しく靜謐となりたれば、侍醫の人々は、今夏こそとて、昨今御避暑の爲め京都地方へ行幸御靜養あらせられんことを、謹みて勸奏し奉り居れりと承はるが、　聖慮の程如何あらせらるべきかは、測り難けれども、斯くと漏れ承はりたる、民草誰か萬機の御餘暇を以て、大御心を慰め給はん爲め行幸あらせ給はんことを、願ひ奉らざらんや。

●●●●●●●●●●皇后陛下の御下賜品

皇后陛下には、去にし日華族女學校卒業式に臨御あらせられ、卒業生を始め生徒一同に、懷中三德一個宛、細川校長其他職員一同には、特に七子一疋宛、御下賜あらせられたる由、漏承はりぬ。

●●●●●●●●●●東宮同妃川村伯邸行啓

皇太子、同妃兩殿下には、過ぎし十八日午後二時東宮御所御出門順路麻布飯倉なる川村伯邸へ行啓あらせられ、迪宮裕仁親王殿下御移轉後、初めて、御對顏あらせられ、而して川村御養育主任夫妻にも拜謁仰付られ、種々御言葉を賜りて、同四時過ぐるころ御還啓遊ばされたりと。因に、麻布區會にては、迪宮殿下が區內なる川村伯邸へ、御移轉遊されたるに付、非常警戒のため、先ごろ消防組特設の件を議決したりといふ。



東宮同妃兩殿下日光行啓

皇太子同妃兩殿下には、いよいよ、日光へ行啓あらせらるゝに付、御暇乞の爲め、去し廿七日午前十時三十分御參內、兩陛下に御對顏あらせられ、而して、正午御退出あそばされたる由。此日、日光へ供奉を仰せ付られたる諸氏は、即ち、

東宮大夫侯爵　中山孝麿
東宮侍講　本居豊穎
東宮侍從長子爵　高辻修長
東宮武官長　村木雅美

侍醫	西郷吉義
東宮武官	中村靜嘉
東宮武官	田内三吉
東宮侍從	三田守眞
侍醫	片山芳林
東宮武官	川畑平吉
侍醫	伊勢錠五郎
東宮侍從	丸尾錦作
東宮侍從男爵	多久乾一郎
侍醫	池邊棟三郎
東宮侍從子爵	大迫貞武
東宮武官従爵	清水谷實英
東宮武官	平賀德太郎
東宮侍從	有馬純文

（各通）

皇太子同妃兩殿下日光行啓供奉被仰付

又、特に、妃殿下の供奉には、萬里小路、正親町、吉見、生源寺等の各女官に仰付られたりと。

明れば廿八日、清涼なる朝風と共に、御豫定のでとく、午前六時十分兩殿下御同乘にて、東宮御所を御出門あらせられ、高辻東宮侍從長、村木東宮武官長御陪乘、其の他供奉の人々を從がへ、五十分上野停車場へ御着、暫時御休憩の後、有栖川宮殿下に御對顏遊され、又奉送の高等官、松本作業局長官、曾我日鐵社長等夫々に拜謁仰付けられ、七時御發車あらせられたり。當日奉送の重なる人々は、大山元帥、田中宮内大臣、同夫人、土方總裁心得、川村御養育主任、中山東宮大夫、長谷川近衛師團長、九條公、一條公、長崎調度局長、同夫人、岡侍醫局長、橋本博士、齋藤海軍總務長官、福島少將、阪本東京府書記官等ありき。而して、松本作業局長官、曾我社長、久保運輸課長、杉浦保線課長は日光驛まで奉送仕れり。

御田母澤なる御用邸へ御安着あらせられたるは、午前十一時二十五分の由、承はりぬ。

●●●●●

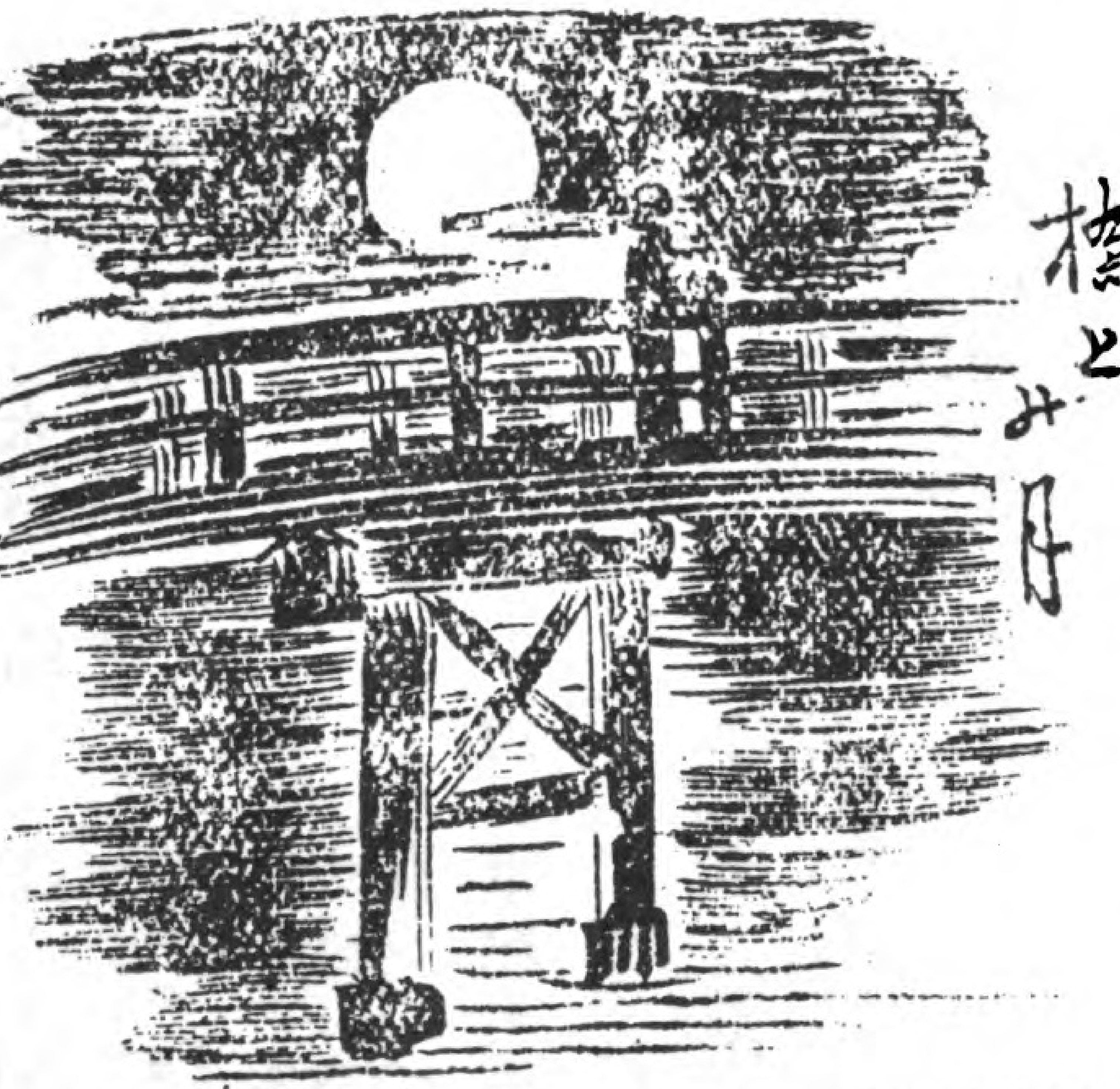
●迪宮御避暑期

裕仁親王殿下には、御避暑の

爲め日光御用邸に赴かせらるべき由は、旣に屢々聞きまつりしが、今承はる所に據れば、目下同御用邸は、疊、壁等に濕氣を生じ居り、當分風入をなして乾燥せしむる必要あれば、御避暑の時期は、多分八月五六日頃あるべしと云へり。

內親王箱根御成

雨天の爲めしばし御延引相成りたるが、富美宮、泰宮兩內親王殿下には、先頃すでに、林御養育主任夫妻、三浦侍醫外侍女數名を從へ、箱根宮ノ下御用邸へと成らせ玉ひしが、御姉宮にまします、常宮、周宮兩內親王殿下にも、御避暑として、御豫定の如く、高輪御殿御出門新橋御發車にて、去にし廿六日午前十一時四十分に箱根離宮



へ御安着あらせられたり。御供は、佐々木御養育主任夫妻、園、加賀美兩御用掛、渡邊侍醫外五名にて、之よりさき、汽車は國府津にて御下車あらせられ、暫時御休憩の上、電車鐵道に召させられ、湯本よりは、籐輿にて御靜に水淸き湖上の離宮へと成らせられたりと。夫れにつき當日は、川口宮內次官、長崎調度局長、下田歌子外數名の宮內官は、新橋停車場まで奉迎し、又、御通過の道筋は、各戸國旗を揭げて奉迎仕りたり。

●**天候奏上**　去にし廿日は土用入ありしを以て全國の天候如何との御下問ありしを以て、中央氣象臺よりは、各地の電報を取纏め、侍從職の手を經て遂一奏上に及びたる由。

●學習院卒業式　は、先日同院附屬校舍に於て擧行せられ、内、大學科卒業生(三人)には、宮庭より書籍(大日本辭林)一部宛、又東宮御使多久侍從よりは、優等生に同じく書籍(日本外史、日本辭林)を下賜せられたるが、皇族中、中學々科一年級の甲にて、御及第の方々をうけ玉はるに、

一等賞詞　上　北白川輝久王殿下
二等賞詞　中上　久邇宮鳩彦王殿下
三等賞詞　中上　久邇宮稔彦王殿下
　　　　　中上　北白川宮成久王殿下
　　　　　上　有栖川宮栽仁王殿下

の五殿下にして、就中輝久王、稔彦王の兩殿下は、一ヶ年間一日も御欠席なかりしかば、御勉強の廉を以て、更に賞詞を奉呈いたしたりといふ。

●陸海軍人への勅語　先ごろ第五師團なる凱旋部隊が擧げたる、勅語拜受式の勅語は、該師團に限りて、特に下し玉はりたるにはあらず、一般陸海軍人に賜はりたるものにして、本月十三日之を拜受し、陸軍大臣は第五師團及其の他陸軍一般に、海軍大臣は海軍一般に、夫々傳達したりと云ふ。即ち、茲に謹錄す。

勅語

客歳清國の變亂あるに當り汝等戮力勵精機に應して動き以て其の任務を盡し嘗て戒飭せし旨に遵ひ軍紀を重し風紀を肅にし歐米列國の軍と協同して克く戡靖の績を擧け帝國陸海軍の光輝を發揚せり朕深く之を嘉す汝將校以下將來益忠勤を效さむことを望む

○表彰錄

●岩崎家の美擧　比較宗教學の開祖、比較言語學の泰斗として名高きコツス、ミユラー氏の遺書は、その數一萬五千冊に近く、實に偉大の文庫に

して、十九世紀の著述中言語、宗教、文學、歴史に關する樞要の書籍を包含し、殊に東洋に關するもの夥しく比類稀なるものあるが、同博士の歿後其の遺言を附して賣却せんとし獨逸の二三大學に於て購得の企ありしが、未亡人は之を日本に賣らんことを望み亡博士の本意にも叶ふべしと云ひ、且つかゝる當代思想の大家の所有にして、歴史あり、實益ある文庫は、我國學術の進運に關する所多く、世界に於ける我大學の名譽ともあればとて、東京帝國大學に於てその購求を希望し、諸般計畫する所ありしも豫算の不足にて成就せず、遺憾とする所なりしが、岩崎男爵に於て全文庫を購求し、諸税運賃を合して、約三萬六千圓を支拂ひ、到着の上は之を東京帝國大學に寄贈する筈なるが、時の外相加藤高明氏も大に斡旋の勞を取りと云ふ。まことに、近來の美擧とすべし。（東、朝）

〇教の栞

●日本女學校　では、去にし十八日正午より、科外講演として、西校長が熱心に滔々三時間彼の有名なる春日局が父兄は勿論、其の祖先から同族に及ぼし、引て織田、豐臣、柴田、稻葉、明智等の系圖を引證し、頗る詳細に述られました。その大要は、他日本誌上に於て、諸媛に呈するときがあらうと思ひます。

全國各女學校卒業生　第七回

●米澤市高等女學校　第三回卒業證書授與式は、去ぬる三月廿三日午前九時を以て、例の如く擧行せられました。其の次第は、即ち、

一、生徒着席。二、參觀人着席。三、職員着席。四。來賓着席。五、一同敬禮。六、校長式ヲ行ノ旨ヲ告グ

七、校歌
一　その名も清き　米澤の　汀にむふる　姫小松　おごりの花に　習はざる　操の色こそ　ゆかしけれ
二　その名も清き　米澤の　汀におふる　女郎花　なまめく色に　習はざる　心の花こそゆかしけれ

八、勅語奉讀。　九、勅語奉答の歌。　十、證書授與。

其の卒業生氏名族籍は、

●本科卒業生

山形縣士族	上村	ふみ	山形縣士族	櫻	やそ
仝 士族	羽小田	のぶ	仝 士族	宇津江	よし
仝 平民	高橋	もと	仝 士族	賢間	きく
仝 士族	北澤	よし	仝 士族	高野	きん
仝 平民	新保	ますゐ	仝 士族	澁谷	じゆん
仝 平民	後藤	かよ	仝 士族	飯田	みつ
仝 士族	村山	ちゑ	仝 士族	青柳	のぶ
仝 士族	矢島	きく	仝 士族	山田	きう
仝 士族	廣瀬	ちよ	仝 士族	大澤	ゑい
仝 平民	菅野	とよ	仝 士族	長濱	まさ
仝 平民	大瀧	しん	仝 士族	土橋	はる
仝 士族	關原	こと	仝 士族	鬱沼	まつ
仝 平民	林崎	りう	仝 士族	山下	つるの
仝 平民	遠藤	やゑ	仝 士族	櫻井	しげ
仝 士族	鈴木	せき	仝 士族	井上	ひで

●裁縫科教員養成所卒業生

山形縣士族	綿淵	じう	山形縣平民	大沼	てい
仝 士族	齊木	しげ	仝 平民	佐藤	せい
仝 士族	小野	よしほ	仝 士族	船山	小菊

右證書の授與を終りまして、直に又、上村ふみ子から澁谷じゆん子に至る十名には、品行方正學術優等の廉を以て、又、後藤かよ子から井上ひで子に至る十九名には、學業勉勵の廉を以て、それ〴〵賞品の授與がありまして、後補習科一學年生關よし子には、特に山形縣知事より品行方正學術優等の廉を以て、硯箱を賞與せられましたさうであります。

十一、唱歌、思へばはてなき。　十二、校長近新次郎氏告辭

校長が卒業生に對して、慇懃に告辭せれました、其の大要は、

今日は本校第三回卒業證書授與の式を擧ぐるに際し本市長を始

め紳士諸君の御來臨を辱ふしたるは大に本校の光榮とする所にして不肖私も深く謝する所なり

備て卒業生諸子を是れまで數年の久しき間丁寧反復薫陶したることなれは今茲に改めて告ぐるの必用はあらされとも此の名譽ある盛式に於て聊か一言を述へて諸子に贐せんとす

諸子は幸に富裕の家に生れ殊とに明治の聖代に遭遇したるを以て人に卒先して高等女學校に入り數年の久しき螢雪の苦を忍ひ勉强を積み琢磨を重ねて目出度も今日正に女子として修むへき高等の學科を完了したるは實に諸子の幸福にして隨て社會に對する所の責任は甚た重大なり如何となれは今や高等女子の教育は創業の時なれは社會の人々擧て諸子の行爲進退に注目すること決して輕々にあらざるべし諸子本校を去るの後來に於ても益々奮發して愈々女子たるの品位を高ふすることを勤むへし

併し諸子は如何に學問し如何に知識を積み如何に道德を高ふするも女子は男子にあらず女子なりと云ふことを忘るへからす即ち本校教育の精神としたる畏くも教育勅語の聖意を遵奉するは勿論女子の特性として最も必要なる心性の優美を益々發揮して如何にも女子らしく爲すへし又勤儉質素の美風を愈々伸張して奢侈懶惰は斷して除却すべし要するに本校教育の目的は小學教員を養成するにあらず女子高等師範學校に入學せんとするものを養成するにあらず偏へに良妻賢母を教養するにあるのみ即ち舅姑に能く仕へ夫に從ひて家政を整理し能く子女を教養するな良妻賢母と云ふなり庶幾くは諸子永く本校の教育を忘るゝ勿れ

次に教育發成所卒業生に一言せん諸子を教養したる目的は本授業生とは其の趣きを異にすと雖も女子として心性を優美にし行爲を勤儉にと云ふ點に於ては蓋し違ふ所あらざるなり

而して違ふ所の點は一方は良妻賢母を目的とし一方即はち教員養成所卒業生は人を教育すると云ふことを目的とせり今より人を教育せんとする諸子の任亦た非常に大なり故に諸子は誠忠以て職務を奉し孜々諄々倦まず飽かず熱心に生徒を教育すへし此の盛大にして名譽ある式に於て贐けとして敢て諸子に告ぐる所なり云々

十三、知事祝辭。　十四、市長大瀧新十郎氏祝辭演説。

十五、卒業生總代謝辭。

己等をみなの道を學はむとてこの學び舍に立ち入りしはきのふけふのこゝちなんするを月日の小車よどみなくはや四とせの春秋を夢の間に積み重ねて今日なんおのれらが學びの業を終へてそがしるし文をさづけたまひかつくさ〲の賞品を賜るのみか校長はた市長の君より厚きみさとしの言のはさへ添へさせ給ふぞうれしきこれひとへに校長の君をはじめまつり師の君たちの永き年月いとねもごろに教へ導き給ひし御いつくしみにほかならず高きこと山より高くふかきこと海より深きみめぐみを何をもて報ひ奉るべき只これよりはひたすらにみ教のまに〲淑德

なみがき品位を高くしいへを治め子を育てゝは良妻賢母の實を全うし時に盛衰あり世に浮沈ありとも堅きくろ金の心をもてみ敎へを桝とたのみてこのあら浪をこき渡り家の業に世のなりはひに身をゆだねみめぐみの萬分一に報い奉らんと誓ふになむ

卒業生徒に代りて　上村ふみ

明治二十四年三月廿三日

十六、唱歌、卒業生。十七、一同敬禮。十八、來賓退場。十九、職員退場。二十、參觀人退場。廿一、生徒退場。

以上にて式全く終り、而して、休憩所に於て一同に茶菓の饗應がありましたさうです。因に現在生徒數は三百二十名で、內、補習科二學年拾四人、同一學年拾八人、本科四學年四十五人、同三學年七十四人、同二學年八十二人、同一學年八十七人、又、職員は十六名の由。校舍は、假校舍にて、頗る狹隘ですから、目下一大廣地に新築中だと云ふ事です。

●●●●●●●●●

●愛知縣名古屋高等女學校第三回卒業證書授與式は、去にし三月廿三日午後一時、同校講堂に於て擧行せられたり。入場者都て三百余名にして、當日の來賓は、第三師團將校、縣廳を始め各縣市立學校長、縣市名譽職、內外貴婦人令孃等、而して、補修科卒業生ヴァイオリン合奏、首席敎諭校吉つる子の學事報告、證書授與、市守校長の告辭、志水市長、愛知縣會議長內藤魯一氏、及び金城婦人會總代伊東てつ子の祝詞、卒業生總代補習科山田ふみ子、本科山田みう子、技藝專修科金森たま子等の答辭、同窓會員總代吉田たゞ子、在校生總代武山さく子の祝詞、而して又、補修科卒業生の風琴聯奏ありて、閉式後、成績品を來會者に縱覽せしめ、又、運動場に於て各科生徒の遊戯數番あり、終て一同に茶菓を呈したりと云ふ。其の卒業生の氏名は、即ち左の如し。

●補修科卒業生　（いろは順）

愛知縣　伊藤しやう　仝　石原ちよ

岐阜縣 岡田たゞ　愛知縣 竹村くめ
愛知縣 大鹽しづ　仝 山田ふみ
東京府 山村かう　愛知縣 松井たまね

●本科卒業生

愛知縣 岩田とも　仝 伊藤とき
鳥取縣 稻村はるね　長崎縣 今泉しづ
愛知縣 石黑たま　愛知縣 石黑あや
仝 林きん　仝 長谷川はるよ
仝 丹羽とよ　仝 丹羽なつ
仝 堀田かれ　福岡縣 十時なつ
愛知縣 渡邊ひで　山口縣 河村ます
愛知縣 川出げい　愛知縣 加藤きみ
仝 吉田かま　東京府 吉野すみ
福井縣 高屋そとを　愛知縣 高木たま
愛知縣 武山とみ　愛知縣 柘植とよ
鳥取縣 辻とみ　愛知縣 中川はつれ
愛知縣 中川こと　仝 中野しづね
仝 村瀨いつ　仝 村瀨ふみ
東京府 植村ちよ　愛知縣 野崎たま
愛知縣 大岩たれ　仝 大伴ちへ
仝 大村はつ　仝 大野ゆう
仝 大矢千代　仝 黑川しん

愛知縣 黑田しげ　長野縣 倉田はま
愛知縣 久野さだ　愛知縣 柳木たま
仝 山田つれ　仝 山田しう
仝 山口りやう　仝 前島いく
仝 松尾やへ　仝 松井まし
仝 松井てふ　埼玉縣 不破ますゑ
愛知縣 福井つぎ　東京府 幸田よし
愛知縣 江原たつ　佐賀縣 江島よし
愛知縣 阿知波ゑい　愛知縣 青山かう
愛知縣 青山つれ　仝 淺井大乘
仝 淺井松を　仝 秋田すま
仝 相原あや　大阪府 久德じう
愛知縣 水野ゑつ　愛知縣 水野ねつ
仝 柴田つれ　仝 澁谷千代
兵庫縣 樋口はつ　岐阜縣 菱田ぬい
愛知縣 森木やす　愛知縣 關谷ちやう
仝 杉藤なかよ　仝 杉山ゑつ
仝 鈴木ちか　仝 鈴木たい
仝 鈴木れい

●技藝專修科卒業生

愛知縣 石井あぐり　仝 林しづ
仝 金森たま　仝 熊澤かぎ

仝　篠田しう　仝　水野たれ
仝　水野すゞ　仝　宮脇ふさ
（以上）

●廣島縣師學校卒業式　同校女子部卒業式は、去にし三月三十日午前十時より同校大講堂に於て舉行せられぬ。式は例に依りて開始し、君が代の唱歌に次で、勅語奉讀あり、了つて皇御國の唱歌を奏し、而して、證書を授與せらる。其の人員は、

平民　井上トヨ　平民　井上コサワ
平民　近藤チヨノ　士族　三村シゲ
平民　桑田ナカ　士族　野村ハル
平民　關　ヨシ　士族　杉江メヅ
士族　三浦タカエ　士族　河野タカ
平民　仁科ミサヲ　平民　三山トキ
士族　柏田トヨ　士族　秋田[illegible]子
平民　伊藤ヒサ　平民　野村コマ
士族　山口ミツ　平民　原　ヤスノ
平民　三宅ナツ　平民　白井コマ
平民　相田ミツ　平民　井上トヨノ
平民　濱田イハ　士族　伊藤コウ

以上人名の內、在學中成績優良にして、硯箱一個を賞與せられしものは、即ち、

桑田ナカ子　井上コサワ子

了つて、江木知事は告辭を朗讀せられ、次に廣瀬校長は、一場の演說を試みられ、次で生徒總代として、橋本ヨウ子の祝辭あり。次に卒業生總代井上トヨ子は答辭を讀み、次で卒業式の唱歌を奏し、茲に式は全く終る、時正に正午。因に、同日來賓の重なる者を記せば、奥山控訴院長、一瀬檢事長、江木知事、山田書記官、田丸廣島地方裁判所長、新妻警部長、世古檢事正、淺川海軍大尉、伊村視學官、尾形職工學校長、柿崎廣島商業學校長其の他各學校長、職員、新聞社員等、五十餘名なりき。

江木知事の告辭、及び廣瀬校長が演說の大要は、すなはち次の如し。

告辭

玆に本縣師範學校卒業證書授與式を擧ぐるに當り多數の卒業生を出せしは殊に本縣敎育のため祝賀する所なり惟ふに諸子旣に多年螢雪の功を積みたり以て敎育上に於ける學識を知得せしこと少からざるべく又敎職の任たる其國家に負ふ所重且大なるも亦た旣に諸子の知得せし處ならん則ち勵精躬行以て其知德を涵養し熱誠忠實以て其職に盡瘁し國民敎育の普及に努力し必ず今日の光榮をして空ふせしむること勿れ　殊に女子卒業生は女子部再興以來最始の卒業にして千等が實踐の成否は本縣女子敎育の消長に關すること極めて多し是を以て女子は出て敎職に就くに當り唯一片の責任を効すのみならず入ては彌其婦德を修養し以て一般婦女子の模範たるを期せよ、是れ本官が諸子に切望する所にして又之を他日に徵せんと欲する所以なり諸子ソレ勉旃聊か所思を述べて之を祝し且つ誡す

廣島縣知事從四位勳三等　江木千之

卒業生諸子よ諸子が多年苦學の効顯はれ本日この盛場に於てかく貴顯紳士の面前に於て此の高尙美麗なる卒業證書を受けしは實に賀すべく獨り諸子のためのみならず又國家のため賀すべきなり諸子今日の榮譽は抑何人の賜なるか諸子の其完全なる身体と萬物の靈となるべき心意とを授け賜ひしは誰なるか諸子と相愛し相敬し互に害を責め過を規し艱難を共にし快樂と幸福とを同うし諸子を切磋琢磨したるは何人なるか又長き年月の間誠に親切に誠に熱心に諸子の道德を修養し身体を發達し諸子をして今日あらしめたるは何人なるか諸子が敎育を受けたるこの師範學校は抑も何人の設立する者なるか且つ諸子の衣服食物等何人の膏血より出でたる者なるか諸子は幸にも聖文武にして政を勵み賜ふ明治の御世に生れたればこそ太平を歎皷して學問を勉勵し今日の祭を担を得たるなり是を思ひ之を思へば諸子は卒業後滿身の熱血を滿腔の精神とを注ぎて國家の敎育に鞠躬盡力し以て父母朋友敎師縣民及聖明の恩に酬ふべきこと本分ならん玆に諸子と別るゝに望み一言以て辭とす諸子其れ深く胸に銘じ心に刻せよ云々

廣瀨校長演說

○一陣の涼風

●●●●●●●●萩原三室戶二翁の　先に特旨を以て宮中杖を差許されたる、萩原、三室戶の二翁略歷をきくに、萩原員光氏は文政四年正月十二日を以て京都に生れ、舊祿千石を食む、明治元年三月十七日從二

位に叙し、十七年七月八日特に子爵を授けられ、十九年一月二十日老年に付き思召を以て、金五十圓下賜、二十年一月十九日正二位に叙せられ、同三十三年一月二十日八十歳の高齢に付、思召を以て御紋付御杯一個、酒肴料金二十五圓下賜、三十四年六月二十一日従一位に叙せられたり。(二)、三室戸雄光氏は、文政五年十二月十日を以て京都に生れ、天保十一年十二月光格天皇の御服を賜はる、安政三年正三位に叙せられ、慶應三年十二月二十日孝明天皇御服を賜ひ、明治十六年九月二十九日従二位に叙し、十七年七月八日特に子爵を授けられ、二十四年三月三十日七十歳の高齢に付　御紋付御杯一個酒肴料若干下賜、二十六年六月十六日正二位に叙せられ、三十四年二月四日八十歳の高齢に付思召を以て御紋付御杯一組、酒肴料金二十五圓を賜はりたりといふ。あはれ幸運ある老翁かな。

●害蟲發生に付ての注意●●●●●●●●●

各地方にては、浮塵子螟蟲等の發生する恐あるより、當局者が之が豫防驅除法として、左の如く訓示されたる由。即ち、

▲浮塵子豫防驅除法　浮塵子を驅殺するには、石油乳劑を用ゆるを可とす。其の製法は、先づ洗濯石鹸廿四匁を細末に削り、熱湯を以て容解し、篩にて濾過し、其の冷却せざる前、直に石油一舛五合を徐かに加へて、攪拌して混製するに在り。之れを撒布するには、先づ稻田一反歩に、水を湛へ、油が稻の葉に附着せざる樣注意し、専ら稻株、即はち稻の葉梢部にのみ撒布し、藁箒の類を以て叮嚀に稻株を拂ひ、害蟲を落すに在りて、石油乳劑液、濃厚なれば、浮塵子驅殺力強けれども稻に害あるを以て、右の割合を超ゆ可からず。

▲螟蟲豫防驅除法　(一)本田及び苗代田に於て、燈火誘殺法を行ふ可し。(二)螟卵を苗代及び本田

に捜索し、稲藁と共に摘採すべし。(三)枯葉及び白穂は稲際より抜き取り、之を焼捨つ可し、(四)被害稲の苅株は土際より、株切鍬若くは鎌にて切斷するか、或は堆肥をなす可しといふ。

●●●●●●●

●山口中將以下の叙勳　北清事變に關し殊功ありし山口中將以下に對しては、先頃宮中に於て、勳章授與式を行はせられたるが、其の勳等は、山口中將は勳一等旭日大綬章、金鵄勳章功二級、眞鍋、塚本兩旅團長、及福島少將は、何れも勳二等旭日章、金鵄勳章功三級、柴中佐は勳三等旭日章、金鵄勳章功三級、に叙せられ、伺東郷常備艦隊司令長官は、勳一等に叙し旭日大綬章を賜はり、其の他兵卒に至るまで、着々として、論功行賞あるべしとぞ。

第一回繪さがし

太郎さんコーして、松の下で游泳するのは、實に涼しいれ……オヤ、次郎さん何かゐますよアソコニ……

讀者諸嬢も當て御らん。記者曰、分かりました方は、ハガキで御知らせを願ひたひのです。



喇嘛教貫主

先ごろ我國に來朝したる、喇嘛教貫主阿嘉師は、去る二十六日午前十時參内、陛下に謁見仰付けられ、それより大倉喜八郎氏の晝餐の饗應を受け、午後一時頃、帝國教育會に出席したるが、當日の集會者は無慮八百餘名にして、滿塲立錐の地なきほどありし。軈て、白尾文學士は開會の挨拶を爲し、次に阿嘉師壇に登り、西藏語にて、すなはちいへるやう、貴國軍隊は、我が雍和宮を保護して兵燹を免かれしめたるのみなら

す、貴國の軍隊は、列國の軍隊よりも規律嚴正にして、秒毫も侵さゝるの美風あり。爲めに、雍和宮に於ては、一人の死者もなく、負傷者もなく、又損害を受たる者も無りき。我等は、深く其の恩惠に感激し、速かに來朝して、謝恩の意を表せんと欲せしも、元來雍和宮は、淸國皇室の保護の下に成立するものなれば、皇帝西安に行幸して亂後未だ日あらざるの時に於て、到底外國に遊ぶ能はざる折柄、偶々貴國東本願寺派遣の、大河内氏が、大に我等の爲に斡旋の勞を執られし結果として、遂に今回貴國に來朝するを得るに至れり。

との趣意を述べられたりしを、隨行者劉明晨之れを支那語に通譯し、白尾文學士更に之れを日本語に通譯したり。次に滕剛文學士出でゝ、支那より齎らし來れる西藏文の一切經に關する談話を爲したり。

依て、同帝國教育會にては、貫主が招請に應じたる厚意に對し、感謝の意を表せん爲めに、伊萬里燒の桃形鉢と、金港堂より寄贈にかゝる日本小學校用の教授書三十二種を添て贈りたりと。

▲御禮參内　貫主は學頭を隨へ、淸國公使館員及東本願寺白尾理事同伴、宮内省へ出頭、田中宮内大臣を訪ひ、曩に北淸役の際雍和宮に於て、同貫主以下教徒三百餘名の餓渇に瀕せし際、我軍隊より分捕米の分與を受け、其他種々の保護を與へられたるを以で、我軍隊の好意に對する御禮の執奏を請ひ、次で、東御車寄に伺候し、左記獻上品の執奏を乞ひて、宮内大臣の許諾を得、又長崎式部官の案内にて、豐明殿、千草間等を拜觀したりと、其の獻上品は、

アール　一卷（四丈）　線香　一把
銅佛像　二體　繪佛像　一幅

の四種なりしよし。

▲喇嘛貫主婦人の帯止に驚く　貫主は先日其の旅館に玉賓堂主人を招き、腕輪、耳環、置物等數十箇を購入したるが、其の節錦、縮緬等の織物を見て、清國よりの輸入品なるかと問ひ、其の然らざるを聞きて、我織物業の巧妙を嘆賞し、尚ほ傍にありし美麗なる帯止を見て、購はんとせしが、婦人用のものなりと聞きて、驚くこと一方ならず、匆々之れを投げ出して、手を浄め、香を薫して齋戒したりとぞ、

あはれ、我が國の浮屠子たるもの、かゝる行跡を見聞して、赤面せざる者幾人かある。

●嗚呼川畑少佐　氏は去にし廿七日、東宮殿下に供奉して、練兵場に至る、時に騎り居る悍馬俄に暴れ回りしも、折こそ悪しけれ、少佐は僂痲質斯のため、乘伏す能はず遂に御所へ驅入御玄關に近づかんとせし途端、櫻の枝に腮をかけられ無慘にも花崗石の上に落て人事不省となりたれば、直に應急の手當を施せしも、腦震盪を起し遂に起たず、行年四十四、少佐は安政五年薩摩谷山郷に生れ、明治八年陸軍幼年學校に入り、十二年陸軍士官學校を卒業し、歩兵少尉に列せられ、正八位に叙せらる、十八年中尉に進み從七位となり、戸山學校に入り、十九年卒業し、二十年歩兵第三聯隊大隊副官に補せられ、正七位に進み、二十六年大尉に昇り、中隊長となり、日清戰役に從ひ、功五級金鵄勳章、及び年金五百圓、單光旭日章を賜はり、二十九年五月威海衛守備隊附仰付けられ、十月歸朝し、東部都督部副官に轉じ、三十年英照皇太后御靈柩奉送諸兵指揮官副官となり、三十一年二月少佐に、七月從六位に叙せられしが、不時の怪我にて危篤に陥るや、特旨を以て、正六位勳四等

に叙せられ、瑞寶章を賜はりたり。あはれ、軍人としてかゝる災に遇ひたる氏の心事果して如何、嗚呼。

●教師小兒の危險を援ふ●●●●●●●●　去にし日備前和氣郡和氣高等小學校体操教師國友謙三郎氏が、閉校後、同郡藤野村大字日ヶ原まで歸り掛りし、折しも五六才計りの小兒が、日笠川の鐵橋上を這ひつゝ無心に遊び居たるを認めしかば、危なしと聲を掛けしも、何分二丁余を距たり居ることとて、少しも心付かざる有様なるに、見れば五時十一分和氣驛發の上り列車が轟々と進み來たるにぞ大に驚き、一目散に田畑を横ぎりて、線路に飛び上りしも、其時既に汽車は鐵橋に懸からんとする刹那なりしかば、小兒の傍に行く事を得ず、已むなく兩手を擧げて大聲に停車を乞ひしを、運轉手が認めて直ちに進行を停めし故、小兒は危く命を拾ひ得たるが、此兒は、同村坂本早瀬の次男某(六年)といふ者にて、此ことを聞きたる親は大に喜び、早速國友氏の宅を訪ひて、深く厚意を謝せりと云ふ。注意すべき事にこそ。

一寸一口

▲諸孃も御承知の俗謡で「丸い卵も切りよで四角、物はいひよで角が立つ。」と恁ういふのがございますが、これをよく心得て置きますのは至極いゝことだらうと存じます。

▲さて、この俗謡に就きましては、成程と感心致しますことが、隨分澤山にあるやうです。少し淡話がはいりますが二つ三つ例えあげて見ませう。

▲「彼の方はほんとに自負心に富んでゐらつしやるよ。」と恁う褒めて申すことも出來るのですが、「彼の方の自負心の强いことつたらないよ。」と恁

う惡くにでもいはれるのです。

▲これと同じ様に、「隨分自信のあるお方だよ。」とでも、「自惚つてあんなのはまあ少ないわ。」とでも、そこは、見やうとりやう思ひやうで、どちらにでも勝手のいゝやうに申されます。

▲「獨立してますの。」と、威張つたらしく申しましても、「孤立なんだわ。」と、惡口される日には、何の價値もありませんです。

▲快活な立派などこへ出しても恥かしくないお孃さんが、蓮葉や、お轉婆に、取間違へられますのも隨分迷惑な話ですが、粗暴なのや、亂暴なのや、ぴんぴんはね廻る様なのが、活潑だ、明治の女子はあれでなくつちやあ駄目だなんどゝ、放蕩書生から稱讚の辭を辱うしますのも、あんまり有がたくはないです。

▲温順しい優しいのは、憶病だとか、卑屈だとか、何とかかんとか、惡い方にいつてのけられますし。靜かに事を行ひますと、ぬるくさいといひ、敏捷にやつてのけますと、氣早なといはれ、氣をきかして何でも先に廻つてやるやうにしますと、出過ぎるとか、ちよこざいなとか、よい加減なことをいはれるのです。一口に申しますと、引込めば出ろ。出ればそこのけの御命令なのですから、いやはややりきれたものではありません。まあ丸くにでも四角にでも、毀譽褒貶、罵詈讒謗、活殺自由自在、そこは什麽にも凭うにも、都合よくいふことの出來ます、口といふ重寳なものを、皆んなが一つづゝ持つて居るのですから、何とも致し方のない話です。が、謹まれるだけは謹みまして、いらぬことには、成べく口を出さぬやうに致したいものであります。

（都河不老投）

○口繪につきて

●飛沫紛々　いと、しめり勝なる連日の雨空、漸く晴れつくして、夏や一時に來りけん、烈陽灼灼暑を竹陰に避くるも、猶、流汗淋漓、身はさながら釜中にあるごとく、得堪へがたくして、庭の細に生ふる草の緑、あるは現に垂るゝ青柳の糸なども、悉く死するが如き今日このごろ、例の松亭子が此の作あり。あはれ卷を開けば、一條の飛瀑、岩頂より直下するもの、十仭、水太だ清く、飛沫紛々、其の水の結ばれては、玉簾の風にゆらぐが如く、銀河の大空より倒に落ちたりて、さらめく樣のうるはしさ。或は、玉の砕けて霰と飛び、響と散じ、更に、松籟泉聲と相ひ和しては、恰も百雷の轟くが如く、山風橫さに人の面を射り、爽氣骨に徹して、盛夏もなほ晩秋の如く、清涼いはん方ぞなき。

●群芳　豫告のごとく、日本女學校の生徒なる小川、大野の二子がものしたる可憐の筆、輕妙の作、あはれ、夏の暑さも萩としいへば、早、秋風すゞしき心地せられ、枝も重げに咲き匂ふ秋の花のそれよりも、更に光ひやゝかなる月影、上葉の露にやどりては、いとゞあはれもふかく、おのづから閑なる心の底もあらはれ、或は、立田の姫の織衣か、それにはあらで、つる子姫が描きたる紅葉ばの、いとうるはしく赤き心の筆のあと、二子が、まだ浮世の塵に染まぬ清らかさ、實に天眞なるこそいみじくも又床かしけれ。

●手俯　此の母ありて此の子ありとは、實に千古不磨の明言なり。史に稱す、誠忠却て鬼神も泣しめ、千載の下、能く賤婦野童をして、なほ敬慕の情を禁ずる能はざらしむ、彼の小楠公を見ず

や。孔夫子門下穢々として、別に一頭角を顯はし、其の片言天道を說き、隻語人道におよぼし、ひたすら人を戒しめ、以て據べきの大道を講じたる孟子賢人を知らずや。今特更に言ふまでもなけれど、山陽外史その人が、一大史家として、名を靑史に垂れたるも、其の因ておこる處は、これ皆、共に其の母の賜ならずや。山陽の生母梅颸子は、大阪の碩儒飯岡義齋の長女にして、實に幕府の儒官尾藤二洲が妻の姉なり。夫に仕て貞順、最も文章高妙にして書を能くす。卷頭の手簡躍如として、其の人となりを寫して餘すなし。又その文の流麗にして、雅趣ある優に文章の大家たる山陽の母なりと云ふべし。その作、觀月の文、のせて、本誌漫錄欄に収めたれば、就て見たまへかし。（紹州漁史）

○新刊批評

○よつちやん　菊地幽芳著

よつちやんは、おとうさんが、餘り愛しさに、よつちやんの平生を、飾らず包まず、ありのまゝに、お書きなすつたものですが、流石關西の小說家として、聞へた人だけあつて、行文の流麗なのと、其の筆の輕妙なるとには、わたいも深く感心いたしました。特に、大阪の出版物といふと大概は疎惡で、其の不進歩の甚しいものでしたが、此のよつちやんのうつくしい事といつたら、其の表紙の高尚優美なる、其の体裁の雅致ある、東都にすら稀に見る處で、かく迄も大阪出版界が進歩したかと思ふと、わたい等のやうな、文學に從ふ身の、何程うれしいかわかりません。先づ卷をあけると、蓋の床かしい花につゞいて、此の本を、おとうちやんが御出しになつた譯が書てある、其の一節に『だん〳〵に年も加はり、物心もつくやうになつた時、この本に對したならば、少なからぬ床しき感想に、打れるでもあらうし、また今更ならぬ親の慈愛を知るの一端ともなるであらう。そればかりではない、自分はこの本を、よつちやんの嫁入道具の一ッに、今から數へて置くので、特別上製にさした分、兩三册を桐の箱入として、ちやんと保存して置く考なのである。』と、よつちやんが花嫁さまにおなりのをり、此のご本をいたゞいて、どれ程親の情の厚きを感謝し、昔を偲びなさるであらうか、それから泣菓子がよつちやんに贈る

畝さ、其の次が寫眞石版でよつちやんのおさうちやんの其のおかあちやんの畝に、ついてよつちやん、次がおさうちやん、それからは、おさうちやんとよつちやん、それから又おかあちやんとよつちやんといふ順序によつちやんの、お寫眞が都合で三枚あるが、其の内おさうちやんに縋りかゝつて居なさる、よつちやんの少々笑を含だ可愛らしい顏のやさしさ、こゝに始めて、寫眞を見たばかりで、縁もゆかりもない、他人のわたいでさい、いとしうてたまりませんものな、其のお父ちやんやお母ちやんの嬉しさ、いかばかりかと思ひやられます。

此のご本は、閑なよつちやんの觀察、よつちやんの訴苦、歸省後のよつちやんの三項に頒ち、全篇悉く愛情を以て満たされて居ります……………で世のお父ちやんたり、お母ちやんたる人々は、是非この本を一讀し、家庭教育の參考として、以て、各々愛兒の身上に引きくらべたならば、必らず一種いふにいへぬ、何一層あたゝかい感情が起るだらうと思ふ。………だから、わたいは、當今の流行なる小說より、寧ろ、可憐なる此の樂々川でんこさな賞むと共に、己が創作者としての幽芳子より、よつちやんのおさつさんとしての幽芳子を世の人にひろめたいのであります。さよなら。　五月廿日大阪金尾文淵堂發行、定價金四十錢なり。

（盛岡軒主人）

○新刊寄書

偕行社記事	第二百六十七、八、九、七〇號、	東京	偕行社
兒童研究	第四卷第二、三號	東京	教育研究所
東京經濟雜誌	第一千八十二、三、四、七、九十、九十一、	東京	經濟雜誌社
大阪商業會議所月報	第九十九、一百號、	大阪	大阪商業會議所
慶應義塾學報	第四十一、二號、	東京	慶應義塾學報所
日本人	第百四十一號	東京	政教社
兵事雜誌	第十一、二、三號	同	兵事雜誌社
教育公報	第二百四十九號	同	帝國教育會
宮城縣教育雜誌	第七十號	仙臺	宮城縣教育會
信濃教育會雜誌	第百七十四、七、號	長野	信濃教育會事務所
越佐教育雜誌	第百一、三號	新潟	越佐教育雜誌社
東洋	第四、六號	東京	經緯社
埼玉教育雜誌	第二百二十八、九號	浦和	埼玉私立教育會
大日本山林會報	第二百二十三號	東京	大日本山林會
國家學會雜誌	第百七十二、三、號	東京	國家學會事務所
東京教育雜誌	第百三十八、九、號	東京	東京教育雜誌部
水交社記事	第百二十七、八、號	東京	水交社
大日本水產會報	第二百二十八號	東京	大日本水產會
香川縣教育會報告	第百四十號	高松	香川縣教育會

うらにしき	第百三、五號	東京	尚絅社
合德	第二卷第三、四號	東京	合德會本部
日本婦人	第十九、二十號	東京	帝國婦人協會
婦人とこども	第一卷第六、七號	東京	フレーベル會
眞信	第四十三、四號	三河	眞信會雜誌部
女學新報	第二十三號	東京	女學雜誌社
あけぼの	第一、二號	東京	あけぼの會
第十四學年報告		東京	共立女子職業學校
大日本婦人教育會雜誌	第百三十五號	東京	大日本婦人教育會
衛生俱樂部	第一卷第三號	東京	育成會
よつちやん		大阪	金尾文淵堂
家庭の教育		東京	文友館
方舞唱歌		東京	文友館
國學院雜誌	第七卷第七號	東京	國學院
家庭	第七號	山城	大日本佛教婦人會
女子のとも	第九十三、五號	東京	東洋社
姫百合	第四卷第一號	東京	姫百合社
愛國	第七十八號	美濃	愛國社
刀劍會誌	第九號	東京	刀劍會本部
婦人世界	第壹號	大阪	浪華婦人會
日本赤十字	第一百號	東京	日本赤十字發行所
產婆看護婦必携		東京	杉浦糸子
大八洲雜誌	第百八十一號	東京	大八洲館

社告

此の次の號から、新に落葉籠●●●といふ一欄を設けまして、讀者諸媛が本誌についての希望。或は問はんと欲する事。言はんと思ふこと。又は、一つの問題を提出して、相互の意見を發表し。其の他百般の通信を悉く此の欄に收める事にしましたから、續々投稿を願ひたいのです。尤も投稿の節は、次の規定を必らず守ていたゞきたひので御座ります。

落葉籠投稿規定

一、字体は階書に限る、但し漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ふべからず。

二、文体は投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰五行以内の事、但し可成はフリカナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は差閊なけれど、便宜の所へ必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は隨觀隨日何にてもよけれど有益にして興味あるものを望む。書式は次の例に依るべし。

●何國、何之誰曰、私の妹は今年九歳になりましたが、誠に學校へ參るのを好みませんが、ドーいふ方法にしましたら、進で行くやうになるでありませうか。

五、〆切期限は、月次兼題の歌文と同日の事。用紙は隨意。尤もハガキにてもよし。

○次號豫告

筆蹟　　德大寺侯爵

こは、一日德大寺侯爵閣下の邸に參り、特に本誌のために願ひたる眞蹟なり、あれは、誠忠謹直なる侯が筆、其の詠歌と共に、永く諸媛が龜鑑として、最も敬慕すべき者、請ふ次號をまて。

雨中蓮　　湘寛明

先きに、夏景色を寫して、好評を博したる畫伯寛明子が、特に諸媛のために、一日雨を犯して、不忍池畔にたゝずみ、以て其の眞をうつしたるものなれば、其高妙精緻なる、故て、記者が辯するをまたざるなり。

萬物萬事を整理する事を論ず　　細川十洲翁

翁が温厚篤實の君子にして、女子教育に熱心なるは、既にく諸媛の知る處にして、度々其の説をきゝて、啓發せし事、實に尠少にあらざらん、今回更に又、右の題目の下に諄々數千言以て記者に賜ふ所、如何に諸媛を益するか請ふ刮目してまて。

其の他例の如く趣味津々

女鑑歌文月次兼題

八月廿日分
歌　曉虫
文　逝
右八月九日〆切

九月五日分
歌　川霧
文　歸省中の感を記す
右八月二十四日〆切

九月廿日分
歌　月前雁
文　月見に友を招く文
右九月九日〆切

十月五日分
歌　擣衣
文　秋
右九月二十四日〆切

謹告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊雜誌及圖書等單に**國光社**とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず國光社**女鑑編輯部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告仕候也

東京京橋區築地二丁目廿一番地

女鑑編輯部

華族女學校學監下田歌子女史著（毎月一回發行）

少女文庫

全部六册　和裝上製

正價　●壹冊金拾五錢●三冊前金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢　郵稅壹冊六錢

博學高識女流の名家たる下田歌子女史曩に家庭文庫全部十二冊を完成して普く女子の心得ふべき事項を網羅し懇切に其學藝を指導せられたり故に世上に此編を愛讀せらるゝこと他書の比にあらず又少女文庫を起稿せられて少婦兒女の讀本に備へられたり文詞莊麗插圖又精妙を極む

第壹編お伽噺教草の插畫は山中古洞氏の筆にて三十有餘面以て本文の説明を補ひたり第貳編庭訓お伽噺の插畫は水野年方氏の筆にて廿五面を添ふ印刷鮮明紙質良好なり

第壹編　お伽噺教草　七月出版

第貳編　庭訓お伽噺　八月出版

第參編　內國少女鑑　九月出版

第四編　外國少女鑑　十月出版

第五編　家庭の心得　十一月出版

第六編　學校の心得　十二月出版

●第壹編お伽噺教草　この書は少女が家庭教育に稗益あらんことを希ふ爲めに、東西のお伽噺の中最も智德の涵養に利あるべしと思ふものを摘み、猶其れを、取捨增減して綴りたるものなり、されば噺の趣考は極めて嶄新なるもの多し。この書文章體は最も平易を旨として記したれば、側ら作文の初學びにも稗益あるべし、書中對話體は主として都の詞づかひを用ゐたれば、少女が對話の栞となるべし。なほ毎巻みな同じ文體を以て記すべし。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

日本赤十字社篤志看護婦人會講師 正五位勲三等 足立寛先生著作

日本赤十字社藏版

育兒談　總振假名付　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

通俗救急處置　總振假名付　正價金貳拾五錢　郵稅金四錢

日本赤十字社篤志看護婦人會教程　總振假名付　正價金四十錢　郵稅金六錢

看護學教程（看護婦教科書）　正價金壹圓　郵稅金拾錢

日本赤十字社看護人教科書　正價金六拾五錢　郵稅金八錢

富國の策は國民の身體健康を保つより先なるはなし身體の健康は育兒衛生に始まり一家衛生に中にし公衆衛生に終る此理は世人知らざる者なしと雖も之を行ふに法ありて其法を教ふるの良書世に乏しきが爲め知らず識らずの間に生を害ひ身を危くするもの舉て數ふべからず是啻に個人の不利のみならず抑亦國家の一大不幸といふべし

本書は前の陸軍醫務局長陸軍々醫監足立寛先生、日本赤十字社篤志看護婦人會に講師として會員に講授せられ或は看護人、看護婦の教科書として著作せられたるを上版せるものにして何人にも容易く衛生の要法を了解するを得べし自ら進みて子を愛し家を重んじ世に務むべき道を衛生上に求めんと欲する者は座右缺くべからざる珍書なり

本書は從來日本赤十字社部内のみに頒たれしが今般汎く希望者に布くこととなり弊所其取次賣捌を許可せられたれば多少遠近を問はず大方の求めに應ぜんとす請ふ陸續愛讀せられんことを

取次大賣捌所

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

日本赤十字發行所

電話本局千三百七番

女鑑

明治三十四年八月五日發行

毎月二回五日廿日發行　第貳百參拾四號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社[illegible]印刷